

平凡

二葉亭四迷

青空文庫

私は今年三十九になる。人世五十が通相場なら、まだ今日明日穴へ入ろうとも思わぬが、しかし未来は長いようでも短いものだ。過去つて了えば実に呆気ない。まだまだと云つてる中にいつしか此世の隙が明いて、もうおさらばという時節が来る。其時になつて幾ら足掻いたつて藻掻いたつて追付かない。覚悟をするなら今の中だ。

いや、しかし私も老込んだ。三十九には老込みようがチト早過ぎるという人も有ろうが、氣の持方は年よりも老けた方が好い。それだと無難だ。

如何して此様な老人じみた心持になつたものか知らぬが、強ち苦勞をして来た所為では有るまい。私位の苦勞は誰でもしている。尤も苦勞しても一向苦勞に負けぬ何時迄も元氣な人もある。或は苦勞が上^{うわすべ}に^{ぐらい}上^{としより}りをして心に浸みないように、何時迄も稚氣の失せぬお坊さん質の人もあるが、大抵は皆私のように苦勞に負^めけて、年よりは老込んで、意久地なく所帯染みて了い、役所の帰りに鮭を一切竹の皮に包んで提^さげて来る氣になる、それが普通だと、まあ、思つて自ら慰めている。

もう斯うなると前途が見え透く。もう如何様に藻掻たとて駄目だと思ふ。残念と思わぬではないが、思つたとして仕方がない。それよりは其隙で内職の賃訳の一枚も余計にしで、もう、これ、冬が近いから、家内中に綿入れの一枚も引張らせる算段を為なければならぬ。

もう私は大した慾もない。どうか忤が中学を卒業する迄首尾よく役所を勤めて居たい、其迄に小金の少しも溜めて、いつ何時私に如何な事が有つても、妻子が路頭に迷わぬ程にして置きたいと思うだけだが、それが果して出来るものやら、出来ぬものやら、甚だ覺束ないので心細い……

が、考えると、昔は斯うではなかった。人並に血氣は壯だったから、我より先に生れた者が、十年二十年世の塩を踏むと、百人が九十九人まで、皆じめじめと所帯染みてうのを見て、意久地の無い奴等だ。そんな平凡な生活をする位なら、寧ろ首でも縊つて死んだ、などと蔭では嘲けたものだだったが、嘲けている中に、自分もいつしか所帯染みて、人に嘲けられる身の上になって了つた。

こうなつて見ると、浮世は夢の如しとは能く言つたものだと思ふ。成程人の一生は夢で、而も夢中に夢とは思わぬ、覺めて後其と氣が附く。氣が附いた時には、夢はも

う我を去つて、千里万里を相隔てている。もう如何する事も出来ぬ。

もう十年早く気が附いたらとは誰しも思う所だろうが、皆判で捺したように、十年後れて気が附く。人生は斯うしたものだから、今私共を嗤う青年達も、驕ては矢張り同じ様に、後の青年達に嗤われて、残念がつて穴に入る事だろうと思うと、私は何となく人間というもの、果敢ないような、味気ないような、妙な気がして、泣きたくなる……

あッ、はッ、は！……いや、しかし、私も老込んだ。こんな愚痴が出る所を見ると、愈老込んだに違いない。

二

老込んだ証拠には、近頃は少し暇だと直ぐ過去を憶出す。いや憶出してても一向憶出し榮のせぬ過去で、何一つ仕出来した事もない、どころじゃない、皆碌でもない事ばかりだ。が、それでいて、其失敗の過去が、私に取つては何処か床しい処がある、後悔慚愧腸を断つ想が有りながら、それでいて何となく心を惹付けられる。

日曜に妻子を親類へ無沙汰見舞に遣つた跡で、長火鉢の側で徒然としてみると、半

生の悔しかった事、悲しかった事、乃至嬉しかった事が、玩具のカレードスコープを見るように、紛々と目まぐるしく心の上面を過ぎて行く。初は面白半分に目を瞑つて之に対つている中に、いつしか魂が藻脱けて其中へ紛れ込んだように、恍惚として暫く夢現の境を迷っていると、

「今日は！ 榊屋でございます！」

と、ツイ障子一重其処の台所口で、頓狂な酒屋の御用の声がする。これで、私は夢の覚めたような面になる。で、ぼやけた声で、

「まず好かつたよ。」

酒屋の御用を逐返してから、おお、斯うしてもいられん、と独言を言つて、机を持出して、生計の足しの安翻訳を始める。外国の貯蓄銀行の条例か何ぞに、絞つたら水の出そうな頭を散々悩ませつつ、一枚二枚は余所目を振らず一心に筆を運ぶが、其中に曖昧な処に出会してグツと詰ると、まず一服と旧式の烟管を取上げる。と、又忽然として懐かしい昔が眼前に浮ぶから、不覚其に現を脱かし、肝腎の翻訳がお留守になって、晩迄に二十枚は仕上げる積の所を、十枚も出来ぬ事が折々ある。

こうどうも昔ばかりを憶出していた日には、内職の邪魔になるばかりで、卑しいようだ

が、錢ぜににならぬ。寧いつそのくされ、思う存分書いて見よか、と思つたのは先達せんだつの事だつたが、其後そのこ——矢張り書く時節が到来したのだ——内職の賃ちやうと訳が弗ふつと途切れた。此暇このひまを遊あそんで暮すは勿体ない。私は兎に角書いて見よう。

実は、極く内々ないないの話だが、今でこそ私は腰弁当と人の数にも算かずまえられぬ果敢はかない身の上だが、昔は是れでも何の某なにがしといや、或るサークルでは一寸名の知れた文士だった。流石に今でも文壇に昔馴染むかしなじみが無いでもない。恥を忍んで泣付いて行つたら、随分一肩入かたづれて、原稿を何処かの本屋へ嫁かたづけて、若干なにかしかに仕て呉れる人が無いとは限らぬ。そうすりや、今年の暮は去年のような事もあるまい。何も可愛かわゆい妻子つまこの為だ。私は兎に角書いて見よう。

さて、題だが……題は何としよう？ 此奴こいつには昔から附つけ倦あぐんだものだッけ……と思案の末、碯はたと膝ひざを拊うつて、平凡！ 平凡に、限る。平凡な者が平凡な筆で平凡な半生を叙するに、平凡という題は動かぬ所だ、と題きまが極る。

次には書方だが、これは工夫するがものはない。近頃は自然主義とか云つて、何でも作者の経験した愚にも附いさかぬ事を、聊いさかも技巧を加えず、有ありの儘に、だらだらと、牛の涎よだれのように書くのが流行はやるそうだ。好い事が流行はやる。私も矢張り其で行く。

で、題は「平凡」、書方は牛の涎よだれ。さあ、是からが本文ほんもんだが、此処らで回を改めたが好かろうと思う。

三

私は地方生れだ。戸籍を並べても仕方がないから、唯某県の某市として置く。其処で生れて其処で育つたのだ。

子供の時分の事は最う大抵忘れて了つたが、不思議なもので、覚えてゐる事だと、判はつき然と昨日きのうの事のように想われる事もある。中にも是ばかりは一生目の底に染付しみついて忘れられまいと思うのは十の時死別れた祖母の面かおだ。

今でも目を瞑ねむると、直ぐ顕まぎ然と目の前に浮ぶ。面おも長ながの、老人だから無論皺しわは寄つていたが、締つた口元で、段鼻で、なかなか上品な面かお相あひだつたが、眼が大きな眼で、女に強過きつすぎる程権けんが有つて、古屋の——これが私の家うちの姓だ——古屋の隠居の眼と叫しやうめいたら、随分評判の眼だつたそうだ。成程然ういえば、何か気に入らぬ事が有つて祖母が白眼しろめでジロリと睨にらむと、子供心にも何だか無氣味だつたような覺おぼえがまだ有る。

大抵の人は氣象が眼へ出ると云う。祖母が矢張り其だった。全く眼色のような氣象で、勝気で、鋭くて、能く何かに氣の附く、口も八丁手も八丁という、一口に言えば男勝り……まあ、そういった質の人だったそう、——私は子供の事で一向夢中だったが。

生長後親類などの話で聞くと、それというが幾分か境遇の然らしめた所も有ったらしい——というのは、早く祖父に死なれて若い時から後家を徹して来た。後家という者はいつの世でも兎角人に影口言れ勝の、割の悪いものだから、勝氣の祖母はこれが悔しくて堪らない。それで、何の、女でこそあれ、と氣を張る。氣を張て油断をしなかったから、一生人に後指を差されるような過失はなかった代り、余り人に愛しもされずに年を取って了つて、父の代となつた。

父は祖母とは全で違つていた。如何して此人の腹に此様な人がと怪しまれる程の好人物で、面も薩張り似ていなかった。大きな、笑うと目元に小皺の寄る、豊類した如何にも愛嬌のある円顔で、形も大柄だったが、何処か円味が有り、心も其通り角が無かった。快活で、蟠りがなくて、話が好きで、碁が好きで、暇さえ有れば近所を打ち歩き、大きな嚏を自慢にする程の罪のない人だった。祖父が矢張然うであつたと云うから、大方其氣象を受継いだのであろう。

父は此様な人だし、母は——私の子供の時分の母は、手拭を姉様冠りにして襷掛けで能くクレクレ働く人だった。其頃の事を誰に聞いても、皆阿母さんは能く辛抱なすつたとばかりで、其他に何も言わぬから、私の記憶に残る其時分の母は、何時迄経つても矢張り手拭を姉様冠りにして、襷掛けで能くクレクレ働く人で、格別如何いいう人という事もない。

斯ういう家庭だったから、自然祖母が一家の実権を握っていた。家内中の事一から十迄祖母の方寸に捌かれて、母は下女か何ぞの様に逐使われる。父も一向家事には関係しないで、形式的に相談を受ければ、好うがしよう、とばかり言っている。然う言っていないと、祖母の機嫌が悪い、面倒だ。

母方の伯父で在方で村長をしていた人があつた。如何したのだから、祖母とは仲悪で、死後迄余り好くは言わなかつたが、何かの話の序に、阿母さんもお祖母さんには随分泣されたものだよ、と私に言つた事がある。成る程折々母が物蔭で泣いていると、いつも元氣な父が其時ばかりは困つた顔をして何か密々言っているのを、子供心にも不審に思つた事があつたが、それが伯父の謂うお祖母さんに泣かされていたのだつたかも知れぬ。

兎に角祖母は此通り氣難かし家であつたが、その氣難かし家の、死んだ後迄尊に残る

程の祖母が、如何どういうものだから、私に掛ると、から意久地がなかった。

四

何で祖母が私に掛ると、意久地が無くなるのだから、其は私には分らなかった。が、兎に角意久地の無くなるのは事実で、評判の気難かし家が、如何どうにでも私の思う様になつて了う。

まず何か欲しい物がある。それも無い物ねだりで、有る結構な干菓子ちよつとは厭で、無い一文菓子が欲しいなどと言出して、母に強求ねだるが、許されない。祖母に強求ねだる、一寸洩る、首くび玉たまへ噛り付かじいて、ようようと二三度鼻声で甘垂あまたれる、と、もう祖母は海鼠なまこの様になつて、お由よし——母の名だ——彼様あんなに言うもんだから、買つて来てお遣りよ、という。祖母の声掛りだから、母も不承々々起たつて、雨降あめふりでも私の口のお使に番傘傾かたげて出懸けようとする。斯うなると、流石さすがの父も最う笑つてばかりは居られなくなつて、小言をいう。私
が泣く、祖母の機嫌が悪い。

「此様こんな小さい者を其様そんなに苛いじめて育てて、若しか俊坊としぼうの様な事にでもなつたら、如何どうおし

だ？　可哀かわいそうじゃないか。」

というのが口切で、ボツリボツリと始める。俊坊というのは私の兄で、私も虚弱だった
が、矢張やっぱり虚弱で、六ツの時と偷とられたのだそうだ。それも急性胃加答いカタル児で偷とられたのだと云
うから、事に寄ると祖母が可愛がりごかしに口を慎ませなかった祟たたりかも知れぬ。併し虚弱
な児は大食させ付ると達者になると言われて、然うかなと思う程の父だから、祖母の矛盾
には気が附かない。矢張やっぱり有触れた然う我儘をさせ付けては位ぐらいの所で切脱きりぬけようとする。祖
母も其は然う思わぬでもないから、内ない々自分が無理だと思っただけに激する、言葉が荒く
なる。もう此上おこ憤おこらせると、又三日も物を言わなかった挙句、ぷいと家うちを出て在ざいの親類へ
行つた切帰きりらぬという騒さわも起りかねまじい景色なので、父は黙つて了う。母も黙つて出
行く。と、もう廿分も経たつと、私が両手に豆まめ振ねじを持って雀こおどり躍どりして喜ぶ顔を、祖母が眺
めてほくほくする事になつて了う。

斯うして私の小さいけれど際限の無い慾が、毎いっも祖母を透とおして遂げられる。それは子供
心にも薄々のみにめ了解りるから、自然家内中で私の一番好すなのは祖母で、お祖母さんお祖母さん
と跡を慕う。何となく祖母を味方のように思っているから、祖母が内に居る時は、私は散
々我儘を言つて、悪たれて、仕度したいさんまい三昧を仕散らす、留守だと、萎靡いじけるのではないが、

余程よつぽど温順おとなしくなる。

其癪そのくせ私は祖母を小馬鹿にしていた。何となく奥底が見透みすかされるから、祖母が何と言つたつて、些ちとも可怕こわくない。

それを又勝氣の祖母が何とも思っていない。反かえつて馬鹿にされるのが嬉しいように、人が来ると、其話をして、憎い奴でございと言つて、ほくほくしている。

両親も其は同じ事で、散々私に悩まされながら、矢張何とも思っていない。唯影でお祖母ばさんにも困ると、お祖母ばあさんの愚痴こぼを零すばかり。

私は何方どっちへ廻つても、矢張好い兎こだ。

五

親馬鹿と一口に言うけれど、親の馬鹿程有難い物はない。祖母は勿論、両親とても決して馬鹿ではなかったが、その馬鹿でなかった人達が、私の為には馬鹿になって呉れた。勿体ないと言わずには居られない。

私に何の取得がある？ 親が身の油を絞つて獲た金を、私の教育に惜気おしげもなく掛けて呉

れたのは、私をあッば天晴れ一人前の男に仕立てたいが為であつたらうけれど、私は今びよう眇たる腰
弁当で、浮世の片影かたかげに潜んでいる。私が生きていたとて、世に寸益もなければ、死んだ
とて、妻子の外に損を受ける者もない。世間から見れば有つても無くても好い余計な人間
だ。財産なり、学問なり、技能なり、何か人より余計に持つてゐる人は、其余計に持つて
ゐる物を挟さしはさんで、傲然として空そらうそぶ嘯みちばたいていても、人は皆其足下に平伏する。私のように
何も無い者は、生活に疲れて路傍みちばたに倒れて居ても、誰たれひとり一人振向いて見ても呉れない。
皆素通すどおりして々さッさと行つて了う。偶立止る者が有るかと思えば、熟つらつら視て、金持なら、う
う、貧乏人だと云う、学者なら、うう、無学な奴だと云う、詩人なら、うう、俗物だと云
う、而そうして々さッさと行つて了う。平生へいぜい尤も親らしい面かおをして親友とか何とか云つてゐる
人達でも、斯うなると寄つて集たかつて、手て手で手に腹散々私の欠点を算え立てて、それで君
は斯うなつたんだ、自業自得だ、諦め玉え々と三度回向えこうして、彼方あちら向いて々さッさと行つて
了う。私は斯ういう価値の無い平凡な人間だ。それを二つとない宝のように、人に後指を
差されて迄も愛して呉れたのは、生れて以来今日迄何万人となく人に出会つたけれど、
其そのうち中で唯祖母と父母あるばかりだ。偉い人は之を動物的の愛だとか言つて擯斥けなされるけ
れど、平凡な私の身に取つては是程有難い事はない。

若し私の親達に所謂教育が有つたら、斯うはなかつたらう。必ず、動物的の愛なんぞは何処かの隅に窃と蔵つて置き、例の靈性の愛とかいうものを担ぎ出て来て、薄気味悪い上眼を遣つて、天から振垂つた曖昧な理想の玉を睨めながら、親の權威を笠に被ぬ面をして笠に被て、其処ン処は体裁よく私を或型へ推込もうと企らむだろう。私は子供の天性の儘に、そんなふやけた人間が、古本なんぞと首引して、道楽半分に拵えた、其癖無暗に窮屈な型なんぞへ入る事を拒んで、隙を見て逃出そうとする。ドツこいと取捉まえて厭がる者を無理無体に、シヤモを鶏籠へ推込むように推込む。私は型の中で出ようと藻掻く。知らん面している。泣いて、喚いて、引掻いて出ようとする。知らん面している。欺して出ようとする。其手に乗らない。百計尽きて、仕様がないと観念して、性を矯め、情を矯め、生ながら木偶の様な生氣のない人間になって了えば、親達は始めて満足して、漸く善良な傾向が見えて来たと曰う。世間の所謂家庭教育というものは皆是ではないか。私は幸いにして親達が無教育無理想であつたばかりに、型に推込まれる憂目を免れて、野育ちに育つた。野育ちだから、生来具有の百の欠点を臆面もなく暴け出して、所謂教育ある人達を聳蹙せしめたけれど、其代り子供の時分は、今の様に矯飾はしなかつた。皆無教育な親達のお蔭だ。難有い事だと思ふ。真に難有い事だと思ふ。

しかし内うちひろ 拡とがりの外そと 窄すぼまりと昔から能く俗人が云う。哲人の深遠な道理よりも、詩人の徹底した見識よりも、平凡な私共の耳には此方が入り易い。不思議な事には、無理想の俗人の言う事は皆活きて聞える。

私が矢張其内やっぱりうちひろが 拡とがりの外そと 窄すぼまりであつた。

六

内あわび中の鮑あわびツ貝、外へ出りや蜆しじみツ貝、と友達に囃はやされて、私は悔しがって能く泣いたツ
けが、併し全く其通りであつた。

如何どういうものだか、内でお祖母ばあさんが舐なめるようにして可愛がつて呉れるが、一向嬉うれしくない。反かえつて蒼蠅うるさくなつて、出るなと制とめる袖の下を潜ひそつて外へ駈か出す。

しかし一步門もん外へ出れば、最う浮世の荒い風が吹く。子供の時分の其は、何処にも有る苛いじめツ児こという奴だ。私の近処にも其が居た。

勘かんちゃんかんと云つて、私より二ツ三ツ年上で、獅子ツ鼻の、色の真黒けな児こだつたが、斯ういうのに限つて乱暴だ。親仁おやじは郵便局の配達か何かで、大酒吞で、阿母おふくろはお引摺ひきずりと来

ているから、常も鍵裂だらけの着物を着て、踵の切れた冷飯草履を突掛け、片手に貧乏徳利を提げ、子供の癖に尾籠な流行歌を大声に唱いながら、飛んだり、跳ねたり、曲きよくがけ駄だ というのを遣り遣り使に行く。始終使にばかり行つても居なかつたろうが、私は勘ちやんの事を憶出すと、何故だか常も其使に行く姿を想出す。

勘ちやんは家では何も貰えぬから、人が何か持つてさえいれば、屹度欲しがって、卒直にお呉などと云う。機嫌好く遣れば好し、厭だと頭振を振ると、顰を突出して、好いよ好いと云う。薄気味悪くなつて遣ろうとするが、最う受取らない。好いよ、呉れないと云つたね、好いよと、其許りを反覆して行つて了う。何となく気になるが、子供の事だ、遊びに羶けて忘れていると、何時の間にか勘ちやんが、使の帰りに何処かで蛇の死んだのを拾つて来て、窃と背後から忍び寄て、卒然ピシャリと叩き付ける。ワツと泣き声揚げて此方は逃出す、其後姿を勘ちやんは白眼で見送つて、「様ア見やがれ！」

私は散々此勘ちやんに苛められた。初こそ悔しがって武者振り付いても見たが、勘ちやんは喧嘩の名人だ。直と足捌掛けて推倒して置いて、馬乗りに乗つてピシャピシャ打つ。私にはお祖母さんが附いてるから、内では親にさえ滅多に打たれた事のない頭だ。その大切にせられている頭を、勘ちやんは遠慮せずにピシャピシャ打つ。

一度酷い目に遭つてから、私は勘ちやんが可怕くて可怕くてならなくなつた。勘ちやんが側へ来ると、最う私は恟々して、呉れと言わない中から持つてゐる物を遣り、勘ちやん、あの、賢ちやんがね、お前の事を泥棒だつて言つてたよと、余計な事迄告口して、勉めて御機嫌を取つていた。斯うしていれば大抵は無難だが、それでも時々何の理由もなく、通りすがりに大切な頭をコツリと打つて行くこともある。

外は面白いが、勘ちやんが厭だ。と云つて、内でお祖母さんと睨めツこも詰らない。そこで、お隣のお光ちゃんにお向うのお芳ちゃんを呼んで来る。お光ちゃんは外齒のお出額で河童のような児だつたけれど、お芳ちゃんは色白の鈴を張つたような眼で、好児だつた。私は飯事でお芳ちゃんの旦那様になるのが大好だつた。お烟草盆のお芳ちゃんが真面目腐つて、貴方、御飯をお上なさいなと云う。アイと私が返事をする。アイじや可笑いわ、ウンというンだわ、と教えられて、じゃ、ウンと言って、可笑くなつて、不覺笑い出す。此方が勘ちやんに頭を打られるより余程面白い。それに女の児はこましくしてくれているから、子供でも人の家だと遠慮する。私一人威張つていられる。間違つて喧嘩になつても、屹度敵手が泣く。然うすればお祖母さんが謝罪つて呉れる。

女の児と遊ぶのは無難で面白いが、併しそう毎日も遊びに来て呉れない。すると、私は

退屈するから、平地に波瀾を起して、拗て、じぶくツて、大泣に泣いて、而してお祖母さんに御機嫌を取って貰う。

七

……が、待てよ。何ほ自然主義だと云つて、斯う如何もダラダラと書いていた日には、三十九年の半生を語るに、三十九年掛るかも知れない。もう少し省略ろう。

で、唐突ながら、祖母は病死した。

其時の事は今に覚えているが、平常の積で何心なく外から帰つて見ると、母が妙な顔をして奥から出て来て、常になく小声で、お前は、まあ、何処へ行ツていたい？ お祖母さんがお亡くなすツたよ、という。お亡くなすツたよが一寸分らなかったが、死んだのだと聞くと、吃驚すると同時に、急に何だか可怕なつて来た。無論まだ死ぬという事が如何な事だか能くは分らなかったが、唯何となく斯う奥の知れぬ真暗な穴のような処へ入る事のように思われて、日頃から可怕がつていたのだが、子供も人間だから矛盾を免れない。お祖母さんが死んだのは可怕的が、その可怕的処を見たいような氣もする。

で、母が来いと云うから、跟あとに随ついて怕こわ々奥へ行つて見ると、父は未だ居る医者とか話をしていたが、私の面かおを見るより、何処へ行つて居た。もう一足早かったらなあ……と、何だか甚ひどく残念がつて、此処へ来てお祖母ばあさんにお辞儀しろという。

改まつてお祖母ばあさんにお辞儀しろと言われた事は滅多に無いので、死ぬと変な事をするものだ、と思つて、おツかな恠びつくそり側へ行くと、小屏風を逆さかにした影に祖母が寝ていて、面に白い布片きれが掛けてある。父が徐しずかに其を取除けると、眼を閉じて少し口を開あいた眠つたような祖母の面かおが見える……一目見ると厭いやな色だと思つた。長いこと煩わづらつていたから、寔やっれた顔は看慣みなれていたが、此様こんな色になつていたのを見た事がない。厭いやに白けて、光沢つやがなくて、死の影に曇つているから、顔中が何処となく薄暗い。もう家うちのお祖母ばあさんでは無いような気がする。といつて、余処よそのお祖母ばあさんでもないが、何だか其処に薄気味の悪い区劃しきりが出来て、此方こつちは明るくて暖かだが、向うは薄暗くて冷たいようで、何がなしに怕こわつた。

「お辞儀をしないか。」

と父に催促されて、私は莞爾にこにこ々々となつた。何故だか知らんが、莞爾にこにこ々々となつて、ドサンと膝を突いて、遠方からお辞儀して、急いで次の間へ逃げて来て、矢張莞爾やっぱりにこにこ々々して

いた。

其^{そのうち}中に親類の人達が集まって来る、お寺から坊さんが来る、其晩はお通^つ夜^やで、翌日は葬式と、何だか家内^{かない}が混^{ごたごた}雑^{ざつ}するのに、観^みる物聞く事皆珍らしいので、私は其に紛れて何とも思わなかったが、軈^{やが}て葬式が済んで寺から帰って来ると、手伝の人も一人帰り二人帰りして、跡は又家^{うち}の者ばかりになる。薄暗いランプの蔭で卜^{かお}面^{めん}を合せて見ると、お祖母^{ばあ}さんが一人足りない。ああ、お祖母^{ばあ}さんは先刻^{さつき}穴へ入って了ったが、もう何時^{いつまで}迄待ても帰って来ぬのだと思うと、急に私は悲しくなつてシクシク泣出した。

私の泣くのを見て母も泣いた。父も到頭泣いた。親子三人向^{むかい}合^あつて、黙つて暫く泣いていた。

八

祖母に死別れて悲しかったが、其頃はまだ子供だったから、十分に人間死別の悲しみを汲分け得なかった。その悲しみの底を割つたと思われるのは、其後^{そののちりようしん}兩^{りやう}親^{しん}に死なれた時である。

去る者日々に疎^{うと}しとは一わたりの道理で、私のような浮世の落伍者は反て年と共に死んだ親を慕う心が深く、厚く、濃^{こまや}かになるようだ。

去年の事だ。私は久振^{ひさしぶり}で展墓^{てんぼ}の為帰省した。寺の在る処は旧は淋しい町端^{まちはず}れで、門前の芋畠を吹く風も悲しい程だったが、今は可なりの町並になって居て、昔能く憩^{やす}んだ事のある門脇^{もんわき}の掛茶屋は影も形も無くなり、其跡が Barber's 《バーバース》 Shop 《ショップ》と白ペンキの奇抜な看板を揚げた理髪店になっている。

が、寺は其反対に荒れ果てて、門は左程^{さほど}でもなかったが、突当りの本堂も、其側^{そのそば}の庫裏^{くら}も、多年の風雨^{ふうう}に曝^{さら}れて、処々壁が落ち、下地^{したじ}の骨が露^{あら}われ、屋根には名も知れぬ草が生えて、甚^{ひど}く淋^{さび}れていた。私は台所口で寺男が内職に売っている櫛^{しきみ}を四五本買つて、井戸へ掛つて、釣瓶^{つるべ}縄が腐つて切れそうになっているのを心配しながら、漸く水を汲上げた。手桶片手に、櫛^{しきみ}を提^さげて、本堂をグルリと廻^{まわ}つて、後の墓地へ来て見ると、新仏^{しんぼとけ}が有つたと見えて、地尻^{じしり}に高い杉の木の下^{した}に、白張^{しらはり}の提灯が二張ハタハタと風に揺^ゆいでいる。流石^{さすが}に微に覚えが有るから、確か彼の辺^あだなど見当を附けて置いて、さて昨夜^{ゆうべ}の雨でぬかる墓場道を、蹴^け揚の泥を厭^{いと}い厭^{いと}い、度々^{たびたび}下駄を取られそうになりながら、それでも迷わずに先祖代々の墓の前へ出た。

祠堂しどうきん金も納めてある筈、僅ばかりでも折々の附け届も怠らなかつた積つもりだのに、是はまた如何な事！ 何時いつ掃除した事やら、台石は一杯に青苔あおこけが蒸して石塔も白い痴かさぶたのような物に蔽おほわれ、天辺てっぺんに二処ふたところ三処さんところベツトリと白い鳥の糞ふんが附ている。勿論木葉このはうずたかは堆く積つて、雑草も生えていたが、花立の竹筒は何処へ行つた事やら、影さえ見えなかつた。

私は掃除する方角もなく、之に対して暫く悵ちやうぜん然ぜんとしていた。

祖母の死後すねん数年ちちはは、父母も其跡を追うて此墓ぼせきの下に埋うずまつてから既に幾星霜を経ている。墓石は戒名も読め難かねる程苔蒸して、默然として何も語らぬけれど、今来きたつて面まりに之に對すれば、何となく生きた人と面かおを合せたような感がある。懐かしい人達が未だ達者でいた頃の事が、夫それから夫それと止度なく想出されて、祖母が縁先に円おきくなつて日向ぼっこをしていく格かたち構くわい、父が眼も鼻も一つにして大な噓おきを為しようとする面かお相つき、母が櫛掛たすきがけで張物はりものをしていく姿などが、顯ま然まと目の前に浮ぶ。

颯さつと風が吹いて通る。木の葉がざわざわと騒ぐ。木の葉の騒ぐのとは思ひながら、澄んだ耳には、聴き覚えのある皺しやが唄れた声や、快活な高たか声こゑや、低い纖弱かぼそい声こゑが紛々ごちゃごちゃと絡み合つて、何やら切しきりに慌あわただ話しているように思われる。一しきりして礎はたと其が止むと、跡は寂然しんとなる。

と、私の心も寂然しんとなる。その寂然しんとなった心の底から、ふと恋しいが勃々むらむらと湧いて出て、私は我知らず泪なみだ含んだ。ああ、成ろう事なら、此儘此墓の下へ入って、もう浮世へは戻り度たくないと思つた。

九

先刻さつき旧友の一人が尋ねて来た。此人は今でも文壇に籍を置いてる人で、人の面かおさえ見れば、君ねえ、ナチュラリズムがねえと、グズリグズリを始める人だ。

神経衰弱を標榜たふしている人だから耐たまらない。来ると、ニチャニチャと飴を食つてるような弁で、直すぐと自分の噂を始める。やあ、僕の理想は多角形で光沢があるの、やあ、僕の神経は錐きりの様に尖とんがつて来たから、是で一つ神秘の門つを突ついて見る積つもりだのと、其様そんな事ばかり言う。でなきや、文壇の噂で人の全盛に修羅しゆらを燃もやし、何かしらケチを附けたがつて、君、何某なにがしのと、近頃評判の作家の名を言つて、姦通一件を聞いたかという。また始まつたと、うんざりしながら、いやそんな事僕は知らんと、ぶっきらぼうに言うけれど、文士だから人の腹なんぞは分らない。人が知らんというのに反つて調子づいて、秘密の話だよ、此場

限りだよと、私が十人目の聴手かも知れぬ癖に、悪念わるねんを推して、その何某なにがしが友の何某なにがしの妻と姦通している話を始める。何とかが如何どうとかして、掃溜はきだめの隅で如何どうとかしている処を、犬に吠付かれて蒼くなつて逃げたとか、何とか、何とか、その醜穢しゅうわいなること到底筆には上せられぬ。それも唯其丈の話で、夫だから如何どうという事もない。君、モーパッサンの捉まえどこだね、という位ぐらいが落だ。

これで最う帰るかと思うと、なかなか以て！ 君ねえ、僕はねえと、また僕の事になつて、其中そのうちに世間の俗物共を眼中に措おかないで、一つ思う存分な所を書いて見ようと思うという様な事を饒舌しゃべつて、文士で一生貧乏暮しをするのだもの、ねえ、君、責せめて後世にでも名を残さなきやアと、堪たまらない事をいう。プスリプスリと燻いぶるような氣きを吐いて、散々人を厭がらせた揚句に、僕は君に万斛ばんこくの同情を寄せている、今日は一つ忠告を試みようと思う、というから、何を言うかと思うと、「君も然う所帯染みて了わずと、一つ奮発して、何か後世へ残し玉え。」

こんなのは文壇でも流石さすがに屑の方であろう。しかし不幸にして私の友人は大抵屑ばかりだ。こんな人のこんな風袋ふうたいばかり大きくても、割れば中から鉛の天神様が出て来るガラガラのような、見掛倒しの、内容に乏しい、信切な忠告なんぞは、私は些ちっとも聞き度たくない。

私の願は親の口から今一度、薄着して風邪をお引きでない、お腹が減いたら御飯にしようかと、詰らん、降らん、意味の無い事を聞きたいのだが……

その親達は最う此世に居ない。若し未だ生きていたら、私は……孝行をしたい時には親はなしと、又しても俗物は旨い事を言う。ああ、嬉しいにつけ、悲しいにつけ、憶出すのは親の事……それにポチの事だ。

十

ポチは言う迄もなく犬だ。

来年は四十だという、もう鬢びんに大分白髪しろがも見える、汚ない髭おやじの親仁おやじの私が、親に継いで犬の事を憶い出すなんぞと、余り馬鹿あんま氣きていてお話にならぬ——と、被おつしや仰おつしやるお方が有るかも知れんが、私に取つては、ポチは犬だが……犬以上だ。犬以上で、一寸ちよつとまあ、弟……でもない、弟以上だ。何と言つたものか？……そうだ、命だ、第二の命だ。恥を言わねば理りが聞こえぬというから、私は理りを聞かせる為に敢て耻を言うが、ポチは全く私の第二の命であつた。其癖初めを言えば、欲しくて貰つた犬ではない、止むことを得ず……

いや、矢張^{やっぱり}あれが天から授かつたと云うのかも知れぬ。

忘れもせぬ、祖母の亡^{なく}なつた翌々^{よくよく}年の、春雨のしとしとと降る薄ら寒い或夜の事であつ

た。宵^{よいまじい}惑^ごの私は例の通り宵の口から寝て了つて、いつ両^{りよう}親^{しん}は寝に就いた事やら、

一向知らなかつたが、ふと目を覚すと、有明^{ありあけ}が枕元を朦朧^{ぼんやり}と照して、四辺^{あたり}は微暗^{ほのぐら}く

寂然^{しん}としてゐる中で、耳元近くに妙な音がする。ゴウとかとすれば、スウと、或は高

く或は低く、単調ながら拍子を取つて、宛然^{さながら}大^{おお}鋸^{のこぎり}で大丸太を挽割^{ひきわ}るような音だ。何

だろうと思つて耳を澄していると、時々其音が自分と自分の単調に鑿^あいたように、忽ちガ

アと慣れた調子を破り、凄じい、障子の紙の共鳴りのする程の音を立てて、勢込んで何処

へか行きそうにして、忽ち物に行当つたように、礎^{はた}と止む。と、しばらく闐寂^{ひっそ}となる――

その側^{そば}から、直ぐ又穩かにスウスウという音が遠方に聞え出して、其が次第に近くなり、

荒くなり、又耳元で根氣よくゴウ、スウ、ゴウ、スウと鳴る。

私は夜中に滅多に目を覚した事が無いから、初は甚^{ひど}く吃驚^{びっくり}したが、能^よく研究して見る

と、なに、父の鼾^{いびき}なので、漸^{やつ}と安心して、其儘再び眠ろうとしたが、壮^{さかん}なゴウゴウスウス

ウが耳に附いて中々眠付^{ねつか}れない。仕方がないから、聞える儘に其音に聴入っていると、思^{おも}

做^{もい}しで種々^{いろいろ}に聞える。或は遠^{とおか}雷^{みなり}のように聞え、或は浪の音のようでもあり、又は

火吹達磨が火を吹いてるようにも思われれば、ゴロタ道を荷馬車が通る音のようにも思われる。と、ふと昼間見た絵本の天狗が酒宴を開いている所を憶出して、阿爺さんが天狗になつてお囃子を行つてゐるのじやないかと思うと、急に何だか薄気味悪くなつて来て、私は頭からスポツと夜着を冠つて小さくなつた。けれども、天狗のお囃子は夜着の襟から潜り込んで来て、耳元に纏り付いて離れない。私は凝然と固くなつて其に耳を澄ましていると、何時からとなくお囃子の手が複雑で来て、合の手に遠くで幽かにキャンキャンというような音が聞える。ゴウという凄じい音の時には、それに消圧されて聞えぬが、スウという溜息のような音になると、其が判然と手に取るように聞える。不思議に思つて益耳を澄まして、其とは離ればなれに、確に門前に聞える。

こうなつて見ると、疑もなく小狗の啼き声だ。時々咽喉でも締られるように、消魂しく々きやんきやんと啼き立てる其の声尻が、聴てかぼそく悲し気になつて、滅入るように遠い処へ消えて行く——かとすれば、忽ち又近くで堪え切れぬように啼き出して、クンクンと鼻を鳴らすような時もあり、ギャオと欠びをするような時もある。

十一

私は元來動物好きで、就^{なかんずく}中^な犬は大好きだから、近所の犬は大抵^な馴染^{なじみ}だ。けれども、此^こ様^{よう}纖細^{せんそ}い可愛^{いた}げな声で啼くのは一足も無い筈だから、不思議に思つて、窃^{そつ}と夜着の中から首を出すと、

「如何^{どう}したの？ 寝られないのかえ？」

と、母が寝反りを打つて此方^{こちら}を向いた。私は此返答^{さしお}は差措^{さしお}いて、

「あれは白じやないねえ、阿母^{おつ}さん？ 最^{もつ}と小さい狗^{いぬ}の声だねえ？ 如何^{どう}したんだろう？」

「棄^{すて}狗^{いぬ}さ。」

「棄^{すて}狗^{いぬ}ツて何^{なに}？」

「棄^{すて}狗^{いぬ}ツて……誰^{たれ}かが棄^{すて}てツたのさ。」

私はしばらく考えて、

「誰^{たれ}が棄^{すて}てツたんだろう？」

「大方^{どつ}何処^{どつ}かの……何処^{どつ}かの人さ。」

何処^{どつ}かの人が狗^{いぬ}を棄^{すて}てツたと、私は二三度反^{くり}覆^{かえ}して見たが、分らない。

「如何して棄てツたんだろう？」

蒼蠅よ、などという母ではない。何処迄も相手になつて、其意味を説明して呉れて、もう晩いから黙つてお寐と優しく言つて、又彼方向いて了つた。

私も亦夜着を被つた。狗は門前を去つたのか、啼声が稍遠くなるに随つて、父の鼾が又蒼蠅く耳に附く。寝られぬ儘に、私は夜着の中で今聴いた母の説明を反覆し反覆し味つて見た。まず何処かの飼犬が椽の下で児を生んだとする。小ぼけなむくむくしたのが重なり合つて、首を擡げて、ミイミイと乳房を探している所へ、親犬が余処から歸つて来て、其側へドサリと横になり、片端から抱え込んでベロベロ舐ると、小さいから舌の先で他愛もなくコロコロと転がされる。転がされては大騒ぎして起返り、又ヨチヨチと這い寄つて、ポツチリと黒い鼻面でお腹を探り廻り、漸く思ふ柔かな乳首を探り当て、狼狽てチユウと吸付いて、小さな両手で揉み立て揉み立て吸出すと、甘い温かな乳汁が滾々と出て来て、咽喉へ流れ込み、胸を下つて、何とも言えずお甘い。と、腋の下からまだ乳首に有附かぬ兄弟が鼻面で割込んで来る。奪られまいとして、産毛の生えた腕を突張り大騒ぎ行つてみるが、到頭奪られて了い、又其処らを尋ねて、他の乳首に吸付く。其中にお腹も満くなり、親の肌で身体も温まつて、溶けそうな好い心持になり、不覺昏々となる

と、含んだ乳首が抜けそうになる。夢心地にも狼狽て又吸付いて、一しきり吸立てるが、直に又他愛なく昏々となつて、乳首が遂に口を脱ける。脱けても知らずに口を開いて、小さな舌を出したなりで、一向正体がない……其時忽ち暗黒から、茸々と毛の生えた、節くれ立つた大きな腕がヌツと出て、正体なく寝入っている所を無手と引掴み、宙に釣す。驚いて目をポツチリ明き、いたいげな声で悲鳴を揚げながら、四足を張つて藻掻く中に、頭から何かで包まれたようで、真暗になる。窮屈で息気が塞りそうだから、出ようとするが、出られない。久らく藻掻いて居る中に、ふと足掻きが自由になる。と、領元を撮まれて、高い高い処からドサリと落された。うろうろとして其処らを視廻すけれど、何だか変な淋しい真暗な処で、誰も居ない。茫然としていると、雨に打れて見る間に濡しよぼたれ、怕ろしく寒くなる。身慄い一つして、クンクンと親を呼んで見るが、何処から出て来ない。途方に暮れて、ヨチヨチと這出し、雨の夜中を唯一人、温かな親の乳房を慕つて悲し気に啼廻る声が、先刻一度門前へ来て、又何処へか彷徨つて行つたようだったが、其が何時か又戻つて来て、何処を如何潜り込んだのか、今は啼声が正しく玄関先に聞える。

十二

「阿母さん阿母さん、門の中へ入って来たようだよ。」

と、私が何だか居堪らないような氣になつて又母に言掛けると、母は氣の無さそうな声で、

「そうだね。」

「出て見ようか？」

「出て見ないでも好いよ。寒いじゃないかね。」

「だつてえ……あら、彼様に啼てる……」

と、折柄絶入るように啼入る狗の聲に、私は我知らず勃然起上つたが、何だか一人では可怕いような氣がして、

「よう、阿母さん、行つて見ようよう！」

「本当に仕様がな^い児だねえ。」

と、口小言を言い言い、母も洩々起きて、雪洞を点けて起上つたから、私も其後に随いて、玄関——と云つてもツイ次の間だが、玄関へ出た。

母が履脱へ降りて格子戸の掛金を外し、ガラリと雨戸を繰ると、颯と夜風が吹込んで、雪洞の火がチラチラと靡く。其時小さな鞆のような物が衝と軒下を飛退いたようだったが、聴て雪洞の火先が立直つて、一道の光がサツと戸外の暗黒を破り、雨水の処々に溜った地面を一筋細長く照出した所を見ると、ツイ其処に生後まだ一カ月も経たぬ、むくむくと肥った、赤ちやけた狗児が、小指程の尻尾を千切れそうに掉立つて、此方を瞻上げてゐる。形体は私が寝ていて想像したよりも大きかったが、果して全身雨に濡れしよばたれて、泥だらけになり、だらりと垂れた割合に大きい耳から雪を滴し、ぽつちりと両つの眼を青貝のように列べて光らせてゐる。

「おやおや、まあ、可愛らしい！……」と、母も不覺言つて了つた。

況や私は犬好だ。凝として視ては居られない。母の袖の下から首を出して、チヨツチヨツと呼んで見た。

と、左程畏れた様子もなく、チヨコチヨコと側へ来て流石に少し平べったくなりながら、頭を撫でてやる私の手を、下からグイグイ推上げるようにして、ベロベロと舐廻し、手を呉れる積なのか、頻に円い前足を挙げてバタバタやっていたが、果は和りと痛まぬ程に小指を咬む。

私は可愛くて可愛くて堪まらない。母の面を瞻上げながら、少し鼻声を出し掛けて、
「阿母さん、何か遣つて。」

「遣るも好いけど、居附いて了うと、仕方がないねえ。」

と、口では拒むような事を言いながら、それでも台所へ行つて、欠茶碗に冷飯を盛つて、何かの汁を掛けて来て呉れた。

早速履脱へ引入れて之を当がうと、小狗は一寸香を嗅いで、直ぐ甘そうに先ずピチャピチャと舐出したが、汁が鼻孔へ入ると見えて、時々クシンクシンと小さな嚏をする。忽ち汁を舐尽して、今度は飯に掛つた。他に争う兄弟も無いのに、切に小言を言いながら、ガツガツと喫べ出したが、飯は未だ食慣れぬかして、兎角上顎に引附く。首を掉つて見るが、其様な事では中々取れない。果は前足で口の端を引掻くような真似をして、大藻掻きに藻掻く。

此隙に私は母と談判を始めて、今晚一晚泊めて遣つてと、雪洞を持った手に振垂る。母は一寸渋つたが、もう斯うなつては仕方がない。阿爺さんに叱られるけれど、と言いながら、詰り棧俵法師を捜して来て、履脱の隅に敷いて遣つた——は好かつたが、其晚一晚啼通されて、私は些とも知らなんだが、お蔭で母は父に小言を言われたそう。

十三

犬嫌^{いぬきら}の父は泊めた其夜^{そのよ}を啼明^{なきあか}されると、うんざりして了って、翌日^{あくるひ}は是非^{おあいだ}逐出^{おいだ}すと言出したから、私は小狗^{こいぬ}を抱いて逃廻^{どくわ}つて、如何^{どう}しても放さなかった。父は困った顔をしていたが、併し其も一時^じの事で、其中^{そのうち}に小狗^{こいぬ}も独寝^{ひとりね}に慣れて、夜も啼かなくなる。と、逐出^{おいだ}す筈^{はず}の者に、如何^{いっ}しかポチという名まで附いて、姿が見えぬと父までが一緒に捜すようになって了った。

父が斯うなつたのも、無論ポチを愛したからではない。唯私^{ひか}に羈^{ひか}されたのだ。私とてもポチを手放し得なかつたのは、強^{あなが}ちポチを愛したからではない。愛する愛さんは扱^{さてお}置いて、私は唯可哀^{かわい}そうだったのだ。親の乳房^{すか}に縋^{すが}つてゐる所を、無理に無慈悲な人間の手に引離されて、暗い浮世へ突放^{つきはな}された犬の子の運命が、子供心にも如何にも果敢^{はか}なく情けないように思われて、手放すに忍びなかつたのだ。

此忍びぬ心と、その忍びぬ心を破るに忍びぬ心と、二つの忍びぬ心が掬^{から}み合つた処に、ポチは旨^{うま}く引掛^{ひっか}つて、辛^{から}くも棒石塊^{いしころ}の危ない浮世に彷徨^{さまよ}う憂^の目を免れた。で、どうせ、

それは、蜘蛛くもの巣だらけでは有つたろうけれど、兎も角も雨露うろを凌しのぐに足る椽こもの下の菰こもの上で、甘うまくはなくとも朝夕二度の汁掛け飯に事欠かず、まず無事に暢のんびりと育つた。

育つに随つれて、丸々と肥ふつて可愛らしかったのが、身長せいに幅を取られて、ヒョロ長くなり、面かおも甚ひどくトギスになつて、一寸狐このような犬になつて了つた。前足を突張ちよつとつて、尻をもつたてて、弓のように反そつて伸のびをしながら、大きな口をアングリ開あいて欠あくびをする所なぞは、誰たが眼めにも余あまり見みても好くもなかつたから、父は始終厭いやな犬だ厭いやな犬だと言つて私を厭いやがらせたが、私はそんな犬振りで情じやうを二三にするような、そんな輕薄いさざな心は聊いささかも無い。固もとより玩弄物なぐさみものにする氣で飼つたのでないから、厭いやな犬だと言われる程、尚可愛かわゆい。

「ねえ、阿母おつかさん此こ様な犬は何処へ行つたつて可愛がられやしないやねえ。だから家うちで可愛がつて遣はなるんだねえ。」

と、いつも苦笑する母を無理に味方にして、調戲からう父と争つた。

犬いぬ好ずきは犬が知る。私の此心はポチにも自然と感通していたらしい。其証拠には犬嫌いの父が呼んでも、ほんの一寸お愛想あいそに尻尾ふを掉ふるばかりで、振向きもせんで行つて了う事がある。母が呼ぶと、不斷食事の世話になる人だから、又何か貰えるかと思つて眼を輝

かして飛んで来る、而して母の手中に其らしい物があれば、兎のように跳ねて喜ぶ。が、しかし、唯其丈の事で、其時のポチは矢張犬に違いない。

その矢張犬に違いないポチが、私に對うと……犬でなくなる。それとも私が人間でなくなるのか？ ……何方だか其は分らんが、兎に角互の熱情熱愛に、人畜の差別を撥無し、渾然として一如となる。

一如となる。だから、今でも時々私は犬と一緒に成つて此様な事を思う、ああ、儘になるなら人間の面見えぬ処へ行つて、飯を食つて生きてたいと。

犬も屹度然う思うに違いないと思う。

十四

私は生来の朝寝坊だから、毎朝二度三度覺されても、中々起きない。優しくしては際限がないので、母が最終には夜着を剥ぐ。これで流石の朝寝坊も不承々に床を離れるが、しかし大不平だ。額で母を睨めて、津蟹が泡を吐くように、沸々言っている。ポチは朝起だから、もう其時分には疾くに朝飯も済んで、一切り遊んだ所だが、私の声

を聴き付けると、何処に居ても一目散に飛んで来る。

これで私の機嫌も直る。急に現金に莞爾々々となつて、急いで庭へ降りる所を、ポチが透さず泥足で飛付く。細い人參程の赤ちやけた尻尾を懸命に掉り立って、嬉しそうに面を瞻上る。視下す。目と目と直たりと合う。堪まらなくなつて私が横抱に引抱く。ポチは抱かれながら、身を藻掻いて大暴れに暴れ、私の手を舐め、胸を舐め、顎を舐め、頬を舐め、舐めても舐めても舐め足らないで、悪くすると、口まで舐める。父が面を擧めて汚い汚いと曰う。成程、考えて見れば、汚いようではあるけれども……しかし、私は嬉しい、止められない。如何して是が止められるもんか！ 私が何も好い物を持つているじやなし、ポチも其は承知で爲る事だ。利害の念を離れて居るのだ、唯懐かしいという刹那の心になつて居るのだ。毎朝これでは着物が堪らないと、母は其を零すけれど、着物なんぞの汚れを厭つて、ポチの此志を無にする事が出来た話だか、話でないか、其処を一つ考えて貰いたい。

理窟は忖置いて、この面舐めの一儀が済むと、ポチも漸と是で気が済んだという形で、また庭先をうろうろし出して、椽の下などを覗いて見る。と、其処に草鞋虫の一杯依附した古草履の片足か何ぞが有る。好い物を看附けたと言ひそのような面をして、其を啜え出し

て来て、首を一つ掉ふると、草履は横飛にポンと飛ぶ。透すさず追蒐おつかけて行つて、又啞くわえてポンと抛ほうる。其様そのんな他愛たわいもない事をして、活潑に元氣よく遊ぶ。

其際そのひまに私は面かおを洗あう、飯を食くう。それが済むと、今度は学が校こうへ行いく段取になるのだ

が、此時が一日中で一番私の苦痛の時だ。ポチが跟あとを追おう。うツかり出いようものなら、何処迄も何処迄も随ついて来て、逐おつたつて如何どうしたつて歸らない。こツそり出いようとしても、出掛ける時刻をチャンと知しつて居て、其時分になると、何時いつの間にか玄關先へ廻まつて待まちつてゐる。仕方がないから、最終しまいには取捉とつかまえて否いや応おうなしに格子戸の内へ入れて置いては出るようにしてゐたが、然しかうすると前足で格子を引搔ひいて、悲しい悲しい血を吐はきそうな啼なき聲こゑを立てて後あとを慕もい、姿が見えなくなつても啼止なきやまない。私もそれは同じ想だ。泣出なみしそんな面かおをして、バタバタと駆出かけだし、声の聞えない処まで来て、漸しくホツとして、普通ふつの歩調あしどりになる、而そして常いつも心うちの中で反くりかえ覆かえし反覆こんし此様な事を思おもう、

「僕ぼくが居ないと淋しいもんだから、それで彼様あんなに跟あとを追おうんだ。可哀かなそうだなあ……僕ぼくあ学校がっこうなんぞへ行いきたか無いんだけど……行いかないと、阿父おとつさんがポチを棄すてツちま了しまうツて言いうもんだから、それでシヨウがないから行いくンだけでも……」

十五

ジャンジャンと放課の鐘が鳴る。今迄静かだった校舎内が俄に騒がしくなつて、彼方此方の教室の戸が前後して慌だしくパツパツと開く。と、その狭い口から、物の真黒な塊りがドツと廊下へ吐出され、崩れてばらばらの子供になり、我勝に玄関脇の昇降口を目覓けて駈出しながら、口々に何だか喚く。只もう校舎を撼つてワーツという声の中に、無数の円い顔が黙つて大きな口を開いて躍っているようで、何を喚いているのか分らない。で、それが一旦昇降口へ吸込まれて、此処で又紛々と入乱れ重なり合つて、腋の下から才槌頭が偶然と出たり、外歯へ肱が打着かつたり、靴の踵が生憎と霜焼の足を踏んだりして、上を下へと捏返した揚句に、ワツと門外へ押出して、東西へ散々になる。

仲善二人肩へ手を掛合つて行く前に、弁当箱をポンと抛り上げてはチョイと受けて行く頑童がある。其隣りは往來の石塊を蹴飛ばし蹴飛ばし行く。誰だか、後刻で遊びに行くよ、と喚く。蝗を取りに行かないか、という声もする。君々と呼ぶ背後で、馬鹿野郎と誰かが誰かを罵る。あ、痛たツ、何でい、わーい、という声が譟然と入違つて、友達は皆道草を喰っている中を、私一人は駈脱けるようにして側視もせず切々と歸つて来る。

家の横町の角迄来て、撥くすぐたいような心持になつて、窃そつと其方角を覲る。果してポチが門前へ迎えに出ている。私を看附みつるや、逸散いつさんに飛んで来て、飛付く、舐なめる。何だか「兄さん！」と言つたような気がする。若し本包ほんづつみに、弁当箱に、草履袋で両手が塞ふさがつていなかったら、私は此時ポチを捉つかまえて何を行つたか分らないが、其が有るばかりで、如何どうする事も出来ない。抛よどころなくほたほたしながら頭を撫なでて遣るだけで不承ふしょうして、又歩き出す。と、ポチも忽ち身を曲くらせて、横飛にヒヨイと飛んで駈出すかと思うと、立止つて、私の面かおを看みて滑稽おどけた眼色めつきをする。追付くと、又逃げて又其眼色めつきをする。こうして巫ふ山戯ざけながら一緒に帰る。

玄関から大きな声で、「只今！」といいながら、内へ駈込んで、卒然いきなり本包を其処へ抛ほうり出し、慌あわてて弁当箱を開けて、今日のお菜の残り——と称して、実は喫たべたかつたのを我慢して、半分残して来た其物それをポチに遣る。其れでも足りないで、お八ツにお煎を三枚貰つたのを、貰せびつて五枚にして貰つて、二枚は喫たべて、三枚は又ポチに遣る。

夫から庭で一しきりポチと遊ぶと、母が屹度きつとお温習さつゐをお為しという。このお温習程私の嫌いな事はなかつたが、之をしないと、直じきポチを棄すてると言われるのが辛いので、渋々内へ入つて、形かたの如く本を取出し、少し許ばかりおんによごおんによごと行やる。それでお終しまい。余り早

いねと母がいういのを、空耳潰して、衝と外へ出て、ポチ来い、ポチ来いと呼びながら、近くの原へ一緒に遊びに行く。

これが私の日課で、ポチでなければ夜も日も明けなかった。

十六

ポチは日増しにメキメキと大きくなる。大きくはなるけれど、まだ一向に孩児で、垣の根方に大きな穴を掘って見たり、下駄を片足門外へ唧え出したり、其様悪戯ばかりして喜んでゐる。

それに非常に人懐こくて、門前を通掛りの、私のような犬好が、気紛れにチヨツチヨツと呼んでも、直ともう尾を掉つて飛んで行く。況して家へ来た人だと、誰彼の見界はない、皆に喜んで飛付く。初ての人は驚いて、子供なんぞは泣出すのもある。すると、ポチは吃驚して其面を覗いている。

人でさえ是だから同類は尚お恋しがる。犬が外を通りさえすれば屹度飛んで出る。喧嘩するのかと、私がハラハラすれば、喧嘩はしない、唯壮に尻尾を掉つて鼻を嗅合う。大抵

の犬は相手は子供だという面かおをして、其儘さつぎ々と行いこうとする。どっこいとポチが追蒐おツカけ
て巫山ふざけ戯うろさかかる。蒼蠅うろさいと言わぬばかりに、先の犬は齒むを剥むいて叱おこる。すると、ポチは驚
いて耳を伏せて逃げて来る。

ポチは此様こんな無邪気な犬であつたから、友達は直じき出来た。

友達というのは黒と白との二匹で、いずれもポチよりは三ツ四ツも年上であつた。歴うと
した家の飼うい犬でありながら、品性の甚だ下劣な奴等で、毎日々々朝から晩まで近所の掃は
溜きだめを溜あさり歩き二度の食事の外ほかの間かんしよく食むさぼばかり貪むさぼっている。以前から私の家うちの掃溜はきだめへ
も能く立廻よつて来て、馴染なじみの犬共ではあるけれど、ポチを飼うようになってからは、尚
お頻ひんぱん繁おおように立廻よつて来る。ポチの喫たべ剩あましを食くいに来るので。

ポチは犬様おおようだから、余処よその犬が自分の食器へ首を突込んだとて、怒おこらない。黙もくつて快
く食くわせて置く。が、他の食ひとうのを見て自分も食しよく氣き附づく時がある。其様そんな時には例の無
邪氣で、うツかり側そばへ行いつて一緒に首を突込もうとする。無論先の犬は、馳走になつてい
る身分を忘れて、大に怒おおいつて叱いか付ける。すると、ポチは驚おどいて飛退とびのいて、不思議そうに小
首かしを傾かげて、其ガツガツと食くうのを黙もくつて見ている。

父は馬鹿だと言うけれど、馬鹿氣て見える程無邪気なのが私は可愛かわゆい。尤もちも後のちには悪

友の悪感化を受けて、友達と一緒に近所の掃溜へ首を突込み、鮭の頭を舐つたり、通掛りの知らん犬と喧嘩したり、屑拾いの風体を怪しんで押取囲んで吠付いたりした事も無いではないが、是れは皆友達を見よう見真似に其の尻馬に騎つて、訳も分らずに唯騒ぐので、ポチに些つとも悪意はない。であるから、独りの時には、矢張元の無邪気な人懐こい犬で、滑稽た面をして他愛のない事ばかりして遊んでいる。惟うに、私等親子の愛しみを受けて、曾て痛い目に遭つた事なく、暢気に安泰に育つたから、それで此様に無邪気であつたのだろうか、ああ、想出しても無念でならぬ。何故私はポチを躰けて、人を見たら皆悪魔と思ひ、一生世間を睨め付けては居させなかつたらう？　じ可愛がつて育てた為に、ポチは此様に無邪気な犬になり、無邪気な犬であつた為に、遂に残忍な刻薄な人間の手に掛けて、彼様な非業の死を遂げたのだ。

十七

或日の事。卑しい事を言うようだが、其日の弁当の菜は母の手製の鰹節でんぶで、私も好きだが、ポチの大好きな物だったから、我慢して半分以上残したのが、チャンと弁当

箱に入っている。早く帰ってこれが喫^{たべ}させたかったので、待^{まち}憧^{こが}れた放課の鐘が鳴るや、大急ぎで学校の門を出て、友達は例の通り皆道草を喰^くっている中を、私一人は切^{せつ}々と歸^{かへ}つて来ると、俄^{にわか}に行手がワツと騒^{さわ}がしくなつて、先へ行く児^こが皆雪崩^{なだ}れて、ドツと道端^{みちばた}の杉垣^{ちん}へ片寄つたから、驚いてヒヨイと向うを見ると、ツイ四五間先を荷車が来る。瞥^{ちら}と見たばかりでは何の車とも分らなかつた。何でも可なり大きな箱^{はこ}車^{ぐるま}で、上から菰^{こも}を被^{かぶ}せてあつたようだったが、其を若い土方風の草鞋穿^{わらじばき}の男が、余り重そうにもなく、々と引いて来る。車に引添^{ひつそ}うてまだ一人、四十許りの、四角な面^{かお}の、茸^{もじゃ}々^{もじゃ}と髭^{ひげ}の生えた、人相の悪い、矢張^{やっぱ}草鞋穿^{わらじばき}の土方風の男が、古ぼけて茶だか鼠だか分らなくなつた、塵埃^{ほこり}だらけの鉢巻もない帽子を阿弥陀^{あみだ}に冠^{かぶ}つて、手ぶらで何だか饒舌^{しゃべ}りながら来る。

道端^{みちばた}の子供等は皆好奇の目を円くして此怪し気な車を見迎え見送つて、何を言うのか、口々に諛^{がや}然^{がや}と喚^{わめ}いている中から、忽ち一段際^{きわ}立つて甲^か高^{たか}な、「犬殺しだい犬殺しだい！」という叫^{さけ}声^{こゑ}が其処此処から起る。と聞くより、私はハツとした。全身の血の通いが急に一時^じに止つたような気がして、襟元から冷りとする、足が窘^{すく}む……と、忽ち心臓が破裂せんばかりに鼓動し出す。「ポチは? ……」という疑問が曇つたような頭の中で、ちらりと電光^{いなずま}のように閃いて又暗中に没する時、ガタガタと車が前を通る。

後で聞けば、菰こもの下から犬の尻尾とか足とかが見えていたというけれど、私が其時きつ估と目を据えて視たのでは、唯車が躍つて菰こもが魂の有るようにゆさゆさと揺ゆれるのが見えたばかりで、他ほかには何も見えなかった。或は最う目も霞んでいたのかも知れぬ。

「おツそろしい餓鬼だなあ！　まだ彼様あんなに出て来やがら……」

と太い煤すすけたような野良声で、——確に年上の奴に違いないが、然う言うのが聞えた。ガタンと一つ小石に躍つて、車は行過ぎて了う。

跡は両側の子供が又続々ぞろぞろと動き出し、四辺あたりが大黒帽に飛白かすりの衣服きもので紛々ごたごたとなる中で、私一人は佇たちどま立ったまま、茫然として轆棒かじぼうの先で子供の波を押分けて行くように見える車の影を見送っていた。

と、誰だか私の側そばへ来て、何か言う。顔は見覚えのある家うちの近所の何とかいう児だが、言つてゐる事が分らない。私は黙つて其面そのかおを視たばかりで、又窃そつと車の行つた方角を振向いて見ると、最う車は先の横町を曲つたと見えて、此方こちらを向いて来る沢山の子供の顔が見えるばかりだ。

「ねえ、君、君とこ所のポチも殺されたかも知れないぜ。」
という声が此時ふと耳に入つて、私はハツと我かえに反ると、

「啞うそだい！ 殺されるもんか！ 札が附ついてるもの……」

と狼狽あわてて打消てから、始めて木村の賢ちゃんという児と話をしている事が分った。

「やあ……札が附ついてたつて、殺されますから。へえ。僕とこ所の阿爺おとつさんが……」

と賢ちゃんが言掛けると、仲善なかよしの友の言う事だが、私は何だか急に口惜くやしくなつて、
赫かつと急せきこ込んで、

「何でい！ 大丈夫だい！！……」

と怒鳴り付けた。賢ちゃんが吃驚びつくりして眼を円くした時、私は卒然いきなりバタバタと駈出し、
前へ行く児にトンと衝つき当る。何しやがるンだいと、其児に突飛されて、又誰だかに衝つき
当る。二三度彼方あちこち此方こちで小突かれて、蹣跚よろよろとして、危あやうかつたのを辛やツと踏耐ふんごたえるや、
後あとをも見ずに逸散いつさんに宙を飛で家へ歸うちつた。

十八

門は明放あけばなし、草履は飛び飛びに脱棄てつせきてて、片足が裏返しになつたのも知らず、「阿母おつか
さん阿母さん！」と卒然いきなり内へ喚わめき込んだが、母の姿は見えないで、台所で返事がする。

誰だか来て居るようで、話声がしているけれど、其様な事に頓着しては居られない。学校道具を座敷の中央へ抛り出して置いて台所へ飛んで行くなり、

「阿母さん！……ポチは？……」

と喘ぎ喘ぎまず聞いてみた。

母は黙つて此方を向いた。常は滅入つたような蒼い面をしている人だったが、其時此方を向いた顔を見ると、微と紅くなつて、眼に潤みを持ち、どうも尋常の顔色でない。私は急に何か物に行当つたようにうろうろして、

「殺されたかい？……」

と凝と母の面を視た時には、氣息が塞りそうだった。

母は一寸躊躇つたようだったが、思切つて投出すように、

「殺されたとき……」

逸散に駈て来て、ドカツと深い穴へ落ちたら、彼様な氣がするだろうと思う。私は然う聞くと、ハツと内へ氣息を引いた。と、張詰めて破裂れそうになつていた氣がサツと退いて、何だか奥深い穴のような処へ滅入つて行くようで、四辺が濛と暗くなると、母の顔が見えなくなつた……

「炭屋さんが見て来なすツたんだツき。」

という声がふと耳に入ると、クワツとまた其処らが明るくなつて眼の前に丸鬚が見える。母は又彼方向あちらいて了つたのだ。

「じゃ、木村さん処とこの前で殺されたんですね？」と母の声がいう。

「へえ」、という者がある。機械的に其方かたへ面を向けると、腰障子の蔭に、旧い馴染なじみの炭屋の爺やの、小鼻の脇に大きな黒子ほくろのある、皺だらけの面かおが見えて、前齒の二本脱けた間から、チヨコチヨコ舌を出して饒舌しゃべっている声が聞える。「丁度あの木村さんの前とこなで。手前てまえは初めは何だと思ひました。棒を背後うしろへ匿かくしてましたから、遠くで見たんじや、ほら、分りませんや。一寸見ると何だか土方のような奴で、其奴そいつがこう手を背後うしろへ廻まわしてな、お宅の犬の寝ている側そばへ寄つてくから、はてな、何をするんだろう、と思つて見えていますと、彼様あんな人ひと懐なつつこい犬だから、其奴そいつの面かおを見て、何にも知らずに尻尾を掉ふつてましたよ。可哀かわいそうに！ 普通の者なら、何ぼ何でも其様そんなにされちや、手を下おろせた訳わけけあい。合あひのもんじやございません、——ね、今日人情こんにちにんじやうとしまして。それを、貴女あなた……いや、どうも、ああいふ手合てあひに逢あつちや敵かないません、卒然いきなり匿かくしてた棒を取直して、おやツと思う間に、ポンと一つ鼻面を打ぶちました。そうすると、お宅のは勃然むつきり起きましてな、キ

リキリと二三遍廻つて、パタリと倒れると、仰向きになつてこう四足よつあしを突張りましてな、尻尾でバタバタ地面ちべたを叩いたのは、あれは大方苦くるしがつたんでしようが、傍はたで見えていりや何だか喜んで尻尾を掉ふつたようで、妙な塩梅あんばいしきでしたがな、其処を、貴女あなた、またポカポカと三つ四つ咽喉のどン処ところを打ちますとな、もう其切それつきりで、ギャツともスウとも声を立て得ないで、貴女あなた……」

私はもう後は聴いていなかった。誰たれを憚はばる必要もないのに、窃そつと目立たぬように後方うしろへ退さがつて、狐鼠こそこそ々と奥へ引ひ込んだ。ベタリと机の前へ坐つた。キリキリと二三遍廻つたという今聞いた話が胸に浮ぶと、そのキリキリと廻つたポチの姿が、顕ま然まと目に見えるよとめどうな気がする。熱い涙がほろほろ零こぼれる、手の甲で擦こすつても擦つても、止度なくほろほろ零こぼれる。

十九

ポチが殺されて、私は氣脱けしたようになって、翌日は学校も休んだ。何も自分が罪を犯したでもないのに、何となく友達に顔を見られるのが辛くツて……

午過^{ひるすぎ}にポチが殺されたという木村という家^{うち}の前へ行つて見た。其処か此処かと尋ねて見たけれど、もう其らしい痕^{あと}もない。私は道端^{みちづ}にゐ^たで、茫然としていた。

炭屋の老爺^{じい}やの話だと、うツかり寝転んでゐる所を殺されたのだと云う。大方昨日も私の帰りを待ちかねて、此処らまで迎えに出ていたのであろう。待草^{まちくた}臥れて、ドタリと横になつて、角^{かど}のポストの蔭から私の姿がヒョッコリ出て来はせぬかと、其方ばかりを余念なく眺^{なが}めてゐる所へ、犬殺しが来たのだ。人間は皆私達親子のように自分を可愛がつて呉れるものと思つてゐるポチの事だから、犬殺しとは気が附かない。何心なく其面^{そのかお}を瞻^み上^あげて尾を掉^ふる所を、思いも寄らぬ太い棍棒がブンと風を截^きつて来て……と思うと、又胸が一杯になる。

ヒュウと悲しい音を立てて、空風^{からかぜ}が吹いて通る。跡からカラカラに乾いた往来の中^{まん}央^かを、砂^{すな}烟^{けぶり}が濛^{ぼつ}と力のない渦を巻いて、振^よれてひよろひよろと行く。

私は其行方を眺めて茫然としていた。と、何処でかキャンキャンと二声三声犬の啼声^{なきごゑ}がする……佶^{きつ}と耳を引立^ひつて見たが、もう其切^{それきり}で聞えない。隣町^{かじ}あたりで凍^{かじ}けたような物売の声^{こゑ}がする。

何だか今の啼声^{なきごゑ}が気になる。ポチは殺されたのだから、もう此処らで啼^ないてる筈^{はず}はない。

余所の犬だ余所の犬だ、と思いながら、何だか其儘聞流して了うのが残惜しくて、思わず
パタパタと駈出したが、余所の犬じや詰らないと思返して、又頽然ぐたりとなると、足の運びも
自然と遅おそくなり、そろりそろりと草履を引摺ひきずりながら、目的あてもなく小迷さまよつて行く。

小迷さまよつて行きながら、又ポチの事を考えていると、ふツと気が變つて、何だか昨日きのうから
の事が皆みんな嘘らしく思われてならぬ。私が余あんなりポチばかり可愛がつて勉強をしなかつたから、
父が万ひよつと一したら懲こらしめのため、ポチを何処かへ匿かくしたのじやないかと思う。そうすると、
今の啼声は矢張ポチだったかも知れぬと、うろろとする目の前を、土耳其帽トルコぼうを冠かぶつた十
徳姿の何処かのお祖父じいさんが通る。何だか深切そうな好いお祖父じいさんらしいので、此人に
聞いたら、偶然ひよつとポチの居いどころを知つていて、教えて呉れるかも知れぬと思つて、凝然じつと
其面そのかおを視ると、先も振向いて私の面かおを視て、莞爾にっこりして行つて了つた。

向うから順礼の親子が来る。笈おいずる摺も古ふるぼけて、旅たび寥やつれのした風で、白の脚絆きやはんも埃
に塗まぶれて狐色になつてゐる。母の話で聞くと、順礼という者は行方知れずになつた親兄弟
や何かを尋ねて、国々を經巡へめぐつて歩くものだ云う。此人達も其様そのような事で斯うして歩いて
いるのかも知れぬ、と思うと、私も何だか此仲間へ入つて一緒にポチを探して歩きたいよ
うな気がして、立止つて其の後姿を見送つてゐると、忽ち背後うしろでガラガラと雷の落懸おちかる

ような音がしたから、驚いて振向こうとする途端に、トンと突飛されて、私はコロコロと転がった。

「危ねい！ 往来の真ん中を彷徨してやがって……」とせいせい息を逸ませながら立止めて怒鳴り付けたのは、目の怖い車夫であつた。

車には黒い高い帽子を冠つて、温かそうな黄ろい襟の附いた外套を被た立派な人が乗っていたが、私が面を擧めて起上るのを尻眼に掛けて、髭の中でニヤリと笑つて、

「鎌蔵、構わずに行れ。」

「へい……本当に冷りとさせやがった。氣を付けろ、涕垂らしめ！ ……」

と車夫は又トットツと曳出した。

紳士は犬殺しでない。が、ポチを殺した犬殺しと此人と何だか同じように思われて、クラクラと目が眩むと、私はもう無茶苦茶になった。卒然道端の小石を拾って打着けてやろうとしたら、車は先の横町へ曲つたと見えて、もう見えなかつた。

パタリと小石を手から落した。と、何だか急に悲しくなつて来て耐らなくなつて、往来の真中で私は到頭シクシク泣出した。

二十

ポチの殺された当座は、私は食が細つて痩せた程だった。が、其程の悲しみも子供の育つ勢には敵^{かな}わない。間もなく私は又毎日学校へ通つて、友達を相手にキャツキャツとふざけて元気よく遊ぶようになった……

今日は如何^{どう}したのか頭が重くて薩張^{さつば}り書けん。徒書^{むだがき}でもしよう。

愛は総ての存在を一にす。

愛は味^{あじわ}うべくして知るべからず。

愛に住すれば人生に意義あり、愛を離るれば、人生は無意義なり。

人生の外^{ほか}に出で、人生を望み見て、人生を思議する時、人生は遂に不可^{ふか}得^{とく}なり。

人生に目的ありと見、なしと見る、共に理智の作用のみ。理智の眼^{まなこ}を抉^{けつ}出して目的^しを見ざる処^みに、至味存す。

理想は幻影のみ。

凡人^{ぼんにん}は存在^{うち}の中に住す、其一生は觀念なり。詩人哲學者は存在^{ほか}の外に遊離す、觀念は其一生なり。

凡人^{ぼんにん}は聖人の縮図なり。

人生の真味は思想に上らず、思想を超脱せる者は幸^{さいわい}なり。

二十世紀の文明は思想を超脱せんとする人間の努力たるべし。

此^こ様な事ならまだ幾らでも列べられるだろうが、列べたつて詰らない。皆^{うそ}啞^{うそ}だ。啞^{うそ}でない事を一つ書いて置こう。

私はポチが殺された当座は、人間の顔が皆犬殺しに見えた。是^{これだけ}丈は本当の事だ。

二十一

小学から中学を終るまで、落第をも込めて前後十何年の間、毎日々々の学校通い、——
考えて見れば面白くもない話だが、併し其を左程にも思わなかった。小学校^{うち}の中は、内で
親に小蒼蠅^{こうるさ}く世話を焼かれるよりも、学校へ行つて友達と騒ぐ方が面白い位に思つていた

し、中学へ移つてからも、人間は斯うしたものと合点して、何とも思わなかった。

しかし、凡そ学科に面白いというものは一つも無かった。何の学科も何の学科も、皆味も卒氣もない聾聵する物ばかりだった、就中私の最も閉口したのは数学であつた。

小学時代から然うだったが、中学へ移つてからも、是ばかりは変らなかつた。此次は代数の時間とか、幾何の時間とかになると、もう其が胸に支えて、溜息が出て、何となく世の中が悲観された。

算術は四則だけは如何やら斯うやら了解めたが、整数分数となると大分怪しくなつて、正比例で一息を吐く。が、其お隣の反比例から又亡羊し出して、按分比例で途方に暮れ、開平開立求積となると、何が何だか無茶苦茶になつて、詰り算術の長の道中を浮の空で通して了つたが、代数も矢張り其通り。一次方程式、二次方程式、簡単なのは如何になつても、少し複雑のになると、AとBとが紛糾かつて、何時迄経つてもXに膠着いていて離れない。況や不整方程式には、頭も乱次になり、無理方程式を無理に強付けられては、げんなりして、便所へ立つてホツと一息吐く。代数も分らなかつたが幾何や三角術は尚分らなかつた。初の中は全く相合せ得る物の大きさは相等しなどと真顔で教えられて、馬鹿扱にするのかと不平だったが、其中に切売の西瓜のような弓月形や、

二枚屏風を開いたような二面角が出て来て、大きなお供そなえに小さいお供そなえが附着くつついてヤツサモツサを始める段になると、もう気が逆上うわすツて了い、丸まるのみ呑にさせられたギゴチない定義や定理が、頭の中でしやちこぼつて、其心持の悪いこと一通りでない。試験が済むと、早速咽喉のどへ指を突込んで留飲りゅういんの黄水きみずと一緒に吐出せるものなら、吐出して了つて清々せいせいしたくなる。

何の因果で此こん様な可厭いやな想をさせられる事か、其は薩張さつぱり分らないが、唯此可厭いやな想を忍おもいばなければ、学年試験に及第させて貰えない。学年試験に及第が出来ぬと、最終の目的物の卒業証書が貰えないから、それで誠に止むことを得ず、眼を閉ねむつて毒を飲む気で辛抱した。

尤も是は数学ばかりでない。何どの学科も皆多少とも此気味がある。味わつて楽しむなどいふのは一つもない、又楽しんでゐる暇ひまもない。後から後からと他の学科が急立せきたてるから、狼あ狽わてて片端かたはしから及第のお呪まじないの御符の積つもりで鵜呑うのみにして、而して試験が済むと、直ぐ吐出してケロリと忘れて了う。

今になって考えて見ると、無意味だった。何の為に学校へ通ったのかと聞かれれば、試験の為にというより外はない。全く其頃の私の眼中には試験の外に何物も無^なかつた。試験の為に勉強し、試験の成績に一喜一憂し、如何^{どん}な事でも試験に関係の無い事なら、如何^{どう}なとなれと余処に見て、生命の殆ど全部を挙げて試験の上に繋^かけていたから、若し其頃の私の生涯から試験というものを取去つたら、跡は他愛^{たわい}のない烟^{けむ}のような物になつて了う。

これは、しかし、私ばかりというではなかつた。級友という級友が皆然うで、平生^{へいぜい}の勉強家は勿論、金箔^{きんぱく}附の不勉強家も、試験の時だけは、言合せたように、一色^{しき}に血眼^{ちまなこ}になつて……鵜^うの真似をやる、丸^{まる}呑^{のみ}に呑込めるだけ無暗^{むやみ}に呑込む。尤も此連中は流石^{さすが}に平生を省みて、敢て多くを望まない、責めて及第点だけは欲しいが、貰えようかと心配する、而^{そう}して常は事毎に教師に抵抗して青年の意氣^{いき}の壮^{さか}なるに誇つていたのが、如何^{どう}した機^{はずみ}でか急に殊勝^{しゆしょう}氣^けを起し、敬礼も成る丈氣を附けて丁寧にするようにして、それでも尚お危険を感じると、運動と称して、教師の私宅へ推懸^{おしか}けて行つて、哀れッぽい事を言つて来る。

私は我儘者の常として、見栄^{みえ}坊^{ぼう}の、負^{まけ}嫌^{きらひ}だつたから、平生も余り不勉強の方ではな

かった。無論学科が面白くてではない、学科は何時迄経つても面白くも何ともないが、譬
 えば競馬へ引出された馬のようなもので、同じような青年と一つ埒入に鼻を列べて見る
 と、負るのが可厭でいきり出す、矢鱈に無上にいきり出す。

平生さえ然うだったから、況や試験となると、宛然の狂人になって、手拭を捻つて
 向鉢巻ばかりでは間怠ツこい、氷嚢を頭へ載けて、其上から頬冠りをして、夜の目
 も眠ずに、例の鵜呑をやる。又鵜呑で大抵間に合う。間に合わんのは作文に数学位のもの
 だが、作文は小学時代から得意の科目で、是は心配はない。心配なのは数学の奴だが、そ
 れをも無理に狼狽てた鵜呑式で押徹そうとする、又不思議と或程度迄は押徹される。
 尤も是はかね合もので、そのかね合を外すと、落ちちる。私も未だ試験慣れのせぬ中、ふ
 と其かね合を外して落ちちた時には、親の手前、学友の手前、流石に面目なかつたから、
 少し学校にも厭気が差して、其時だけは一寸学校教育なんぞを齷齪して受けるのが、
 何となく馬鹿氣た事のように思われた。が、世間を見渡すと、皆此無意味な馬鹿氣た事を
 平氣で懸命に行っている。一人として躊躇している者はない。其中で私一人其様な事を思
 うのは何だか薄氣味悪かつたから、狼狽てて、いや、馬鹿氣ているようでも、矢張必要の
 事なんだろうと思直して、素知らん顔して、其からは落第の恥辱を雪がねば措かぬと

発奮し、切齒して、扼腕して、果し眼になつて、又鵜の真似を継続して行つた。

鵜の真似でも何でも、試験の成績さえ良ければ、先生方も満足せられる、内でも親達が満足するから、私は其で好い事と思つていた。然うして多く学んで殆ど何も得る所がない中に、いつしか中学も卒業して、卒業式には知事さんも「諸君は今回卒業の名誉を荷うて……」といった。内でも赤飯を焚いて、お目出度いお目出度いと親達が右左から私を煽がぬ許りにして呉れた。してみれば、矢張名誉でお目出度いのに違いないと思つて、私も大に得意になつていた。

二十三

中学も卒業した。さて今後は如何するという愈胸の轟く問題になつた。

まだ中学に居る頃からの宿題で、寐ても寤めても是ばかりは忘れる暇もなかったのだが、中学を卒業してもまだ極らずに居たのだ。

極らぬのは私ではない。私は疾うに極めていた、無論東京へ行くと。

東京は如何な処だか人の噂に聞く許で能くは知らなかったが、私も地方育ちの青年だか

ら、誰も皆思うように、東京へ出て何処かの学校へ入りさえすれば、黙っていても自然と運が向いて来て、或は海外留学を命ぜられるようになるかも知れぬ。若し然うなったら……と目を開いて夢を見ていたのも昨日や今日の事でないから、何でも角でも東京へ出たいのだが、さて困った事には、珍しくもない話だけれど、金の出処がない。

父は其頃県庁の小吏であつた。薄給でかつ一家を支えていたので、月給だけでは私を中学へ入れる事すら覚束なかつたのだが、幸い親譲りの地所が少々と小さな貸家が二軒あつたので、其上りで如何にか斯うにか糊塗なつていたので。だから到底も私を東京へ遣れないという父の言葉に無理もないが、しかし……私は矢張東京へ出たい。

父は其頃未だ五十であつた。達者な人だけに氣も若くて、まだまだ十年や十五年は大丈夫生ていると、傍の私達も思つていたし、自分も其は其氣でいた。従つて世間の親達のように、早く私を月給取にして、嫁を宛がつて、孫の世話でもしていたいなぞと、そんな氣は微塵もないが、何分にも当節は勤向が六かしくなつて、もう永くは勤まらぬという。成程父は教育といつても、昔の寺子屋教育ぎりで、新聞も漢語字引と首引で漸く読み覚えたという人だから、今の学校出の若い者と机を列べて事務を執らされては、嘸辛い事も有ろうと、其様な事には浮の空の察しの無かつた私にも、話を聞けば能く分つて、同情が起

らぬでもないが、しかし、それだからお前は県庁へ勤めるなどして自分一人だけの事は為て呉れと、言われた時には情なかつた。父は然うして置いて、何ぞ他^{ほか}に氣骨の折れぬ力相應の事をして県庁の方は辞職する。辞職しても当分はお前の世話にはなるまいと、財産相應の穩当な案を立てて、私の為をも思つていうのは解つてゐるけれど、しかし私は如何^{どう}しても矢張^{やっぱり}東京へ出て何処かの学校へ入りたい。

で、親子一つ事を反覆^{くりかえ}すばかりで何日経^たつても話の纏まらぬ中に、同窓の何某^{なにがし}はもう二三日前^{ぜん}に上京したし、何某^{なにがし}は此月^{つき}末^{すえ}に上京するといふ話も聞く。私は氣が氣でないから、眼の色を異^{ちが}えて、父に逼^{せま}り、果は血氣に任せて、口惜^{くや}し紛れに、金がないと言われるけれど、地面を売れば如何^{どう}にかなりそうなのだ、それとも私の将来よりも地面の方が大事なら、學資は出して貰^{とつ}わんでも好い、旅費だけ都合して貰^{とつ}いたい、私は其で上京して苦學生になると、突飛^{とつ}な事を言い出せば、父は其様^{そん}な事には同意が出来ぬという、それは压制だ、いや聞^き分^{わけ}ないというものだ、親子顔を赤めて角芽^{つのめ}立つ側^{そば}で、母がおろおろするといふ騒ぎ。

其時私の為には頗る都合の好い事があつた。私と同期の卒業生で父も懇意にする去る家の息子が、何処のも同じ様に東京行きを望んで、親に拒まれて、自暴^{やけ}を起し、或夜窃^{ひそか}に有^あ

金が偷出して東京へ出奔すると、続いて二人程其真似をする者が出たので、同じ様な息子を持った諸方の親々の大恐慌となった。父も此一件から急に我を折って、彼方此方の親類を駈廻った結果、金の工面が漸く出来て、最初は甚く行悩んだ私の遊学の願も、存外難なく聴かれて、遂に上京する事になった時の嬉しさは今に忘れぬ。

二十四

愈出発の当日となった。待ちに待った其日ではあるけれど、今となつては如何やら一日位は延ばしても好いような心持になっている中に、支度はズンズン出来て、さて改まつて父母と別れの杯の真似事をした時には、何だか急に胸が一杯になって不覚ホロリとした。母は固より泣いた、快活な父すら目出度い目出度いと言いながら、頻に咳をして涕を拭いていた。

詠えの俵が来る。性急の父が先ず狼狽て出して、座敷中を彷徨しながら、ソレ、風呂敷包を忘れるな、行李は好いか、小さい方だぞ、コココ蝙蝠傘は己が持つてツてやる、と固より見送つて呉れる筈なので、自分も一台の俵に乗りながら、何は載つたか、何は…

：ソレ、あの、何よ……と、焦心^{あせ}る程尚お想出せないで、何やら分らぬ手真似をして独り無上^{むじやう}に車上で騒ぐ。

母も門口まで送つて出た。愈俤^{いよいよ}が出ようとする時、母は悲しそうに凝^{じつ}と私の面^{かお}を視て、

「じゃ、お前ねえ、カカ身体を……」とまでは言い得たが、後^{あと}が言えないで、涙になった。

私は故意^{わざ}と附元氣^{つけげんき}の高声^{たかごえ}で、「御機嫌よう！」と一礼すると、俤^{くるま}が出たから、其儘

正面^{まむき}になつて了つたが何だか後髪を引かれるようで、俤^{くるま}が横町を出離れる時、一寸後を

振向いて見たら、母はまだ門前に悄^{しんぼり}然と立つていた。

道々も故意^{わざ}と平氣な顔をして、往來を眺めながら、勉^{つとめ}て心を紛らしている中に、馴染の

町を幾つも過ぎて俤^{くるま}が停車場^{ステーション}へ着いた。

まだ発車には余程間^{あいだ}があるのに、もう場内は一杯の人で、雑^{ごたごた}然と騒がしいので、父が

又狼狽^{あわ}て出す。親しい友の誰^{たれ}彼^{かれ}も見送りに来て呉れた。其面^{そのかお}を見ると、私は急に元氣

づいて、例^{いつ}になく壮^{さかん}に饒舌^{しゃべ}つた。何だか皆が私の挙動に注目しているように思われてなら

なかった。無論友達^{うち}は家で立際^{たちぎわ}に私の泣いたことを知る筈はないから……

驕^{やが}て発車の時刻になつて、汽車に乗込む。手持無沙汰な落着かぬ数分^{すぶん}も過ぎて、汽笛が

鳴る。私が窓から首を出して挨拶をする時、汽車は動^{うご}き出して、父の眼をしよぼつかせた

顔がチラリとして直ぐ後になる、見えなくなる。もうプラットフォームを出離れて、白ペンキの低い柵が走る、其向うの後向きの二階家が走る、平屋が走る。片側町になって、人や車が後へ走るのが可笑しいと、其を見ている中に、眼界が忽ち豁然と明くなって、田圃になった。眼を放つて見渡すと、城下の町の一角が屋根は黒く、壁は白く、雑然と塊まつて見える向うに、生れて以来十九年の間、毎日仰ぎ瞻たお城の天守が遙に森の中に聳えている。ああ、家は彼下だ……と思う時、始めて故郷を離れることの心細さが身に染みて、悄然としたが、悄然とする側から、妙に又気が勇む。何だか籠のような狭隘しい処から、茫々と広い明るい空のような処へ放されて飛んで行くようで、何となく心臓の締るような気もするが、又何処か暢びりと、急に脊丈が延びたような気もする。こうした妙な心持になって、心当に我家の方角を見ていると、忽ち礪と物に眼界を鎖された。見ると、汽車は截割つたように急な土手下を行くのだ。

二十五

申後れたが、私は法学研究のため上京するのだ。

其頃の青年に、政治ではない、政論に興味を持たん者は幾んど無かつた。私も中学に居る頃から其が面白くて、政党では自由党が大の勲負であつたから、自由党の名士が遊説に來れば、必ず其演説を聴きに行つたものだ。無論板垣さんは自分の叔父さんか何ぞのよう
うに思つていた。

實際の政界の事情は些とも分つていなかった。自由党は如何いう政党だか、改進黨と如何違ふのだか、其様な事は分つてゐるような風をして、実は些とも分つていなかったが、唯初心な眼で局外から觀ると、何だか自由党の人というと、其人の妻子は屹度饑に泣いてるように思われて、妻子が饑に泣く——人情忍び難い所だ。その忍び難い所を忍んで、妻や子を棄てて置いて、而して自分は芸者狂いをするのじゃない、四方に奔走して、自由民権の大義を唱えて、探偵に跟随られて、動もすれば腰縄で暗い冷たい監獄へ送られても、屈しない。偉いなあ！ と、こう思つていたから、それで好きだった。

好きは好きだったが、しかし友人の誰彼のように、今直ぐ其真似は仕度くない。もう少し先の事にしたい。兎角理想というものは遠方から眺めて憧憬していると、結構な物だが、直ぐ実行しようとする、種々都合の悪い事がある。が、それでは何だか自分にも薄志弱行のように思われて、何だか心持が悪かつたが、或時何かの學術雜誌を読むと、

今の青年は自己の当然修むべき學業を棄てて、動もすれば身を政治界に投ぜんとする風ありと雖も、是れ以ての外の心得違なり、青年は須らく客氣を抑えて先ず大に修養すべし、大に修養して而して後大に為す所あるべし、という議論が載っていた。私は嬉しかった。早速此持重説を我物にして了つて、之を以て実行に逸る友人等を非難し、而して竊に自ら弁護する料にしていた。

斯ういう事情で此様な心持になつていたから、中学卒業後尚お進んで何か専門の學問を修めようという場合には、勢い政治學に傾かざるを得なかつた。父が上京して何を遣りたいのだと言つた時にも、言下に政治學と答えた。飛んだ事だといつて父が夫では如何しても承知して呉なかつたから、じゃ、法學と政治學とは從兄弟同士だと思つて、法律をやりたと言つて見た。法律學は其頃流行の學問だつたし、県の大書記官も法學士だつたし、それに親戚に、私立だけれど法律學校出身で、現に私達の眼には立派な生活をしている人が二人あつた。一人は何処だつたか記憶がないが、何でも何処かの地方で代言をして、芸者を女房にして贅沢な生活をしていて、今一人は内務省の属官でこそあれ、好い処を勤めている証拠には、曾て帰省した時の服裝を見ると、地方では奏任官には大丈夫踏める素晴らしい服裝で、何しても金の時計をぶら垂げていたと云う。それで父も法律なら好かる

うと納得したので、私は遂に法学研究のため斯うして汽車で上京するのだ。

二十六

東京へ着いたのは其日の午後の三時頃だったが、便たよつて行くのは例の金時計をぶら垂さげていたという、私の家うちとは遠縁の、変な苗字だが、小狐三平おぎつねという人の家うちだ。招魂社の裏手の知れ難にくい家で、車屋に散々こぼされて、辛やッと尋ね当てて見ると、門構は門構だが、潜くぐり門もんで、国で想像していたような立派な冠木門かぶきもんではなかった。が、標札を見れば此こ家に違ちがいから、潜くぐりを開けて中に入ると、直ぐもう其処が格子戸作りの上り口で、三度四度案内を乞やっうて漸やっと出て来たのを見れば、顔や手足の腫起むくんだような若い女で、初は膝を突きそうだったが、私の風体を見て中止にして、立ちながら、何ですという。はてな、家うちを間違えたか知らと、一寸狼狽ちよつとしたが、標札に確おぎつねに小狐三平とあったに違ちがいらないから、姓名なを名告なつて今着いた事を言いうと、若い女は怪訝けげんな顔をして、一寸お待ちなさいと言いつて引込ひっこんだぎり、中々出て来ない。車屋は早く仕て呉れという。私は気がでない。が、前以て書面で、世話を頼む、引受けたと、話が着いてから出て来たのだし、今日上京

する事も三日も前に知らせてあるのだから、今に伯母さんが——私の家では此家の夫人を伯母さんと言いつけていた——伯母さんが出て来て来て好いように仕て呉れると、其を頼みにしていると、久らくして伯母さんではなくて、今の女が又出て来て、お上なさいという。荷物が有りますと、口を尖がらかすと、荷物が有るならお出しなさい、というから、車屋に手伝つて貰つて、荷物を玄関へ運び込むと、其女が片端から受取つて、ズンズン何処かへ持つてツて了つた。

車屋に極めた賃金を払おうとしたら、骨を折つたから増を呉れという。余所の車は風を切つて飛ぶように走る中を、のそのそと歩いて来たので、些とも骨なんぞ折つちやいない。田舎者だと思つて馬鹿にするなどと思つたから、厭だといった。すると、車屋は何だか訳の分らぬ事を隙間もなくベラベラと饒舌り立つて、段々大きな声になるから、私は其大きな声に驚いて、到頭言いなり次第の賃金を払つて、東京という処は厭な処だと思つた。

車屋との悶着を黙つて衝突つて視ていた女が、其が済むのを待兼たように、此方へ来いというから、其跟に随いて玄関の次の薄暗い間へ入ると、正面の唐紙を女が此時ばかりは一寸膝を突いてスツと開けて、黙つて私の面を視る。私は如何して好いのか、分らなかつたから、

「中へ入っても好いんですか？」

と狼狽まごまごして案内の女に応援を乞うた時、唐紙の向うで、勿体ぶった女の声で、

「さあ、此方こちらへ。」

私は急に気が改まって、小腰を屈こじめて、遠慮勝に中へ入った。と、不意に箆笥や何や角かや沢山な奇麗な道具が燦然ぱつと眼へ入って、一寸目眩ちよつとまぼしいような気がする中でも、長火鉢の向うに、三十だか四十だか、其そん様な悠長な研究をしてる暇ひまはなかったが、何でも私の母よりもグツと若い女の人が、厚い座布団の上にチンと澄している姿を認めたから、狼狽いきなりして卒然其処へドサリと膝を突くと、真紅まつかになって、倒さになって、

「初めまして……」

二十七

伯母さん——といつては何だか調和うつりが悪い、奥様は一寸会釈ちよつとして、

「今お着きでしたか？」

「は」、と固くなる。

「何ですか、お国では阿父おとうさんも阿母おかあさんもお変りは有りませんか？」

「は。」

と矢張やっぱり固くなりながら、訥弁とつべんでポツリポツリと両親の言伝ことづてを述べると、奥様は聴いているのか、いないのか、上調子うわちようしではあはあと受けながら、厭に赤ちやけた出がらしの番茶を一杯注いで呉れたぎりで、一向構つて呉れない。気が附いて見ると、座布団も呉れてない。

何時迄経つても主人あるじが顔を見せぬので、

「伯父さんはお留守ですか？」

と不覚つがい言つて了つた顔を、奥様はジロリと尻眼に掛けて、

「主人はまだ役所から退ひけません。」

主人と厭に力を入れて言われて、じゃ、伯父さんじゃ不いけな好つたのか知ら、と思うと、又私は真紅まっかになった。

ところへバタバタと椽側に足音がして、障子が端手はしたなくガラリと開いたから、ヒョイと面かおを挙あげると、白い若い女の顔——とだけで、其以上の細かい処は分らなかったが、何しろ先刻取次に出たのとは違う白い若い女の顔と衝着ぶつつた。是が噂に聞いた小狐おぎつねの独娘ひとりむすめ。

の雪江さんだなと思うと、私は我知らず又固くなって、狼狽てて俯向いて了った。

「阿母さん阿母さん」、と雪江さんは私が眼へ入らぬように挨拶もせず、華やかな若い艶のある美しい声で、「矢張私の言つた通だわ。明日が楽だわ。」

「まあ、そうかい」、と吃驚した拍子に、今迄の奥様がヒヨイと奥へ引込んで、矢張尋常の阿母さんになって了った。

「厭だあ私……だから此前の日曜にしようと言たのに、阿母さんが……」といいながら座敷へ入つて来て、始めて私が眼へ入つたのだろう。ジロジロと私の風体を視廻して、膝を突いて、母の顔を見ながら、「誰方？」

「此方が何さ、阿父様からお話があつた古屋さんの何さ。」

「そう。」

といつて雪江さんは此方に向いたから、此処らでお辞儀をするのだろうと思つて、私は又倒さになつて一礼すると、残念ながら又真紅になつた。

雪江さんも一寸お辞儀したが、直ぐと彼方に向いて了つて、

「私厭よ。阿母さんが彼様な事言つて行かなかつたもんだから……」

「だつて仕方がなかつたんだわね。私だつて彼様な窮屈な処へ行くよか、芝居へ行つた方

が幾ら好いか知れないけど、石橋さんの奥様に無理に誘われて辞り切れなかったンだもの。好いわね、其代り阿父様に願つて、お前が此間中から欲しい欲しいてツてる彼ね？」と娘の面を視て、薄笑いしながら、「彼を買つて頂いて上げるから……仕方がないから。」

「本当？」と雪江さんも急に莞爾々々となつた。私は見ないでも雪江さんの挙動は一々分る。「本当？ そんなら好いけど……ちよいとちよいと、其代り……」と小声になつて、

「ルビー入りよ。」

「不好意思不好意思！ ルビー入りなんぞツて、其様な贅沢な事が阿父様に願えますか？」

「だつてえ……尋常のじゃあ……」と甘たれた嬌態をする。

「そんならお止しなさいな。尋常ので厭なら、何も強いて買つて上げようとは言わないから。」

「あら！ ……」と忽ち機嫌を損ねて、「だから阿母さんは嫌いよ。直あだもの。尋常のじや厭だつて誰も言てやしなくつてよ。」

「そんなら、其様な不足らしい事お言いでない。」

「へえへえ、恐れ入りました」、と莞爾して、「じや、尋常のでも好いから、屹度よ。ね

え、阿母さん、欺しちや厭よ。」

「誰がそんな……」

「まあ、好かつた！」と又莞爾して一寸私の面を見た。

二十八

私は先刻から存在を認めていられないようだから、其隙に窃そり雪江さんの面を覗いたのだ。雪江さんは私よりも一つ二つ、それとも三つ位年下かも知れないが、お出額で、円い鼻で、二重顎で、色白で愛嬌が有ると謂えば謂うようなものの、声程に器量は美くなくかつた。が、若い女は何処となく好くて、私がうっかり面を覗いている所を、不意に其面が此方を向いたのだから、私は驚いた。驚いて又俯向いて、膝前一尺通りの処を佶と視据えた。

雪江さんは又更めて私の様子をジロジロ覗いているようだったが、

「部屋は何処にするの？」

と阿母さんの方を向く。

「え？」と阿母^{かあ}さんは雪江さんの面^{かお}を視て、「あの、何のかい？　玄関脇の四畳が好かうと思つて。」

「あんな処^{とこ}!!　……」

と雪江さんが一寸驚くのを、阿母^{かあ}さんが眼に物言わせて、了解^{のしみ}ませて、

「彼^{あそこ}処^こが一番明るくツて好^いいから。」

「そう」、と一切の意味を面^{かお}から引^ひ込めて、雪江さんは澄して了つた。

「おお、そうだつね」、と阿母^{かあ}さんの奥様は想出したように私の方を向いて、「荷物がまだ其儘でしたっけね。今案内させますから、彼方^{あっち}へ行つて荷物の始末でもなさい。雪江、お前一寸案内してお上げ。」

雪江さんが起^たつたから、私も起^たつて其^{その}跟^{あと}に随^ついて今度は椽側へ出た。雪江さんは私より脊^{せい}が低い。ふツくりした束髪で、リボンの色は——彼^{あれ}は樺色というのか知ら。若い女の後姿というものは悪くないものだ。

椽側を後戻りして又玄関へ出ると、成程玄関脇に何だか一間ある。

「此処よ。」

と雪江さんが衝^つと其処へ入つたから、私も続いて中へ入つた。奥様は明るいといったけ

れど、何だか薄暗い長四畳で、入るとブクツとして変な足^{あしごた}応えだったから、先ず下を見ると、畳は茶褐色だ。西に明^{あかり}取りの小窓がある。雪江さんが其を明けて呉れたので、少し明るくなつたから、尚お能く^よ視廻^{みまわ}すと、壁は元来何色だったか分らんが、今の所では濁^ど黒い変な色で、一カ所壊れ^{くず}を取^{とり}繕^{つくろ}った痕^{あと}が目立って黄ろい球^{たま}を描いて、人魂^{ひとたま}のよう^{すくろ}に尾を曳^ひいている。無論一体に疵^{きず}だらけで処々鉛筆の落書の痕^{あと}を留めて、腰張の新^{あちこ}聞紙の剥^めれた蔭から隠した大疵^{おおきず}が窺^{そっ}と面^{かお}を出している。天井を仰向^{あおむ}いて視ると、彼方此^{あちこ}方の雨漏りの暈^{ぼか}したような染^{しみ}が化物めいた模様になつて浮出していて、何だか気味^{きび}の悪いような部屋だ。

「何時^{いつ}の間にか掃除したんだよ。それでも奇麗になつたわ」、と雪江さんは部屋の中を視^み廻^{まわ}していたが、ふと片隅に積んであつた私の荷物に目を留て、「貴方^{あなた}の荷物つて是れ？」と、臆面もなく人の面^{かお}を視る。

私は狼狽^{あわ}てて壁を視詰^{みつめ}て、

「然うです。」

「机がないわねえ。私^{あたし}所に明^{とこ}いてるのが有るから、貸^あて上^あましようか？」

「なに、好^いいです明日^{あした}買^あつて来るから」、と矢張壁を視詰^{みつ}めた儘で。

「私^{あたし}要らないんだから、使つても好くつてよ。」

「なに、好^いいです、買つて来るから。」

「本^{ほん}当^とに好くつてよ、然う遠慮しないでも。今持つて来てよ」、と蝶の舞うように翻^{ひら}然と身を翻^{かえ}して、部屋を出て、姿は直ぐ見えなくなつたが、其処らで若い華やかな声で、「其代り小さくツてよ」、というのが聞えて、軽い足音がパタパタと椽側を行く。

私は荷物の始末を忘れて、雪江さんの出で行つた跡^{あと}をうっかり見ていた。事に寄ると、口^あを開いていたかも知れぬ。

二十九

荷物^{ほど}を解^{ほど}いていると、雪江さんが果して机を持つて来て呉れた。成程小^こさい——が、折角^{こころざし}の志^しを無にするも何だから、借りて置く事にして、礼をいつて窓^{まど}下^{した}に据え^すえると、雪江さんが、それよか入口の方が明るくツて好^いかろうという。入口では出入^{でい}りの邪魔になると思^{おも}つたけれど、折角^{しよごん}の助言^{じょごん}を聴かぬのも何だから、言う通りに据^すえ^え直^{なお}すと、雪江さんが、矢張^{やっぱ}窓の下の方が好^いいという。で、矢張^{やっぱ}窓の下の方へ据えた。

早速私が書物を出して机の側に積むのを見て、雪江さんが、
「本箱も無かったわねえ。私あたし所ところに二つ有るけど、皆塞みんふさがつて、貸して上げられないわ
。」

「なに、買って来るから、好いです。」

「そんならね、晩に勧工場かんこうばで買ってらっしゃいな。」

「え？」と私は聞直した、——勧工場かんこうばというものは其時分まだ国には無かったから。

「小川町おがわまちの勧工場かんこうばで。」

「勧工場かんこうばツて？」

「あら、勧工場かんこうばを知らないの？ まあ！ ……」

と雪江さんは吃驚びっくりした面かおをして、突然破裂したように笑い出した。娘というものは壺つぼく
口ちをして、氣取つて、オホホと笑うものとはかり思つてゐる人は訂正なさい。雪江さんは
娘だけれど、口を一杯に開いて、アハハアハハと笑うのだ。初め一寸仰向ちよつとあおむいて笑つて、
それから俯向うつむいて、身を揉もんで、胸を叩いて苦しがつて笑うのだ。私は真紅まつかになつて黙つ
ていた。

先刻取次さつきに出た女は其後漸く下女と感付いたが、此時障子の蔭からヒョコリお亀のよう

な笑顔^{えがお}を出して、

「何を其様^{そんな}に笑ってらッしやるの？」

「だって……アハハハハ！ ……古屋さんが……アハハハ！ ……」

「あら、一寸^{ちよつと}、此方^{このかた}が如何^{どう}かなすったの？」

無礼者^{ぶれいもの}奴^めがズカズカ部屋へ入って来た、而^{そう}して雪江さんの笑いが止らないで、些^{ちつ}とも要領を得ない癖に、訳も分らずに、一緒になつてゲラゲラ笑う。

其時ガラガラという車の音が門前に止つて、ガラツと門^あが開くと同時に、大きな声で、
威勢よく、

「お帰りッ！」

形勢^{とみ}は頓^{とみ}に一変した。下女は急に真面目になつて、雪江さんを棄てて置いて、急いで出て行く。

雪江さんもまだ可笑^{おかし}がりながら泪^{なみだ}を拭き拭き、それでも大^{おお}に落着いて後^{あと}から出て行く。

主人の帰りとは私にも覺^{さと}れたから、急いで起^たち上つて……窃^{こっそ}り窓から覗いて見た。

歸つた人は丁度^{くぐ}潜りを潜る所で、まず黒の山高帽がヌツと入つて、続いて縞のズボンに靴の先がチラリと見えたかと思うと、渋紙色した髭^{ひげ}面^{つら}が勃^む然^っ仰向^{あおむ}いたから、急いで首

を引込めたけれど、間に合わなかった。見附かッちやツた。

お帰り遊ばせお帰り遊ばせ、と口々に喋々しく言う声が玄関でした。奥様——も何だか変だ、雪江さんの阿母さんの声で何か言うと、ふう、そうか、ふうふう、という声は主人に違いない。私の話に違いない。

悪い事をした、窓からなんぞ覗くんじゃなかったと、閉口している所へ下女が呼びに来て、愈閉口したが、仕方がない。どうせ志を立てて郷関を出た男児だ、人間到る処で極りの悪い想いする、と腹を据えて奥へ行つて見ると、もう帰った人は和服に着易えて、曾て雪江さんの阿母さんが占領していた厚蒲団に坐っている。私は誰でも逢いつけぬ人に逢うと、屹度真紅になる癖がある。で、此時も真紅になつて、一度国で逢った人だから、久瀬といつて例の通り倒さになると、先方は心持首を動かして、若し声に腰が有るなら、その腰と思う辺に力を入れて、「はい」という。父も母も宜しく申しましたという、又「はい」という。何卒何分願いますという、一段声を張揚げて、「はい」という。

晚餐になつて、其晩だけは私も奥で馳走になつた。花模様の丸ボヤの洋灯の下で、隅ではあつたが、皆と一つ食卓に對い、若い雪江さんの罪の無い話を聴きながら、阿父さん阿母さんの莞爾々々とした面を見て、賑かに食事して、私も何だか嬉しかつたが……

聽て食事が済むと、阿父さんが又主人になつて、私に對つて徐々小むずかしい話を始めた。何でも物価高直の折柄、私の入る食料では到底も賄い切れぬけれど、外ならぬ阿父さんの達ての頼みであるに因つて、不足の処は自分の方で如何にかする決心で、謂わば義侠心で引受けたのであれば、他の学資の十分な書生のように、悠長な考えでいてはならぬ、何でも苦学すると思つて辛抱して、品行を慎むは勿論、勉強も人一倍するようにという話で、聴いていても面白くも変哲もない話だから、雪江さんは話半に小さな欠びを一つして、起つて何処へか行つて了つた。私は少し本意なかつたが、やがて奥まつた処で琴の音がする。雪江さんに違いない。雪江さんはまだ習い初めだと見えて、琴の音色は何だかボコン、ボコン、ベコン、ボコンというように聞えて妙だつたけれど、私は鳴物は大好だ。何時聴いても悪くないと思つた。

で、遠音に雪江さんの琴を聴きながら、主人の勘定高い話を聴いていると、琴の音が食料に搦んだり、小遣に離れたりして、六円がボコン、三円でベコンというように聞えて、

何だか変で、話も能く分らなかったが、分らぬ中に話は進んで、

「で、家も下女一人外使うて居らん。手不足じゃ。手不足の処で君の世話をするのじやから、客扱いにはされん。そりや手紙で阿父さんにも能う言うて上げてあるから、君も心得てるじやろうな？」

「は。」

「からして勉強の合間には、少し家事も手伝うて貰わんと困る。なに、手伝うというても、大した事じゃない。まあ、取次位のものじや。まだ何ぞ角その他に頼む事も有ろうが、なに、皆大した事じゃない。行つて貰えような？」

「は、何でも僕に出来ます事なら……」

「そ、そ、その僕が面白い。君僕というのは同輩或は同輩以下に對うて言う言葉で、尊長者に對うて言うべき言葉でない、そんな事も注意して、僕といわずに私というて貰わんとな……」

「は……不知氣が附きませんで……」

「それから、も一つ言うて置きたいのは我々の呼方じや。もう君の年配では伯父さん伯母さんでは可笑しい。これは東京の習慣通り、矢張私の事は先生と言うたら好かろう。先生、

此方このかたが御面会を願われます、先生、お使に行つて参りましょう——一向可笑おかしゆうない。
先生というて貰おう。」

「は、承知しました。」

「で、私わしを先生という日になると、勢い家内の事は奥さんと言わんと権衡けんこうが取れん。先生に対する奥さんじゃ。な、私わしが先生、家内が奥さん、——宜しいか？」

「は、承知しました。」

これで一通り訓戒が済んで、後は自慢話になつた。先生も法律は晩学で、最初は如何にも辛かつたが、その辛いのを辛抱したお蔭で、今日こんにちでは内務の一等属、何とかの係長たることを得たのだという話を長々と聴かされて、私は痺しびれが切れて、耐え切れなくなつて、泣出しそうだった。

辛やっと放免されて、暗黒くらやみを手探りで長四畳へ歸つて来ると、下女が薄暗い豆ランプを持つて来て、お前さん床を敷とつたら忘れずに消すのですよと、朋輩にでも言うように、粗率ぞんざいに言置いて行つて了つた。

国を出る時、此家ここの伯父さんの先生は、昔困つていた時、家うちで散々世話をして遣つた人だから、悪いようにはして呉れまいと、父は言つた。私も矢張其氣やっぱりで便たよつて来たのだが、

便^{たよ}つて来てみれば事毎に案外で、ああ、何だか妙な気持ちにする。

私は家が恋しくなつた……

三十一

私は翌日早速錦^{にしきちよう}町の某私立法律学校へ入学の手續を済ませて、其処の生徒になつて、珍らしい中^{うち}は熱心に勉強もしたが、其^{そのうち}中に段々怠り勝になつた。それには種々^{いろいろ}原因もあるが、第一の原因は家の用が多いからで。

伯父さんの先生——私は口惜^{くや}しいから斯ういう——伯父さんの先生は、用といつても大した事じやないと言つた。成程一命に關^{かか}わるような大した事ではないが、併し其大した事でない用が間斷^{しつかり}なく有る。まず朝は下女と殆ど同時に覺^{おこ}されて、雨戸を明けさせられる。伯母さんの奥さんと分担で座敷の掃除をさせられる。其が済むと、今度は私一人の専任で庭から、玄關先から、門前から、勝手口まで掃^はかせられる。少しでも塵芥^{ごみ}が残っていると、掃^{はきなほ}直しを命ぜられるから、丁寧^{はきは}に奇麗に掃かなきやならん。是が中々の大役の上に、時々其処らの草むしり迄やらされて萎靡^{がっかり}する事もある。

朝飯^{あさめし}を済せて伯父さんの先生の出勤を見送つて了うと、学校は午後だから、其迄は身体^{ちよつとすき}に一寸隙^{そのひま}が出来る。其暇^{そのひま}に自分の勉強をするのだが、其さえ時々急ぎの膳^{とうしやもの}写物^{しやもの}など吩咐^{いいつか}つて全潰^{まるつぶれ}になる。

夕方学校から帰ると、伯父さんの先生はもう疾^とうに役所から退^ひけていて、私の帰りを待兼たように、後から後からと用を吩咐^{いいつけ}る。それ、郵便を出して来いの、やれ、お客に御飯を出すのだから、急いで仕出し屋へ走れのと、純台所用の外は、何にでも私を使う。時には何の用だか知れもせぬ用に、手紙を持たせられて、折柄^{おりから}の雨降にも用捨なく、遠方迄使いに遣られて、つくづく辛いと思つた事もある。さもなくば内で取次だが、此奴^{こいつ}が余所^{よそ}目^めには楽なようで、行^やつて見ると中々楽でない。漸く刑法講義の一枚も読んだかと思うと、もう頼もうと来る。聞えん風^{ふう}も出来ぬから、洩^た々起^たつて取次に出て、倒さになる。私のお辞儀は家内の物議を惹^{ひき}起^{おこ}して度々喧^{やか}ましく言われているけれど、面倒臭^ういから、構わず倒さになる。でも、相手が立派な商人か何かだと、取次栄^{とりつぎばえ}がして好^いい。伯父さんの先生、其様^{そん}な時には、ふうふうと二つ返事で、早速お通し申せと来る。上機嫌だ。其代り其様^{そん}な客の帰る所を見ると、持つて来た物は屹度^{きつと}持つて帰らない。立派な髭^{ひげ}の生えた人もまだ好^いい。そんなのに限つて尊大振つて、私が倒さになつても、首一つ動かさぬ代り、取次いで

も小言を言われる氣遣いはない。反て伯父さんの先生狼狽^{あわ}てて迎えに飛んで出る事もある。一番六^{むす}かしいのは風体の余り立派でない人で、就^な中^{なかん}帽子^{かぶ}を冠^{かん}らぬ人は、之を取次ぐに大に警戒を要する。自筆の名刺か何かを出されて、之を持って奥へ行くと、伯父さんの先生名刺を一見するや、面^{かお}を顰^{しか}めて、居ると言ったかという。居るものを居ないと言われましか、と腹の中では議論を吹懸^{ふっか}けながら、口へ出しては大人しく、はい、然う申しましたという、と、チョツと舌打して、此^こ様な者を取次ぐ奴が有るか、君は人の見別^{みわけ}が出来なると、小言を言つて、居ないと言つて返して了えという。私は脹^{ふく}れ面^{つら}をして容易に起^たない。すると、最終^{しまい}には渋々会いはするが、後で金を持^{もつ}てかれたといつて、三日も沸^{ぶつ}々言つてゐる。

沸^{ぶつ}々言つたつて関^{かま}わないが、斯ういう処を傍^{はた}から見たら、誰^{たれ}が眼にも私は立派な小狐^{おぎつ}家の書生だ。伯父さんの先生の畜^{ちく}生^{しやう}、自分から其氣で居ると見えて、或時^{ひと}人に對^{むか}つて家の書生がといつていた。既に相手方が右の始末だから、無理もない話だが、出入^{でいり}の者が皆矢張私を然う思つて、書生扱にする。不平で不平で耐^たまらないが、一々弁解^{べんげ}もして居られんから、私は誠に慥^{よん}どころなく不承々に小狐家の書生にされて了つて、而^そして月々食料を払つていた。

が、今となつて考えて見ると、不平に思つたのは私が未だ若かつたからだ。監督を頼まれたから、引受けて、序ついでに書生にして使う、——これが即ち親切というもので、此の外に別に親切というものは、人間に無いのだ。有るかも知れんが、私は一寸ちよつと見当らない。

三十二

体好く書生にされて私は忌々いまいましくてならなかつたが、しかし其でも小狐家を出て了う気にはならなかつた。初の中うちは国元へも折々の便たよりに不平を漏して遣つたが、其も後のちには弗ふつと止めて了つた。さればといつて家うちでの取扱いが變つたのではない。相變らず書生扱にされて、小ツこ甚びとくコキ使われ、果は下女の担任であつた靴磨きをも私の役に振替えられて了つた。無論其時は私は憤激した。余程下宿よっぼどしようかと思つた、が、思つたばかりで、下宿もせんで、為させられる儘に靴磨きもして、而して国元へは其を隠して居た。少し妙なようだが、なに、妙でも何でもない。私は実は雪江さんに惚れていたので。

惚れては居たが、夫だから雪江さんを如何どうしようという気はなかつた。其時分は私もまだ初心うぶだつたから、正直に女に惚れるのは男兒の恥辱と心得ていた。女を弄もてあそぶのは何故だ

か左程の罪惡とも思つて居なかつたが、苟も男兒たる者が女なんぞに惚れて性根を失うなどと、そんな腐つた、そんなやくざな根性で何が出来ると思巻いていた。が、口で思巻く程には心で思つていなかつたから、自分もいつか其程に擯斥する恋に囚われて了つたのだが、流石に囚われたのを恥て、明かに然うと自認し得なかつた氣味がある。から、若其頃誰かが面と向つて私に然うと注意したら、私は屹度、失敬な、惚なんぞするものか、と真紅になつて怒つたに違いない。が、実は惚れたとも思わぬ中に、いつか自分にも内々で、こッそり、次序なく惚れて了つていたのだ。

惚れた証拠には、雪江さんが留守だと、何となく歸りが待たれる。家に居る時には心が藻脱けて雪江さんの身に添うてでも居るように、奥と玄關脇と離れていても、雪江さんが、今何の座敷で何をしているかは大抵分る。

雪江さんは宵ツ張だから、朝は大層眠たがる。阿母さんに度々起されて、しどけない寢衣姿で、脛の露わになるのも氣にせず、眠そうな面をしてふらふらと部屋を出て来て、指の先で無理に眼を押開け、眶の裏を赤く反して見せて、「斯うして居ないと、附着いて了つてよ」、といつて皆を笑わせる。

雪江さんは一ツ橋のさる学校へ通つていたから、朝飯を済ませると、急いで支度をして

出て行く。髪は常も束髪だったが、履物はきものは背が低いからツて、高い木履ぼつくりを好いて穿はいていた。紫の包を抱えて、長い柄の蝙蝠傘こうもりがさを持って出て行く後姿が私は好くつて堪ならなかったから、いつも其時刻には何喰わぬ顔をして部屋窓から外を見ていると、雪江さんは大抵は見られているとは気が附かずに、一寸お尻ちよつとを撫なでてから、髪を壊こわすまいと、低く屈こんで徐そつと門を潜くぐつて出て行くが、時とすると潜る前にヒョイと後うしろを振向いて私と顔を看合せる事がある。そうすると、雪江さんは奇麗な齒並をチラリと見せて、何の意味もなく莞爾にっこりする。私は疾とうから出そうな莞爾にっこりを顔の何処へか押込めて、強いて真面目を作っているのだから、雪江さんの笑顔に誘われると、耐こらえ切れなくなつて不覺矢張莞爾ついでにばつこりする。こうして莞爾にっこりに対するに莞爾にっこりを以てするのを一日の樂みにして、其をせぬ日は何となく物足りなく思っていた。いや、罪の無い話さ。

三十三

午後はいつも私が学校へ行つた留守に、雪江さんが歸つて来るので、掛違つて逢わないが、雪江さんは歸ると、直ぐ琴のお稽古に近所のお師匠さんの処へ行く。私は一度何かで

学校が早く終った時、態々廻道わざわざ まわりみちをして其前を通つて見た事がある。三味線のお師匠さんと違つて、琴のお師匠さんの家は格子戸作りでも、履脱くつぬぎに石もあつて、何処か上品だ。入口に琴曲指南山勢門人やませ何とかの何枝と優しい書風で書いた札が掛けてあつた。窃そつと格子戸の中を覗いて見ると、赤い鼻緒や海老茶の鼻緒のすがった奇麗な駒下駄が三四足行儀よく並んだ中に、一足紫紺の鼻緒の可愛らしいのが片隅に遠慮して小さく脱棄ぬきすててある。之を見違えてなるものか、雪江さんのだ。大方駒下駄の主も奥の座敷に取繕とりつくろつてチンと澄しているに違ないと思うと、そのチンと澄している処が一目なりと見たくなつたが、生憎障子が閉切つてあるので、外からは見えない。唯琴の音がするばかりだ。稽古琴だから騒々しいばかりで趣は無いけれど、それでも琴は何処か床しい。雪江さんは近頃大分上手になつたけれど、雪江さんではないようだ。大方まだ濟ないンだろう、なぞと思ひながら、うツかり覗いていたが、ふツと気が附くと、先刻から側で何処かの八ツばかりの男の児が、青洩あおばなを啜り啜り、不思議そうに私の面を瞻かおみあげている。子供でも極きまりが悪くなつて、々に其処の門口を離れて歸つて来た事も有つたつけが……

夕方は何だか混雑ごたごたして落着かぬ中にも、一寸好い事が一つある。ランプ掃除は下女の役だが、夕方之に火を点けて座敷々々へ配るのは私の役だ。其時だけは私は公然雪江さ

んの部屋へ入る権利がある。雪江さんの部屋は奥の四畳半で、便所の側だけれど、一寸小奇麗な好い部屋だ。本箱だの、机だの、ガラス戸の箱へ入た大きな人形だの、袋入りの琴だの、写真挟みだの、何だの角だの体裁よく列べてあつて、留守の中は整然と片附いているけれど、帰つて来ると、書物を出放しにしたり、毛糸の球を転がしたりして引散かす。何かに紛れてランプ配りが晩くなつた時などは、もう夕闇が隅々へ行渡つて薄暗くなつた此の部屋の中に、机に茫然頬杖を杖いてる雪江さんの眼鼻の定かならぬ顔が、唯円々と微白く見える。何となく詩的だ。

「晩くなりました。」

とぶつきらぼうの私も雪江さんだけには言いつけぬお世辞も不覺出て、机上の毛糸のランプ敷へ窺とランプを載せると

「いいえ、まだ要らないわ。」

雪江さんは屹度斯ういう。これが伯父さんの先生でも有ろうものなら、口を尖がらかして、「もツと手廻して早うせにや不好！」と来る所だ。大した相違だ。だから、家で人間らしいのは雪江さんばかりだと言うのだ。

其儘出て来るのが、何だか飽気なくて、

「今日貴嬢あなたの琴のお師匠さんの前を通りました。一寸ちよつと好い家うちですね。」

「あら、そう」、と雪江さんがいう。心持首を傾かしげて、「何時頃？」

「そうさなあ……四時ごろでしたか。」

「じゃ、私あたしの行つてた時だわねえ。」

「ええ」、と私は何だか極きまりが悪くなつて俯向うつむいて了う。

此話が發展したら、如何どんな面白い話になるのだから分らんのだけれど、其様そのな時に限つて生憎あいにくと、茶の間辺あたりで伯母さんの奥さんの意地悪が私を呼ぶ、

「古屋さん！ 早くランプを……何を愚図々々してるンだろうねえ。」

残惜しいけれど、仕方がない。其切りで私は雪江さんの部屋を出て了う。

三十四

一番楽しみなのは日曜だ。それも天気だと、朝から客が立込んで私は目が眩まわる程忙しいし、雪江さんもお友達が遊びに来たり、お友達の処へ遊びに行つたりして、私の事なんぞ忘れてゐるから、天気は糞だ。雨降りに限る。就なかならず中伯父さんの先生は何か余儀ない用

事があつて朝から留守、雪江さんは一日家、という雨降の日が一番好い。

其様な日には雪江さんは屹度思切て朝寝坊をして、私なんぞは徐々昼飯が恋しくなる時分に、漸う起きて来る。顔を洗つて、御飯を喰べて、其から長いこと掛つて髪を結う。結い了う頃は最う午砲だけれど、お昼はお腹が満くて食べられない。「私廃してよ」、という。

部屋で机の前で今日の新聞を一寸読む。大抵続物だけだ。それから編棒と毛糸の球を持出して、暫くは黙つて切々と編物をしている。私が用が有つて部屋の前でも通ると、

「古屋さん、これ何になると思つて？」と編掛けを翳して見せる。私が見たんじゃ、何だか円い変なお猪口のような物で、何になるのだから見当が附かないから、分らないという、でも、まあ、当てて見ろという。熟考の上、「巾着でしよう？」という、
「いいえ」、と頭振を振る。巾着でないとなると、手袋には小さし、靴下でもなさそうだし、「ああ、分つた！ 句袋だ」、と凶星を言つた積でいうと、雪江さんは吃驚して、「まあ、可厭だ！ 句袋だなんぞツて……其様な物は編物にやなくツてよ。」
「句袋でもないとする、もう私には分らない。降参してうと、雪江さんは莞爾ともしないで、「これ、人形の手袋。」

雪江さんは一つ事を何時迄もしているのは大嫌いだから、私がまだ自分の部屋の長四畳へ帰るか帰らぬ中に、もう編物を止めて琴を浚さらっている。近頃では最うポコンのベコンでも無くなった。斯うして聴いていると、如何どうしても琴に違いないと、感心して聴惚ききほれていると、十分と経たぬ中に、ジャカジャカジャンと引搔廻ひつかきまわすような音がして、其切パタリと、琴の音は止む……ともう茶の間で若い賑にぎやかな雪江さんの声が聞える。

忽ちドタドタドタと橡側を駈けて来る音がする。下女の松に違いない。後からパタパタと追蒐おっかけて来るのは、雪江さんに極きまつてゐる。玄関で追付おついて、何を如何どうするのだから、キヤツキヤツと騒ぐ。松が敵かなわなくなつて、私の部屋の前を駈脱かけぬけて台所へ逃込む。雪江さんが後あとから追蒐おっかけて行つて、また台所で一騒動やる中に、ガラガラガチャンと何かが壊こわれる。阿母かあさんが茶の間から大きな声で叱ると、台所は急に火の消えたように闇寂ひっそりとなる。

私は、国に居る時分は、お向うのお芳ちゃん——子供の時分に能く飯事ままごとをして遊んだ、あのお芳ちゃんが好きだった。お芳ちゃんは小さい時には活潑な児だったが、大きくなるに随つれて、大層落着いて品の好い娘になつて、私は其様子が何となく好きだったが、雪江さんはお芳ちゃんとは正反対だ。が、雪江さんも悪くない、なぞと思ひながら、茫然ぼんやり机に頬杖ほつを突つている脊中を、誰だかワツといつてドンと撞つく。吃驚びっくりして振返ふりかえると、雪江

さんがキャツキャツといいながら、逃げて行くしどけない後姿が見える。私は思わず莞爾にっことなる。

莞爾にっことなつた儘で、尚お雪江さんの事を思続けて、果は思う事が人に知れぬから、好いようなものの、怪しからん事を内々思っていると、茶の間の椽側あたりで、オーという例の艶つやのある美しい声が聞える。初は地声の少し大きい位の処から、段々に甲かんだか高に競上せりあげて行つて、糸のように細くなつて、何かを突脱けて、遠い遠い何処かへ消えて行きそうになつて、又段々競下せりさがつて来て、果はパツと拡げたような太い声になつて、余念がない。雪江さんが肉声の練習をしているのだ。

三十五

私は其時分吉田松陰崇拜であつた。将来の自由党の名士を以つて自任しているのなら、グラッドストンかコブデン、ブライトあたりに傾倒すべきだが、何如どうした機はずみだつたか、松陰先生に心酔して了つて、書風まで力つとめて其人に似せ、窃ひそかに何回猛士とか僭せんして喜んでゐた迄は罪がないが、困つた事には、斯うなると世間に余り偉い人が無くなる。誰たれを見ても、

先ず松陰先生を差向けて見ると、一人として手^て心^{こゝろ}のある人物はない。皆一^{ひと}溜^{たま}りもなく敗^は亡^{いもう}する。それを松陰先生^{うしろ}の後に隠れて見ていると、相手は松陰先生に負るので、私に負るのではないが、何となく私が勝つたような気がして、大臣^{みん}が何だ、皆門下生^{みな}じゃないか。自由党の名士だつて左程偉くもない。況^いや学校^{わん}の先生なんぞは只の学者だ、皆降^{みな}らない、なぞと鼻息を荒くして、独りで威張つていた。私なぞの理想はいつも人に迷惑を懸ける許りで、一向自分の足^{たし}になつた事がないが、側^{はた}から見たら嘸^{さぞ}苦々しい事であつたろう。兎も角もこうして松陰先生大の崇拜で、留^り魂^{ゆう}録^{こん}は暗^{あん}誦^{しやう}していた程だつたが、しかし松陰崇拜が、不思議な事には、些^ちとも雪江さんを想う邪魔にならなかつたから、其時分私の眼中は天下唯松陰先生と雪江さんと有るのみだつた。

で、いつも学校の帰りには此二人の事を考え考え帰るのだが、或日——たしか土曜日だつたかと思う、土曜日は学校も早仕舞なので、三時頃にそうして二人の事を考えながら帰つて見ると、主人夫婦はいつも茶の間なのに、其日は茶の間に居ない。書齋かと思つて書齋へ行こうとすると、椽側^{はすれ}の尽頭^{はすれ}の雪江さんの部屋で、雪江さんの声で、

「誰？」

という。私は思わず立止つて、

「わたくし
私です。」

「古屋さん？」

という声と共に、部屋の障子が颯と開いて、雪江さんが面だけ出して、

「今日は皆留守よ。」

「え？」と私は耳が信ぜられなかった。

「阿父さんも阿母さんもね、先刻出懸けてよ。」

「そうですか」、と何気なく言ったが、内々は何だか急に嬉しくなって来て、

「松は？」

「松はお湯へ行つて未だ帰つて来ないの。」

「じゃ、貴嬢お一人？」

「ええ……一寸入らッしやいよ、此処へ。好い物があるから。」

と手招をする。斯うなると、松陰先生崇拜の私もガタガタと震い出した。

前にも断つて置いた通り、私は曾て真劔に雪江さんを如何かしようと思つた事はない。

それは決して無い。度々怪しからん事を想つて、人知れず其を楽しんで居たのは事実だけれど、勸業債券を買つた人が当籤せぬ先から胸算用をする格で、ほんの妄想だ。が、誰も居ぬ留守に、一寸入らツしやいよ、と手招ぎされて、驚破こそ思ふ拍子に、自然と体の震い出したのは、即ち武者震いだ。千載一遇の好機会、逸してなるものか、というような氣になつて、必死になつて武者震いを喰止めて、何喰わぬ顔をして、呼ばれる儘に雪江さんの部屋の前へ行くと、屈んでいた雪江さんが、其時勃然面を挙げた。見ると、何だか口一杯頬張つていて、私の面を見て何だか言う。言う事は能く解らなかつたが、側に焼芋が山程盆に載つていたから、夫で察して、礼を言つて、一寸躊躇したが、思切つて中へ入つて了つた。

雪江さんはお薩が好物だつた。私は好物ではないが、何故だか年中空腹を感じているから、食後だつて十切位はしてやる男だが、此時ばかりは芋どころでなかつた。切に勧められるけれど、難有う難有うとばかり言つて、手を出さなかつた。何だかもう赫となつて、夢中で、何だか霧にでも包まれたような心持で、是から先は如何なる事やら、方角が分らなくなつたから、彷徨していると、

「貴方は遠慮深いのねえ。男ツて然う遠慮するもんじやなくツてよ。」

と何にも知らぬ雪江さんが焼芋の盆を突付ける。私は今其処どころじやないのだが、手を出さぬ訳にも行かなくなつて手を出すと、生憎手先がぶるぶると震えやがる。

「如何して其様に震えるの？」

と雪江さんが不審そうに面を視る。私は愈狼狽して、又真紅になつて、何だか訳の分らぬ事を口の中で言つて、周章てて頬張ると、

「あら、皮ごと喰べて……皮は取つた方が好いわ。」

「なに、構わんです」、と仕方が無いから、皮ぐるみムシヤムシヤ喰りながら、「何は……何処へ入らしツたんです？」

「吉田さんへ」、と雪江さんは皮を剥く手を止めて、「私些とも知らなかつたけど、今晚が春子さんのお興入なんですつて。そら、媒人でしょう家は？ だから、阿父さんも阿母さんも早めに行つてないと不好つて、先刻出て行つたのよ。」

これで漸く合点が行つたが、それよりも爰に一寸吹聴して置かなきやならん事がある。私は是より先春色梅暦という書物を読んだ。一体小説が好きで、国に居る時分から軍記物や仇討物は耽読していたが、まだ人情本という面白い物の有ることを知

らなかった。これの知り初めが即ち此春色梅曆で、神田に下宿している友達の処から、松陰伝と一緒に借りて来て始めて読んだが、非常に面白かった。此梅曆に拠ると、斯ういう場合に男の言うべき文句がある。何でも貴嬢は浦山敷思わないかとか、何とか、ヒヨイと軽く戯談を言つて水を向けるのだ。思切つて私も一つ言つて見ようか知ら……と思つたが、何だか、どうも……ソノ極りが悪い。

「大變立派なお支度よ。何でもね、筆筥が四棹行くンですつて。それからね、まだ長持だの、挟箱だの……」

ああ、もう駄目だ。長持や挟箱の話になつちや大事去つた、と後悔しても最う追付かない。雪江さんは、何処が面白いのだから、その長持や挟箱の話に夢中になつて了つて、其から其と話し続けて、盛返したくも盛返す隙がない。仕方が無いから、今に又機会も有ろうと、雪江さんの話は浮の空に聞いて、只管其機会を待っていると、忽ちガラツと障子が開いて、

「あら、おたのしみ！……」

吃驚して振り返ると、下女の松めが何時戻つたのか、見ともない面を罅裂そうに莞爾つかせて立つてやがる。私は余程飛蒐つて横面をグワンと殴曲げてやろうかと思つ

た。腹が立つて腹が立つて……

三十七

千載一遇の好機会も松に邪魔を入れられて滅茶々々になって了ったが、松が交つて二つ三つ話をしている中に、間もなく夕方になった。夕方は用が有るから、三人ばらばらになつて、私はランプ配りやら、戸締りやら、一切り立働いて、例の通り部屋で晩飯を済すと、また身体に暇が出来た。雪江さんは一番先に御飯を食べて、部屋へ籠つた儘音沙汰がない。唯松ばかり後仕舞で忙しそうで、台所で器物を洗う水の音がボシヤボシヤと私の部屋へ迄聞える。

私は部屋で独りランプを眺めて徒然としてゐるようで、心は中々忙しかった。婚礼に呼ばれて行つたとすると、主人夫婦の帰るのには未だ間が有る。帰らぬ中に今一度雪江さんと差向いになりたい。差向いになつて何をするのだから、それは私にも未だ極らないが、兎に角差向いになりたい、是非なりたい、何か雪江さんの部屋へ行く口実はないか、口実は……と藻搔くけれど、生憎口実が看附からない。うずうずして独りで焦心していると、ふ

と椽側にバタリバタリと足音がする。其足音が玄關へ来る。確かに雪江さんだ。部屋の前を通越とおりとして台所へ行くか、それとも万ひよつと一障子が開くかと、成行なりゆきを待つ間の一分ぶんに心の臓を縮めていると、驚破すわ、障子がガタガタと……開きかけて、グツと支えたのを其儘にして、雪江さんが隙間から覗込みながら、

「勉強？」

と一寸首を傾げた。これが何を聞く時でも雪江さんの為すの癖で、看慣みなれては居るけれど、私は常いづも可愛らしいと思う。不断着だけれど、荒い縞の着物に飛白かすりの羽織を着て、華は美な帯を締めて、障子に掴つかまって斜はすに立つた姿も何となく目に留とまる。

ああ求むる者に与えられたのだ。神よ……といたいような気になって、無論莞爾にこにこ々々となつて、

「いいえ……まあ、お入なさい。」

「じゃ、私話あたしして入いくわ。奥は一人で淋しいから。」

珍客々々！ 之を優待せん法はない。よ、よ、と雪江さんが掛声をして障子を明けようとするけれど、開あかないのを、私は飛んで行つて力任せにウンと引開けた。何だか領元えりもとからぞくぞくする程嬉しい。

生憎あいにくと火鉢は私の部屋には無かつたけれど、今迄敷いていた赤ゲットを、四ツに畳んだのを中央まんなかへ持出して、其でも裏反うらがえしにして勧めると、遠慮するのか、それとも小汚こぎたいと思つたのか、敷いて呉れないから、私は黙つて部屋を飛出した。雪江さんは後あとで定めて吃驚びっくりしていたろうが、私は雪江さんの部屋へ座布団を取りに行つたので、是だけは我ながら一生の出来だつたと思う。

席が来ると、雪江さんが、

「貴方あなた、御飯が食べられて？ 私何わたしぼ何でも喰べられなかつたわ、余り先刻詰あんま さつき込んだもんだから。」

と微笑にっこりする。何時いつ見ても奇麗な齒並はなみだ。

私も矢張り莞爾やっぱ にっこりして、

「私も食べられませんでした……」

大嘘おおうそ！ 実は平生いつもの通り五杯喰べたので。

雪江さんは国産れでも東京育ちだから、

「……にもお芋があつて？」

「有りますとも。」

「じゃ、帰っても不自由はないわねえ。」

と又微笑する。

私も高笑いをした。雪江さんの言草が可笑かつたばかりじゃない。実は胸に余る嬉しさやら、何やら角やら取交せて高笑いしたのだ。

それから国の話になって、国の女学生は如何な風をしているの、英語は何位の程度だの、洋楽は流行るかのと、雪江さんは其様な事ばかり気にして聞く。私は大事の用を控えているのだ。其処じゃないけれど、仕方がないから相手になっていると、チヨツ、また松の畜生が邪魔に来やがつた。

三十八

松が来て私はうんざりして了つたが、雪江さんは反つて差向の時よりはすみ出して、果は松の方へ膝を向けて了つて、松ばかりを相手に話をする。私は居るか居ないか分らんようになって了つた。初は少からず不平に思つたが、しかし雪江さんを観ているのには、反て此方が都合が好い。で、母屋を貸切つて、庇で満足して、雪江さんの白いふツくりし

た面^{かお}を飽かず眺めて、二人の話を聴いていると、松も能く饒舌^{しゃべ}るが、雪江さんも中々負て
 いない。話は詰らん事ばかりで、今度開店した小間物屋は安売^{やす}だけれど品^{しな}が悪いの、お湯^ゆ
 屋^{うや}のお神さんのお腹がまた大きくなつて来月が臨月^{りんげつ}だの、八百屋の猫が児^こを五足生んで二
 疋喰^くべて了つたそうだと、要するに愚にも附かん話ばかりだが、しかし雪江さんの様子
 が好い。物を言う時には絶えず首を揺^{うご}かす、其度にリボンが飄^{ひら}々と一緒に揺^{うご}く。時々
 手真似^{まね}もする。今朝結^いつた束髪^{さくはつ}がもう大分乱れて、後毛^{おくれげ}が頬を撫^なでるのを蒼蠅^{そうそう}そうに搔^か
 上^{きあ}げる手附^{てづ}も好い。其様^{そのん}な時には彼^{あれ}は友禪^{ゆうぜん}メリンスというもの^{もの}だか、縮^{ちりめん}緬^{めん}だか、私には
 分らないが、何でも赤い模様や黄^きろい形^{かたち}が雑然^{ざつぜん}と附いた華美^{はで}な襦^{じゆ}袢^{ばん}の袖口^{そでぐち}から、少し紅^{あか}
 味^{かみ}を帯びた、白^{しろ}い、滑^{すべつ}こそうな、柔かそうな腕^{うで}が、時とすると二の腕^{ふたのうで}まで露^{あら}われて、も少
 し持^{もち}上^あげたら腋^{わき}の下が見えそうだと、氣を揉^もんでいる中^{うち}に、又旧^{もと}の位置^ちに戻^{かへ}つて了う。雪
 江^えさんは処女^{むすめ}だけれど、乳^{ちち}の処^{ところ}がふツくりと持上^{もちあ}っている。大方乳首^{ちちうぶ}なんぞは薄赤^{はくし}くなつ
 てるばかりで、有るか無いか分るまい……なぞと思^{おも}いながら、雪江さんの面^{かお}ばかり見てい
 ると、いつしか私は現実^{げんじつ}を離れて、恍^{うつ}惚^ととなつて、雪江さんが何だか私の……妻^{さい}でもな
 い、情人^{ラヴ}でもない……何だか斯^そう其様^{そのん}なような者に思^{おも}われて、兎に角^{とにかく}私の物^{もの}のように思^{おも}
 われて、今は斯^まうして松^{まつ}という他人^{たにん}を交^まぜて話^わをしているけれど、今に時刻^{じこく}が来れば、二人

一緒に斯う奥まった座敷へ行く。と、もう其処に床が敷つてある。夜具も郡内か何かだ。私が着物を脱ぐと、雪江さんが後からフワリと寝衣を着せて呉れる。今晚は寒いわねえと雪江さんがいう。む、む、寒いなあとか私も言つて、急いで帯をグルグルと巻いて床へ潜り込む。雪江さんが私の脱棄を畳んでいる。其様な事は好加減にして早く来て寝なと私がいう。あいといつて雪江さんが私の面を見て微笑する……

「ねえ、古屋さん、然うだわねえ？」

と雪江さんが此方を向いたので、私は吃驚して眼の覚めたような心持になった。何でも何か私の同意を求めているのに違いないから、何だか仔細は分らないけれど、

「そうですとも……」

と跋を合わせる。

「そら、御覧な。」

と雪江さんは又松の方を向いて、又話に夢中になる。

私はホツと溜息をする。今の続きを其儘にしてうのは惜しい。もう一度幻想でも何でも構わんから、もう一度、今の続きを考えて見たいと思うけれど、もう気が散つて其心持になれない。仕方がないから、黙つて話を聴いている中に、又いつしか恍惚と腑が脱けた

ようになつて、雪江さんの面^{かお}が右を向けば、私の面^{かお}も右を向く。雪江さんの面^{かお}が左を向けば、私の面^{かお}も左を向く。上を向けば、上を向く、下を向けば下を向く……

三十九

パタリと話が休^やんだ。雪江さんも黙つて了う、松も黙つて了う。何処^{どこ}でか遠方で犬の啼^な声が聞える。所謂^{いわゆる}天使が通つたのだ。雪江さんは欠^あびをしながら、序^{ついで}に伸^のもして、

「もう何時^{いつ}だろう？」

「まだ早いです、まだ……」

と私が狼^あ狽^わてて無理に早い事にして了う心を松は察^さしないで、

「もう九時過ぎたでしょうよ。」

「阿^あ父^{とう}さんも阿^あ母^{かあ}さんも遅いのねえ。何を為^してるンだろう？」

と又^あ欠^くびをして、「ああああ、古屋さんの勉強^{めいけん}の邪魔^{じゃま}しちゃった。私^{わたし}もう奥^{おく}へ行^いくわ。」

私が些^ちとも邪魔^{じゃま}な事はないといつて止めたけれど、最^とう斯^まうなつては留^とまらない、雪江さんは出て行^いつて了う。松も出て行^いく。私一人になつて了った。詰^つまらない……

ふと雪江さんの座蒲団が眼に入る……之れを見ると、何だか捜していた物が看附つたよ
うな気がして、卒然引浚って、急いで起上って雪江さんの跡を追った。
茶の間の先の暗い処で雪江さんに追付いた。

「なあに？ ……」

と雪江さんの吃驚したような声がして、大方振向いたのだろう、面の輪廓だけが微
白く暗中に見えた。

「貴嬢の座布団を持つて来たのです。」

「あ、そうだツけ。忘れちゃった。爰へ頂戴」、と手を出したようだった。

私は狼狽てて座布団を後へ匿して、

「好いです、私が持つてくから。」

「あら、何故？」

「何故でも……好いです……」

「そう……」

と何だか変に思つた様子だったが、雪江さんは又暗中を動き出す。暗黒で能くは分ら
ないけれど、其姿が見えるようだ。私も跡から探足で行く。何だか気が焦る。今だ、

今だ、と頭の何処かで喚く声がある。如何か為なきやならんような気がして、むずむずするけれど、何だか可怖くて如何も出来ない。咽喉が乾いて引付きそうで、思わずグビリと堅唾を呑んだ……と、段々明るくなつて、雪江さんの姿が瞭然明るみに浮出す。もう雪江さんの部屋の前へ来て、雪江さんの姿は衝と障子の中へ入つて了つた。

其を見ると、私は萎靡した。惜しいような氣のする一方で、何故だか、まず好かつたと安心した氣味もあつた。で、続いて中へ入つて、持つて来た座布団を机の前に敷いて、其処を退くと、雪江さんは礼を言いながら、入替わつて机の前に坐つて、

「遊んでらつしやいな。」

と私の面を瞻上げた。ええとか、何とかいつて踟蹰している私の姿を、雪江さんはジロジロ視ていたが、

「まあ、貴方は此地へ来てから、余程大きくなつたのねえ。今じゃ私とは屹度一尺から違つてよ。」

「まさか……」

「あら……屹度違うわ。一寸然うしてらつしやいよ……」

といいながら、衝と起つたから、何を為るのかと思つたら、ツカツカと私の前へ来て直

と向合つた。前髪が額に触れそうだ。紛と好い匂が鼻を衝く。

「ね、ほら、一尺は違うでしょう？」と愛度気ない白い面が何気なく下から瞻上げる。

私はわなわなと震い出した。目が見えなくなつた。胸の鼓動は脳へまで響く。息が逸んで、足が竦んで、もう凝として居られない。抱付くか、逃出すか、二つ一つだ。で、私は後の方針を執つて、物をも言わず卒然雪江さんの部屋を逃出して了つた……

四十

何故彼時私は雪江さんの部屋を逃出したのだというと、非常に怕ろしかったからだ。何が怕ろしかったのか分らないが、唯何がなしに非常に怕ろしかったのだ。

生死の間に一線を劃して、人は之を越えるのを畏れる。必ずしも死を忌むからではない。死は止むを得ぬと観念しても、唯此一線が怕ろしくて越えられぬのだ。私の逃出したのが矢張それだ。女を知らぬ前と知つた後との分界線を俗に皮切りという。私は性慾に駆られて此線の手前迄来て、これさえ越えれば望む所の性慾の満足を得られると思ひながら、此線が怕ろしくて越えられなかつたのだ。越えたくなくて越えなかつたのではなくて、越

えたくても越えられなかったのだ。其後幾年か経つて再び之を越えんとした時にも矢張りおそ張怕ろしかったが、其時は酒の力を藉りて、半狂気になって、漸く此怕ろしい線を踏越した。踏越してから酔が醒めると何とも言えぬ厭な心持になったから、又酒の力を藉りて強いて纔に其不愉快を忘れていた。此様な厭な想いをして迄も性慾を満足させたかったのだ。是は相手が正当でなかったから、即ち売女であつたからかというに、そうでない。相手は正当の新婦と相知る場合にも、人は大抵皆然うだと云う。殊に婦人が然うだという。何故だろう？

之と縁のある事で今一つ分らぬ事がある。人は皆隠れてエデンの果を食つて、人前では是を語ることさえ恥る。私の様に斯うして之を筆にして憚らぬのは余程力むから出来るのだ。何故だろう？ 人に言われんような事なら、為んが好いじゃないか？ 敢てするなら誰の前も憚らず言うが好いじゃないか？ 敢てしながら恥るとは矛盾でないか？ 矛盾だけれど、矛盾と思う者も無いではないか？ 如何いう訳だ？

之を靈肉の衝突というか？ しかれば、靈肉一致したら、如何なる？ 男女相知るのを怕ろしいとも恥かしいとも思わなくなるのか？ 畜生と同じ心持になるのか？

トルストイは北方の哲人だと云う。此哲人は如何な事を言っている。クロイツェル、ソ

ナタの跋に、理想の完全に実行し得べきは真の理想でない。完全に実行し得られねばこそ理想だ。不犯ふぼんは基督教キリストきようの理想である。故に完全に実行の出来ぬは止むを得ぬ、唯基キリス督教トきよう徒は之を理想として終生追求すべきである、と言って、世間の夫婦には成るべく兄妹けいまいの如く暮らせと勧めている。

何の事だ？ 些ちとも分らん。完全を求めて得られんなら、悶死すべきでないか？ 不犯ふぼんが理想で、女房を貰つて、子を生ませていたら、普通の墮落に輪を掛た墮落だ。加之しかも一旦貰つた女房は去るなど言うでないか？ 女房を持つのが墮落なら、何故一念発起して赤の他人になつたちまえといわぬ。一生離れるなどは如何どういう理由わけだ？ 分らんじゃないか？ 今食う米が無くて、ひもじい腹を抱かかえて考え込む私達だ。そんな伊勢屋いせやの隠居が心学に凝り固まつたような、そんな暢気のんきな事を言つて生きちやいられん！

四十一

其後間もなく雪江さんのお婿さんが極きまった。お婿さんが極きまると、私は何だか雪江さんに欺あざむかれたような心持がして、口惜くやしくて耐たまらなかつたから、国では大不承知であつたけれ

ど、口実を設けて体よく小狐おぎつねの家を出て下宿して了った。

馬鹿な事には下宿してから、雪江さんが万一鬱ひよつふさいでいぬかと思つて、態々わざわざ様子を見に行つた事が二三度ある。が、雪江さんはいつとも一向鬱ふさいで居なかつた。反ッてお媚さんが極きまつて怡々いそいそしているようだった。それで私も愈忌いよいよ々々しくなつて、もう余り小狐おぎつねへも足踏しづみせぬ中に、伯父さんが去る地方の郡長に転じて、家族を引纏めて赴任して了つたので、私も終ついに雪江さんの事を忘れて了つた。これでお終局しまいだ。

余り平凡だ下らない。こんなのは単純な性慾の発動というもので、恋ではない、恋はも少ちと高尚な精神的の物だと、高尚な精神的の人は言うかも知れん。然うかも知れん。唯私のような平凡な者の恋はいつも斯うだ。先ず無意識或は有意識ゆういしきに性慾が動いて満足を求めるから、理性や趣味性が動いて其相手を定めて、始めて其処に恋が成立する。初から性慾の動かぬ場合に恋はない。異性でも親兄弟に恋をせぬのは其為だ。青年の時分には、性慾が猛烈に動くから、往々理性や趣味性の手を待たんで、自分と盲動して撞着ぶつつた者を直すぐ相手にする。私の雪江さんに於けるが、即ち殆ど其だ。私共の恋の本体はいつも性慾だ。性慾は高尚な物ではない、が、下劣な物とも思えん。中性だ、インヂフェレントの物だ。私共の恋の下劣に見えるのは、下劣な人格が反映するので、本体の性慾が下劣であるので

はない。

で、私の性慾は雪江さんに恋せぬ前から動いていた。から、些^ちとも不思議でも何でもないが、雪江さんという相手を失った後^{のち}も、私の恋は依然として胸に残っていた。唯相手のない恋で、相手を失って彷徨^{うろうろ}している恋で、其本体は矢張り満足^{やっば}を求めて得ぬ性慾だ。露骨に言つて了えば、誠に愛想^{あいそ}の尽きた話だが、此猛烈な性慾の満足を求むるのは、其時分の私の生存の目的の——全部とはいわぬが、過半であつた。

これは私ばかりでない、私の友人は大抵皆然うであつたから、皆此頃からポツポツ^{いわゆ}所謂^{いう}「遊び」を始めた。私も若し学資に余裕が有つたら、矢張り^{やっばり}「遊」んだかも知れん。唯学資に余裕がなかつたのと、神経質で思切つた乱暴が出来なかつたのとで、遊びたくも遊び得なかつた。

友人達は盛^{さかん}に「遊」ぶ、乱暴に無分別に「遊」ぶ。其を覩^{うらや}ていると、羨ましい。が、弱い性質の癖に極めて負けしみだつたから、私は一向羨ましそうな顔もしなかつた。年長の友人が誘つても私が応ぜぬので、調戯^{からかい}に、私は一人で墮落して居るのだらうというような事を言つた。恥かしい次第だが、推測通りであつたので、私は赫^{かつ}となった。血相^{けっそう}を変えて、激論を始めて、果は殴^{なぐり}合^{あい}までして、遂に其友人とは絶交して了つた。

斯うして友人と喧嘩迄して見れば、意地としても最う「遊」ばれない。で、不意ながら謹直家きんちよくかになって、而して何ともえたいの知れぬ、謂いわれのない煩悶とらに囚とらわれていた。

四十二

ああ、今日は又頭がふらふらする。此こ様な日にや碌な物は書けまいが、一日抜くも残念だ。向鉢むこうはちまき巻でやツつける！

で、私は性慾の満足を求めても得られなかったので、煩悶していた。何となく世の中が悲観されてならん。友人等は「遊」ぶ時には大に「遊」んで、勉強する時には大に勉強して、何の苦もなく、面白そうに、元氣よく日を送っている。それを観ていると、私は癪しゃくに觸ふつて耐たまらない。私の煩悶して苦むのは何となく友人等の所為せいのように思われる。で、責めてもの腹慰はらいせに、薄志の弱行のと口を極めて友人等の公然の墮落を罵ののつて、而して私は独り超然として、内々ないないで墮落していた。若し友人等の墮落が陽性なら、私の墮落は陰性だった。友人等の墮落が露骨で、率直で、男らしいなら、私の墮落は……ああ、何と言おう？ 人間の言葉で言いようがない。私は畜生ちくしょうだった……

が、こつそり一人で墮落するのは余り没趣味で、どうも夫では趣味性が満足せぬ。どうも矢張異性の相手が欲しい。が、其相手は一寸得られぬので、止むを得ず当分文学で其不足を補つていた。文学ならば人聴も好い。これなら左程錢も入らぬ。私は文学を女の代りにして、文学を以つて墮落を潤色していたのだ。

私の謂う文学は無論美文学の事だ、殊に小説だ。小説は一体如何いうものだから、知らん、唯私の眼に映ずる小説は人間の墮落を潤色するものだ。通人の話に、道楽の初は唯色を漁する、膏盲に入ると、段々贅沢になつて、唯色を漁するのでは面白くなる、惚れたとか腫れたとか、情合で異性と絡んで、唯の漁色に趣を添えたいとなると云う。其処だ、其処が即ち文学の需要の起る所以だ。少くも私は然うであつた。で、此目的で、最初は小狐に居た頃喰付いた人情本を引続き耽読してみたが、数を累ねると、段々贅沢になつて、もう人情本も鼻に附く。同じ性慾の発展の描写でも、もう少し趣味のある描写を味わつてみたい。そこで、種々と小説本を涉猟して、終に当代の大家の作に及んで見ると、流石は明治の小説家だ、性慾の発展の描写が巧に人生觀などで潤色されてあつて、趣味がある、面白い。斯ういう順序で私の想像で墮落する病は益膏盲に入つて、終には西洋へ迄手を出して、ヂッケンスだ、サツカレーだ、ゾラだ、ユゴーだ、ツルゲー

ネフだ、トルストイだ、という人達の手を藉^かりて、人並にしていれば、中性のインヂフレントの性慾を無理に不自然な病的の物にして、クラフトエービングやフォレールの著書中に散見するような色情狂に想像で成済^{なりす}まして、而^{そう}して独り高尚がつていた。

いや、独り高尚がつていたのでない。それには同氣相求めて友が幾^{いくたり}人も出来た。同県人で予備門から後文科^{のち}へ入^いった男が有^あったが、私は殊に其感化を受けた。ああ、皆自分が悪かつたので、人を怨^{うら}んでは済まないが、私は今でも此男に逢^あうと、何とも言えぬ厭^{いと}な心持になる。儘になるなら刺違^{さしちが}えて死で^し了^りいたく思う事もある。

四十三

私が感化を受けた友というのは私より一つ二つ年上であつた。文学が専門だから、文学書は私より余計読^よんでいたという丈で、何でもない事だが、それを私は大層偉いように思っていた。まだファウストを読まぬ時、ファウストの話を聴^{きか}される。なに、友は愚にも附^つん事を言っているのだが、其愚にも附^つかん事を、人生だ、智慾だ、煩悶だ、肉だ、墮落だ、解脱^{げだつ}だ、というような意味の有^あり気な言葉で勿^な体を附^つて話されると、何だか難^{ありがた}有^うくなつ

て来て、之を語る友は偉いと思つた。こんな馬鹿氣た話はない。友は唯私より少し早くフアウストという古本ふるほんを読よんだ丈の事だ。読んで分つた所で、フアウストが何程どれほどの物だ？技巧の妙を除いたら、果してどれ程の価値がある？況や友はあやふやな語学いわんの力で分らん処を飛ばし飛ばし読んだのだ。読んで幼稚な頭で面白いと感じた丈だ、それも聞き怯おじして、従頭てんから面白いに極きめて掛つて、半分は雷同で面白いと感じた丈だ。読んで十分に味わい得た所で、どうせ人間の作つた物だ、左程の物でもあるまいに、それを此こん様な読方をして、難有ありがたがつて、偶之たまを読まぬ者を何程劣等どれほどの人間かのように見下みくだし、得意になつて語る友も友なら、其を聴いて敬服する私も私だ。心ある人から観たら、嘸さぞ苦々しく思われたろう。

此友から私は文学の難有ありがたい訳を種々いろいろと説き聴かされた。今ではもう大抵忘れて了つたけれど、何でも文学は真理に新しい形を賦ふして其生命を直接に具体的に再現するものだ、とか聴かされて、感服した。自然の真相は普通人に分らぬ、詩人が其主観を透とおして描いて示すに及んで、始めて普通人にも臍氣おぼろげに分つて人間の宝となる、とか聴かされて、又感服した。恋には人間の真髓が動く、とか聴かされて、又感服した。其他その他まだ種々いろいろ聴かされて一々感服したが、此こん様な事は皆愚言たわごとだ、世迷言よまいごとだ。空想に生命を託して人生を傍

観するばかりで、古本と首引くびびきして瞑想するばかりで、人生に生命を託して人生と共に浮ふちん沈しん上下じやうかせんでも、人生の活機に触れんでも、活眼を以て活勢を機微あいだの間に察し得んでも、如何どうかして人生が分るものとしても、友のいうような其様そんな文学は、何処かで誰かが空想した文学で、文学の實際でない。文学の實際は人間の墮落じゆんしよくを潤色じゆんしよくして、懦弱だじやくな人間を更に懦弱だじやくにするばかりだ。私の観方みかたは偏へいしているというか？ 唯弊へいを見て利を見ぬというか？ しかし利よりも弊へいの勝つたのが即ち文学の實際ではないか？ 私の観方みかたより文学の實際が既に弊へいに偏へいしているではないか？

ああ、しかし、文学を責めるより、友を責めるより、自ら責めた方が当あたっていよう。私のような斗筭やんざんな者は、例えば聖賢の遺書を読んでも、矢張やっぱり害を受けるかも知れん。私は自然だ人生だと口には言っていたけれど、唯書物で其様そんな言葉を覚えただけで、意味が能く分よっているのではなかった。意味も分らぬ言葉を弄もてあそんで、いや、言葉に弄もてあそばれて、可惜あたら浮世を夢にして渡った。詩人と名が付きや、皆普通の人より勝まさつてるように思っていた。小説、殊に輸入小説には人生の真相が活字の面おもてに浮ういているように思っていた。西洋の詩人は皆東洋の詩人に勝るように思っていた。作の新旧を論じて其価値を定めていた。自分は此様こんな下らん真似をしていながら、他の額たに汗あせして着実の浮世を渡る人達たまたまが偶文壇の事情

に通ぜぬと、直ぐ俗物ののしと罵り、俗衆ののしと罵つて、独り自ら高しみずかとしていた。独り自ら高しとする一方で、想像で姦淫はてして、一人で墮落おろしていた。

ああ、恥かしくて顔が熱ほてる。何たる苦々しい事であつた。私は当時の事を想い出すいだ度に、人通りの多い十字街よつじに土下座して、通る人毎に、踏んで、蹴て、唾を吐懸たいけて貰い度たいような心持になる……

四十四

文学の毒に中あてられた者は必ず終ついに自分も指を文学に染めねば止まぬ。私達が即ち然うであつた。先ず友が何か下らぬ物を書いて私に誇ひけら示した。すると私も直ぐ卑さしい負ぬ氣を出して短篇を書いた。どうせ碌な物ではない。筋はもう忘れて了つたが、何でも自分を主人公にして、雪江さんが相手の女主人じょしゅじんこう公で、紛ごたごた紆こした拳句に幾度いくたびとなく姦淫するのを、あやふやな理想や人生觀で紛まぎらかして、高尚めかしてすじり振もじつた物であつたように記憶する。自惚うぬぼれは天性だから、書上げると、先ず自分と自分に満足して、これなら当代の老大家の作に比しても左さして遜そん色しよくは有るまい、友に示みせたら必ず驚くと思つて、

示せたら、友は驚かなかつた。好い処もあるが、もう一息だと言う様なことをいう。私は非常に不平だつた。が、局量の狭い者に限つて、人の美を成すを喜ばぬ。人を褒めれば自分の器量が下るとでも思うのか、人の為た事には必ず非難を附けたがる、非難を附けてその非難を附けたのに必ず感服させたがる。友には其癖があつたから、私は友の評を一概に其癖の言わせる事にして、実に卑劣な奴だと思つた。

何とかして友に鼻を明させて遣りたい。それには此短篇を何処かの雑誌へ載せるに限ると思つた。雑誌へ載せれば、私の名も世に出る、万一一したら金も獲られる、一挙兩得だ。というような、愚劣な者の常として、何事も自分に都合の好い様にばかり考えるから、其様な虫の好い事を思つて、友には内々で種々と奔走して見たが、如何しても文学の雑誌に手蔓がない。其中に或人が其は既に文壇で名を成した誰かに知己になつて、其人の手を経て持込むが好いと教えて呉れたので、成程と思つて、早速手蔓を求めて某大家の門を叩いた。

某大家は其頃評判の小説家であつたから、立派な邸宅を構えていようとも思わなかつたが、定めて瀟洒な家に住つて閑雅な生活をしているだろうと思つて、根岸の其宅を尋ねて見ると、案外見すばらしい家で、文壇で有名な大家のこれが住居とは如何しても思わ

れなかつた。家も見窄らしかつたが、主人も襟垢の附た、近く寄つたら悪臭い匂が紛
としそうな、銘仙か何かの衣服で、銀縁眼鏡で、汚い髯の処斑に生えた、土気色
をした、一寸見れば病人のような、陰気な、くすんだ人で、ねちねちとした弁で、面を
看合せると急いで俯向いて了う癖がある。通されたのは二階の六畳の書斎であつたが、庭
を瞰下すと、庭には樹から樹へ紐を渡して襦袢が幕のように列べて乾してあつて、下座
敷で赤児のピーピー泣く声が手に取るように聞える。

私は甚く輕蔑の念を起した。殊に庭の襦袢が主人の人格を七分方下げるように思つたが、
求むる所があつて来たのだから、質樸な風をして、誰も言うような世辞を交ぜて、此人の
近作を読んで非常に敬服して教えを乞ひに来たようにいうと、先生疊を凝と視詰めて、あ
れは咄嗟の作で、書懸ると親類に不幸が有つたものだから、とかいうような申訳めいた
事を言つて、言外に、落着いて書いたら、という余意を含める。私は腹の中で下らん奴だ
と思つたが、感服した顔をして媚びたような事を言うと、先生万更厭な心持もせぬと見
えて、稍調子付いて来て、夫から種々文学上の事に就いて話して呉れた。流石は大家と
謂われる人程あつて、驚くべき博覧で、而も一家の見識を十分に具えていて、ムツツリし
た人と思ひの外、話が面白い。後進の私達は何の点に於ても敬服しなければならん筈であ

るが、それでも私は尚お輕蔑の念を去る事が出来なかった。で、終局に只ほんの見て貰えば好いように言つて、雑誌へ周旋を頼む事は噫にも出さないうで、持つて行つた短篇を置いて、下宿へ歸つて来てから、又下らん奴だと思つた。

四十五

某大家は兎に角大家だ。私は青二才だ。何故私は此人を輕蔑したのか？ 襟垢の附いた着物を着ていたとて、庭に襦袢が乾いてあつたとて、平生名利の外に超然たるを高しとする私の眼中に、貧富の差は無い筈である。が、私は實際先生の貧乏臭いのを見て、輕蔑の念を起したのだ。矛盾だ。矛盾ではあるが、矛盾が私の一生だ。

医者の不養生という。平生思想を性命として、思想に役せられている人に限つて、思想が薄弱で正可の時の用に立たない。私の思想が矢張り其だった。

けれど、思想々と大層らしく言うけれど、私の思想が一体何んだ？ 大抵は平生親しむ書卷の中から拾つて来た、謂わば古手の思想だ。此蒼褪めた生氣のない古手の思想が、意識の表面で凝つて髣髴として別天地を拓いている処を見ると、理想だ、人生觀だとい

うような種々の觀念が美しい空想の色彩を帯びて其^{そのうち}中に浮游して、腹が減^すいた、錢が欲しいという現実界に比べれば、^{はるか}に美しいように見える。浮気な不真面目な私は直ぐ好い処を看附けたという氣になつて、此別天地へ入り込んで、其処から現実界を眺めて罵しつていたのだ。我存在の中心を古手の思想に託して、夫^{それ}で自ら高^みしとしていたのだ。が、私の別天地は譬^{たと}えば塗^{ぬり}盆^{ぼん}へ吹懸^{ふきか}けた息氣^{いき}のような物だ。現実界に触れて実感を得^えると、他愛もなく剥^はげて了^はう、剥^はげて木地^{きじ}が露^{あら}われる。古手の思想は木地を飾つても、木地を蝕する力に乏しい。木地に食入つて吾を磨くのは実感なのに、私は第一現実を輕蔑していたから、その実感を得^える場合が少く、偶^{たま}得た実感も其取扱を誤つていたから、木地の吾を磨く足^{たし}にならなかつた。従^なつて何程^{ほど}古手の思想を積んで見ても、木地の吾は矢張^{やっぱ}故^{もと}のふやけた、秩序^{だらし}のない、陋^{ろう}劣^{れつ}な吾であつた。

こうして別天地と木地の吾とは別々であつたから、別天地に遊んでいる時と、吾^{うち}に戻つた時とは、勢い矛盾する。言行は始終一致しない。某大家に対しても、未だ会わぬ中^{うち}は多少の敬意を有^もつていたけれど、一たび其人の土氣色した顔が見え、襟^{えり}垢^{あか}が見え、襠^{むつき}襦^{じゆ}が見えて想像中の人が現実の人となると、木地の吾が、貧乏だから下らんと、別天地では流^{なが}行せぬ論法で論斷して之を輕蔑して了つたのだ。

唯當時私はまだ若かったから、陋劣な吾にしても、私の吾には尚お多少の活気が有つて、多少の活機を捉え得た。文壇の大家になると、古手の思想が凝固まって、其人の吾は之に压倒せられ、纔に残喘を保っているようなのが幾らもある。斯ういう人が、現実に触れると、気の毒な程他愛の無い人になる。某大家が即ち其であつた。だから、人生を論じ、自然を説いて、微を拆き、幽を闡く頭はあつても、目前で青二才の私が輕蔑しているのが、先生には終に見えなかつたのだ。

四十六

二三日して行つて見ると、先生も友と同じ様に、好い処も有るが、もう一息だというよ
うな事を言う。嘘だ。好い処も何も有るのじやない。不出来だと直言が出来なくて斯う言
つたのだ。先生も目が見えん人だが、私も矢張自分の事だと目が見えんから、其を真に受
けて、書直して持つて行くと、先生が気の毒そうに趣向をも少し変えて見ろと云う。言う
通りに趣向をも少し変えて持つて行くと、もう先生も仕方がない、不承々に、是で好い
と云う。なに、是で好い事は些も無いのだが、先生は氣が弱くて、もう然う然うは突戾し

兼たのだ。先生に曰わせると、之を後進に対する同情だという。何の同情の事が有るものか！ 少しでも同情が有るなら、頭から叱付けて、文学などに断念させるが好いのだ。是が同情なら、同情は「え切らん」の別名だ。どうせ思想に囚われて活機かぎりの分らぬ人の為する事だから、お飾かざりの思想を一枚剥めくれば、下からいつも此様な愛想あいその尽きた物が出来来るに不思議はないが、此方こつちも此方こつちだ、其様な事は少しも見えない。本当に是で好い事だと思つて、其言葉の尾に縋すがつて、何処かの雑誌へ周旋をと頼んだ。こんなのを盲目めくらの紛れ当りと言うのだろう。機を制せられて、先生も仕方がなさそうに是も受込む。私達の応対は活きた人には側そばで聴いていられたものであるまい。

一月程して私の処女作は或雑誌へ出た。初恋が霜しもけて物にならなかつた事を書いたのだからとて、題は初霜だ。雪江さんの記念に雪江せつこうと署名した。先生が筆を加えて私の文は行方不明になつた処も大分あつたが、兎も角も自分の作が活字になつたのが嬉しくて嬉しくて耐たまらない。雑誌社から送つて来るのを待ちかねて、近所の雑誌店へ駆付けて、買つて来て、何遍か繰返して読んでも読んでも読飽よみあかなかつた。真面目な人なら、此処らで自分の愚劣を悟る所だろうが、私は反て自惚うぬぼれて、此分で行けば行々ゆくゆくは日本の文壇を震駭しんがいさせる事も出来ようかと思つた。

聊^{いささ}かながら稿料も貰えたから、二三の友を招いて、近所の牛肉店で祝宴を開いて、其晩遂に「遊び」に行つた。其時案外不愉快であつたのは曾て記した通り。皆嬉しさの余りに前後を忘却したので。

これが私の小説を書く病^{やみつ}付きで又「遊び」の皮切であつたが、それも是も縁の無い事ではない。私の身では思想の皮一枚剥^{めく}れば、下は文心即淫心だ。だから、些^{ちつ}とも不思議はないが、同時に両方に夢中になつてゐる中に、学校を除籍された。なに、月謝^{とせこ}の滞りが原因だつたから、復籍するに造作^{ぞうさ}はなかつたが、私は考えた、「寧^{いっ}その事小説家になつて了おう。法律を学んで望み通り政治家になれたつて、仕方がない。政治家になつて可^{あた}惜一生を物質的文明に献^いげて了うより、小説家になつて精神的文明に貢献した方が高尚だ。其方が好い……」どうも仕方がない。活眼を開いて人生の活相を觀得^そなかつた私が、例の古手の旧式の思想に捕われて、斯う思つたのは仕方がないが、夫^{それ}にしても、同じ思想に捕われるにしても、もう少し捕えられ方が有りそうなものだった。物^{ぶつ}心一如^{にょ}と其様^{そん}な印度臭^{いんどくさ}い思想に捕われろではないが、所謂^{いわゆる}物質的文明は今世紀の人を支配する精神の発動だと、何故思れなかつたろう？ 物質界と表裏して詩人や哲学者が顧^{かえり}みぬ精神界が別にあると、何故思れなかつたろう？ 人間の意識の表面に浮^{うかん}だ別天地の精神界と違つて、此精神界は着実で、

有力で、吾々の生存に大關係があつて、政治家は即ち此精神界を相手に仕事をするものだと、何故思われなかつたろう？ 此道理をも考えて、其上で去就を決したのなら、真面目な決心とも謂えようが……ああ、しかし、何の道思想に捕われては仕方がない。私は思想で、自ら欺いて、其様な浅墓な事を思っていたが、思想に上らぬ實際の私は全く別の事を思っていた。如何な事を思っていたかは、私の言う事では分らない、是から追々為る事で分る。

四十七

私は其時始めて文士になろうと決心した、トサ後には人にも話していたけれど、事実でない。私は生来未だ曾て決心をした事の無い男だ。いつも形勢が既に定つて動かすべからずなつて、其形勢に制せられて始めて決心するのだから、学校を除籍せられたばかりでは、未だ決心が出来なかつた。唯下宿に臥転んでグズリグズリとして文士に為りそうになつていたのだ。

始めて決心したのは、如何してか不始末が国へ知れて父から驚いた手紙の来た時であつ

た。行懸りで愚図々々はしていらなくなつたから、始めて斯うと決心して事実を言つて同意を求めてやると、父からは怒つた手紙が来る、母からは泣いた手紙が来る。親達が失望して情ながる面は手紙の上に浮いて見えるけれど、こうなると妙に剛情になつて、因襲の陋見に囚われてゐる年寄の白髪頭を冷笑していた。親戚の某が用事が有つて上京した序に、私を連れて帰ろうとしたが、私は頑として動かなかつた。そこで学資の仕送り絶えた。

こうなるは最初から知れていながら、私は弱つた。仕方がないから、例の某大家に縋つて書生に置いて貰おうとすると、先生は相変らずグズリグズリと煮切らなかつたが、奥さんが飽迄不承知で、先生を差措いて、御自分の口から断然断られた。私は案外だつた。頼めば二つ返事で引受けて呉れるとばかり思つていたから、親戚の者が連れて行こうとした時にも、言わでももの広言迄吐いて拒んだのだが、こう断られて見ると、何だか先生夫婦に欺かれたような気がして、腹が立つて耐らなかつた。世間の人は皆私の為に生きてゐるような氣でいたからだ。

もう斯うなつては、仕方がない、書けても書けんでも、筆で命を繋ぐより外仕方がない。食うと食わぬの境になると、私でも必死になる。必死になつて書いて書いて書捲つて、

その度に、悪感情は抱^{いだ}いていたけれど、仕方がないから、某大家の所へ持つて行つて、筆を加えて貰つた上に、売つて迄貰つていた。其が為には都合上門人とも称していた。然うして一二年苦しんでいる中に、^{うち}どうやら曲りなりにも一本立が出来るようになると、急に此前奥さんに断られた時の無念を想^{おも}出して、夫からは根岸のお宅へも無沙汰^{ぶさた}になった。もう先生に余り用はない。先生は或は感情を害したかも知れないが、先生が感情を害したからつて、世間が一緒になつて感情を害しはすまいし……と思つたのではない、決して左様な軽薄な事は思わなかつたが、私の行為を後^{あと}から見ると、詰り然う思つたと同然になつてゐる。

先生には用が無くなつたが、文壇には用が有るから、私は広く交際した。大抵の雑誌には一人や二人の知己が出来た。こうして交際を広くして置くと、私の作が出た時に、其知己が余り酷^{むご}くは評して呉れぬ。無論感服などする者は一人もない。私などに感服しては見識に関わる。何かしら瑕疵^{きず}を見付けて、其で自分の見識を示した上で、しかし、まあ、可^{ほめ}なりの作だと云う。褒^{ほめ}める時には屹度^{きつと}然う云う。私は局量が狭いから、批評家等が誰^{たれ}も許し^{じようざ}もせぬのに、作家よりも一段上座に坐り込んで、其処から曖^{あやふや}昧な鑑識で軽率に人の苦心の作を評して、此方の鑑定に間違ひはない、其通り思うて居れ、と言わぬばかりの高慢

の面付つらつきが癪しゃくに触さわつて耐たまらなかつたが、其を彼かれ此これ言いうと、局量りくりやうが狭せいと言いわれる。成程其は事実だけれど、そう言われるのが厭いとだから、始終黙もくつて憤おこつていた。其癖くせ批評家の言う所で流行おもしろの趨おもむく所を察さして、勉こめて其に後れぬようと心掛こころかけていた……いや、心掛けていたのではない、其様そのな不見識ふけんしきな事は私の尤ひんせきも擯斥ひんせきする所だつたが、後あとから私の行為けいゐを見ると矢張やっぱり然しかう心掛こころかけたと同然どうぜんになつてゐる。

四十八

久しばらく文壇ぶんだんを彷徨うろうろしている中に、当り作うちが漸しく一つ出来た。批評家等は筆を揃そろえて皆近年の佳作だと云う。私は書いた時には左程にも思おもわなかつたが、然しかう言いわれて見ると、成程佳作だ。或は佳作以上で、傑作けつさくかも知れん。私は不断紛々たる世間の批評以外に超然しやうぜんとしてゐる面かお色しきをしていて、実は非難けなされると、非常に腹が立つて、少しでも褒ほめられると、非常に嬉うれしかつたのだ。

当り作しよしが出てからは、黙もくつていても、雑誌社から頼たのみに来る、書肆しよしから頼たのみに来る。私は引張ひっぱりだ風ふうだ……トサ感じたので、なに、二三軒からの申込しんじが一いち時じ一いつ寸すん累りなつたのに過

ぎなかつた。

嬉しかつたので、調子に乗つて又書くと、又評判が好い。斯うなると、世間の注目は私一身に叢まつているような気がして、何だか嬉しくて嬉しくて耐らないが、一方に於ては此評判を墜しては大変という心配も起つて来た。で、平生は眼中に置かぬらしく言つていた批判家等に褒められた一杯で、愈文学に熱中して、明けても暮れても文学の事ばかり言い暮らし、眼中唯文学あるのみで、文学の外には何物もなかつた。人生あつての文学ではなくて、文学あつての人生のような心持で、文学界以外の人生には殆ど何の注意も払わなかつた。如何なる国家の大事が有つても、左程胸に響かなかつた代り、文壇で鼠がゴトリというと、大地震の如く其を感じて騒ぎ立てた。之を又真摯の態度だとかいつて感服する同臭味の人が広い世間には無いでもなかつたので、私は老人がお宗旨に凝るように、愈文学に凝固まつて、政治が何だ、其日送りの遺繰仕事じやないか？ 文学は人間の永久の仕事だ。吾々は其高尚な永久の仕事に従う天の選民だと、其日を離れて永久が別に有りでもするような事を言つて、傲然として一世を睥睨していた。

文学上では私は写実主義を執つていた。それも研究の結果写実主義を是として写実主義を執たのではなくて、私の性格では勢い写実主義に傾かざるを得なかつたのだ。

写実主義については一寸今の自然主義に近い見解を持って、此様な事を言つていた。

写実主義は現実を如実に描写するものではない。如実に描写すれば写真になつて了う。

現実の（真とは言わなかつた）真味を如実に描写するものである。詳しく言えば、作家のサブジェクチウィチー即ち主観に摂取し得た現実の真味を如実に再現するものである。

人生に目的ありや、帰趨ありや？ 其様な事は人間に分るものでない。智の力で人生の

意義を掴まんとする者は狂せずんば、自殺するに終る。唯人生の味なら、人間に味える。

味つても味つても味い尽せぬ。又味わえば味わう程味が出る。旨い。苦中にも至味はある。

其至味を味わい得ぬ時、人は自殺する。人生の味いは無限だけれど、之を味わう人の能力には限りがある。

唯人は皆同じ様に人生の味を味わうとは言えぬ。能く料理を味わう者を料理通という。

能く人生を味わう者を芸術家という。料理通は料理人でない如く、能く人生を味わう芸術家は能く人生を料理せんでも差支えはない。

道徳は人生を料理するに必要だらうけれど、人生の真味を味わう助にはならぬ。芸術と道徳とは竟に没交渉である。

是が私の見解であつた。浅薄はさて置いて、此様な事を言つて、始終言葉に転ぜられて

いたから、私は却て普通人よりも人生を觀得なかつたのである。

四十九

私の文学上の意見も大業だが、文学については先^まあ其^そ様な他愛のない事を思つて、浮^{つも}れる積^{つも}もなく浮れていた。で、私の意見のようになると、味^{あじ}わるものは人生で、味^{あじ}わうものは作家の主觀であるから、作家の主觀の精粗に由て人生を味^{あじ}わう程度に深淺の別が生ずる。是^{こゝ}に於て作家は如何^{どう}しても其主觀を修養しなければならん事になる。

私は行^{ゆく}々^{ゆく}は大文豪になりたいが一生の願^{ねが}いだから、大^{おお}に人生に触れて主觀の修養をしなければならん。が、漠然人生に触れるの主觀を修養するのと言^うつてゐる中は、意味が能^よく分つてゐるようでも、愈^い々^い実行する段になると、一寸^{ちよつと}まごつく。何^どうかから何^どうか手^てを着けて好^いい分らない。政治や実業は人生の一現象でも有ろうけれど、其^そ様な物に大^あした味^{あじ}はない筈である。といつて教育でもないし、文壇は始終触れてゐるし、まあ、社会現象が一番面白^うちだ。面白いといふのは其処に人生の味^こまや^まが濃^こかに味^{あじ}わられる謂^いである。社会現象の中^{うち}でも就^なか^んず^く中^{ちゆう}男女の關係が最も面白^うちそうだが、其面白^うち味^{あじ}を十分に味^{あじ}わおうとするには、自分

で実験しなければならん。それには一寸相手に困る。人の恋をするのを傍観するのは、宛も人が天麩羅を喰つてゐるのを観て其味を想像するようなものではあるけれど、実験の出来ぬ中は傍観して満足するより外仕方がない。が、新聞の記事では輪廓だけで内容が分らない。内容を知るには、恋する男女の間に割込んで、親しく其恋を観察するに限るが、恋する男女が其処らに落ちこちても居ない。すると、当分まず恋の可能を持つてゐる若い男女を観察して満足して居なければならん。が、若い男を観察したつて詰らない。若い男の心持なら、自分でも大抵分る。恋の可能を持つてゐる若い女の観察が当面の急務だ。と、こう考え詰めて見ると、私の人生研究は詰り若い女の研究に帰着する。

で、帰着点は分つたが、矢張実行が困難だ。若い女を研究するといつて、往來に衝突して通る女に一々触れもされん。勢い私の手の届く所から研究に着手する外はない。が、私の手の届く所だと、まず下宿屋のお神さんや下女になる。下宿屋のお神さんは大抵年を喰つてゐる。若いお神さんはうっかり触れると危険だ。剩す所は下女だが、下女ではどうも喰い足りない。忙がしそうにしている所を捉まえて、一つ二つ物を言うと、もう何番さんかでお手が鳴る。ヘーイと尻上りに大きな声で返事をして、跡をも閉めずにドタドタと座敷を駈出して行くのでは、余り没趣味だ。下女が没趣味だとすると、私の身分ではもう売

女いじよに触れて研究する外はないが、これも大店おおみせは金が掛り過るから、小店で満足しなければならん。が、小店だと、相手が越後の国蒲原郡何村かんばらごおりなにむらの産の鼻ひしやげか何かで、私等わしらが国さでと、未だ国訛くになまりが取れないのになる。往々にして下女にも劣る。尤も是は少し他たに用事も有ったから、其用事を兼ねて私は絶えず触れていたが、どうしても、どう考えて見ても、是では喰い足らん。どうも素人しろうとの面白い女に撞着ぶつつて見たい。今なら直ぐ女学生という所だが、其時分は其様そんな者に容易に接近されなかつたから、私は非常に煩悶ぼんしていた。

馬鹿なツ！ 其様そんな事を言つて、私は女房が欲しくなつたのだ。

五十

人生の研究というような高尚な事でも、私なぞの手に掛ると、詰り若い女に撞着ぶつりたいなぞという愚劣な事になつて了う。普通の人なら青年うちの中は愚を意識して随分愚な真似もしようけれど、私は其を意識しなかつた。矢張私共やつぱりでなければ出来ぬ高尚な事のように思つて、切しきりに若い女に撞着ぶつりたがっている中うちに、望む所の若い女が遂に向うから来て撞着ぶつつ

た。

それは小石川の伝通院脇の下宿に居る時であつた。此下宿は体裁は余り好くなかつたが、それでも所謂高等下宿で、学生は大学生が一人だつたか、二人だつたか、居たかと思う。余は皆小官吏や下級の会社員ばかりで、皆朝から弁当を持って出懸けて、午後は四時過でなければ歸つて来ぬ連中だから昼の中は家内が寂然とする程静かだつた。

私は此家で一番上等にしてある二階の八畳の部屋を占領していた。なに、一番上等といつても、元来下宿屋に建てた家だから、建前は粗末なもので、動もすると障子が乾反つて開閉に困難するような安普請ではあつたが、形の如く床の間もあつて、年中鉄舟先生やら誰やらの半折物が掛けてあつて、花活に花の絶えたことがない……という結構らしいが、其代り真夏にも寒菊が活てあつたりする。造花なのだ。これは他の部屋も大同小異だつたが、唯た一つ他の部屋にはなくて、此部屋ばかりにある、謂わば此部屋の特色を成す物があつた。それは姿見で、唐草模様の浮出した紫檀櫃の縁の、対うと四角な面も長方形になる、勸工場仕込の安物ではあつたけれど、兎も角も是が上等室の標象として恭しく床の間に据えてあつた。下にもまだ八畳が一間あつたが、其処には姿見がなかつた。同じような部屋でありながら、間代が其処より此処の方が三割方高かつ

たのは、半分は此姿見の為だったかとも思われる。

部屋は此通り余り好くはなかったが、取得は南向で、冬暖かで夏涼しかった。其に一番尽頭の部屋で階子段にも遠かつたから、他の客が通り掛りに横目で部屋の中を覗んで行く憂いはなかった。

も一つ好い事は——部屋の事ではないが、此家は下宿料の取立が寛大だった。亭主は居るか居ないか分らんような人で、お神さん一人で繰廻しているようだったが、快活で、腹の大きい人で、少し居馴染んだ者には、一月二月下宿料が滞つても、宜しゅうございませう、御都合の好い時で、といつてビリビリしない。収入の不定な私には是が何よりだったから、私は二年越此家に下宿して居た。

或日朝から出て昼過に帰ると、帳場に看慣れぬ女が居る。後向だったから、顔は分らなかったが、根下りの銀杏返しで、黒縮緬だか何だかの小さな紋の附いた羽織を着て、ベタリと坐つて居る後姿が何となく好かつたが、私がお神さんと物を言つて居る間、其女は振向いても見ないで、黙つて彼方向いて烟草を喫つていた。

部屋へ来る跡から下女が火を持って来たから、捉まえて聞くと、今朝殆ど私と入違いに尋ねて来たのだそうで、何でもお神さんの身寄だとかで、車で手荷物なども持つて来た

から、地方の人らしいと云う。唯其切で、下女の事だから要領を得ない。

「如何な女だい？」

「あら、今御覧なすつたじや有りませんか？」

「後向きで分らなかった。」

「別品ですよ」、といつて下女は莞爾々々している。

「丸顔かい？」

「いいえ、細面でね……」

「色は如何なだい？ 白いかい？」

下女は黙つて私の面を見ていたが、

「大層お氣が揉めますのね。何なら、もう一遍下へ行つて見ていらしつたら……」

誰にでも翻弄されると、途方に暮れる私だから、抛どころなく苦笑として黙つて了う

と、下女は高笑して出て行つて了つた。

廳やがで夕飯時ゆうめしどきになった。部屋々々へ膳を運ぶ忙がしそうな足音が廊下に轟いて、何番さんがお急ぎですよ、なぞと二階から金切声で聒かしましく喚わめく中を、バタバタと急いそぎ足あしに二人ばかり来る女の足音が私の部屋の前で止ると、

「此方こつちが一番さんで、夫それから二番さん三番さんと順になるンですから何卒どうぞ……」
というのは聞慣れた小女ちびの声で、然う言棄てて例の通り端手はしたなくバタバタと引返ひっかえして行く。

と、跡に残った一人が障子の外に蹲うずくまった気配けはいで、スルスルと障子が開あいたから、見ると、彼女あのおんなだ、彼女あのおんなに違いない。私は急いで余所を向いて了ったから、能くは、分らなかつたが、何でも下女の話の通り細面ほそおもてで、蒼白い、淋しい面相かおだちの、好い女だ……
と思つた。年頃は二十五六……それとも七か……いや、八か……女の歳は私には薩張分さつぱりらない。もう羽織はなしで、紬つむぎだか銘仙だか、夫とも更もつと好い物だか、其も薩張分さつぱりなかつたが、何なにしても半襟なまこの掛つた柔か物で、前垂まえだれを締めて居たようだった。障子を明けると、上目でチラと私の面かおを見て、一寸手ちよつとを突いて辞儀をしてから、障子の影の膳を取上て、臆した体もなくスルスルと内へ入って来て、「どうもお待ち申しまして」、といいながら、狼狽まごまごしている私の前へ据えた手先を見ると、華奢きゃしゃな蒼白い手で、薬指に燦きらと光っていた

のは本物のゴールド、リングと見た。正可鍍金じや有るまい、飯櫃も運び込んでから、

「お湯はございますか知ら。」

と火鉢の藥罐を一寸取つて見て、

「まだ御座いますようですね。じゃ、お後にしましょう。御緩くりと……」

と会釈して、スツと起つた所を見ると、スラリとした後姿だ。ああ、好い風だ、と思つている中に、もう部屋を出て了つて、一寸小腰を屈めて、跡を閉めて、バタバタと廊下に行く。

別段異つた事もない。小娘でないから、少しは物慣れた処もあつたろうが、其は当然だ。風に一寸垢脱のした処が有つたかも知れぬが、夫とても浮気男の眼を惹く位の価値で大した女ではなかつたのに、私は非常に感服して了つた。尤も私の不断接している女は、厭にお澄しだったり、厭に馴々しかつたりして、一見して如何にも安ッぽい女ばかりだったから、然ういうのを看慣れた眼には少しは異つて見えたには違いない。

何物だろうと考えて見たが、分らない。或は黒人上りかとも思つてみたが、下町育ちは山の手の人とは違ふ。此処のお神さんも下町育ちだと云う。そういえば、何処か様子に似た処もある。或は下町育ちかも知れぬとも思つた。

素性は分らないが、兎に角面白そうな女だから、此様なのを味わったら、女の真味が分るかも知れん。今に膳を下げに来たら、今度こそは勇気を振起して物を言つて見よう、私のように黙つて居ては、何時迄経つても接近は出来ん、なぞと思つていると、隣室で女の笑い声がする。下女の声ではない。今のに違いない。隣の俗物め、もう捉まえて戯言でも言つてると見える。

五十二

其晩膳を下げに来るかと心待に待つていたら、其には下女が来て、女は顔を見せなかつた。翌朝は女が膳を運んで来たが、卒となると何となく気怏れがして、今は忙しそうだから、昼の手隙の時にしよう、という氣になる。で、言うべき文句迄拵えて、搔くようにして昼を待つていると、昼が来て、成程手隙だから、他の者は遊んでいて小女が膳を運んで来る。

三四日経つた。いつも女の助けるのは朝晩の忙がしい時だけで、昼は顔も出さない。考えて見ると、奉公人でないから其筈だが、私は失望した。顔は度々合せるから漸く分つた

が、能く見ると、雀斑そばかすが有つて、生際はえぎわに少し難が有る。髪も更少し濃かつたらと思われたが、併し何となく締りのあるキリツとした面相かおだちで、私は矢張やっぱ好いと思つた。名はお糸といつてお神さんの姪めいだとか云う。皆下女からの復聞またききだ。

何とかして一日も早く接近したいが、如何どうも顔を合せると、物が言えなくなる。昼間廊下で行逢つた時など、女は小腰を屈かがめて会釈するような、せんような、曖昧な態度で摺脱すりぬけて行く。其様そのな時に接近したがつてゐる事は色にも出さずに、ヒヨイと、軽く、些ちと話に入らツしやい、とか何とか言つたら、最終しまいには来るようになるかも知れんとは思ふけれど、然う思ふばかりで、私の口は重たくて、ヒヨイと、軽く、其様そのな事が言えない。

度々面かおを合せても物を言わんから、段々何だか妙に隔てが出来て来て、改めて物を言うのが最う変になつて来る。此分よッぽだと、余程何か変つた事が、例えば、火事とか大地震とかがあつて、人心の常軌を逸する場合でないと、隔ての関を破つて接近されなくなりそうだが、ああ、初て部屋へ来た時、何故私は物を言わなかつたらうと、千悔せんかい万悔ばんかい、それこそ臍ほぞを嚙かむけれど、追付おつかない。然るに、私は接近が出来ないで此様このな煩悶はんもんしているのに、隣の俗物は苦もなく日増しに女に親しむ様子で、物を言交いいかわす五分間がいつか十分二十分になる。何だか知らんが、睦まじそうに密々ひそひそ話をしてゐるような事もある。一度なんぞ女

に脊中を叩かれて俗物が莞爾々々している所を見懸けた。私は気が気でない……

藻掻いていると、確か女が来てから一週間目だったかと思う、朝からのビショビショ降りが昼過ても未だ止まない事があつた。鬱陶敷く、気が滅入って、幾ら書いても思う様に書けないから、私はホツとして、頭を抱えて、仰向に倒れて茫然としていたが、

「早く如何かせんと不好！」

と判然と独言をいつて起反つた。独言は小説に関係した事ではないので、女の事なので。

すると、余り遠くでない、去迎近くでもない何処かで、ポツンポツンと意気な音がする。隣の家で能く琴を浚っているが、三味線を弾いてた事はない。それに隣にしては近過ぎる。家には弾く者は無い筈だが……と耳を澄していると、聴て歌い出す声は如何しても家だ。例のに違いない。

私は起上つてブラリと廊下へ出た。

廊下へ出て耳を澄して見たが、三味線は聞えても、矢張歌が能く聞えない。が、愈例の
に違いないから、私は意を決して裏梯子を降りて、大廻りをして、窃そり台所近くへ来
て見ると、誰も居ない。皆其隣の家の者の住居にしてある座敷に塊まつているらしい。好
い塩梅だと、私は椽側に佇立んで、庭を眺めている風で、歌に耳を傾けていた。

好い声だ。たツぷりと余裕のある声ではないが、透徹するように清い、何処かに冷たい
処のあるような、という水のようなだが、水のように淡くはない、シンミリとした何とも
言えぬ旨味のある声だ。力を入れると、凜と響く。脱くと、スウと細く、果は藕の糸のよ
うになって、此世を離れて暗い無限へ消えて行きそうになる時の儚さ便りなさは、聴いて
いる身も一緒に消えて行きそうで、早く何とかして貰いたいような、もうもう耐らぬ心持
になると、消えかけた声が又急に盛返して来て、遂にパツと明るみへ出たような氣丈夫な
声になる。好い声だ。節廻しも巧だが、声を転がす処に何とも言えぬ妙味がある。ズツと
張揚げた声を急に落して、一転二転三転と急転して、何かを潜つて来たように、パツと又
浮上るその面白さは……なぞと生意氣をいうけれど、一体新内をやつてゐるのだから、清
元をやつてゐるのだから、私は夢中だった。

俗曲は分らない。が、分らなくても、私は大好きだ。新内でも、清元でも、上手の

歌うのを聴いていると、何だか斯う国民の精粹とでもいうような物が、髻ほうふつとして意気な声や微妙な節廻しの上に顕あらわれて、吾心の底に潜む何かに触れて、何かが想い出されて、何とも言えぬ懐かしい心持になる。私は之を日本国民の二千年來此生を味うて得た所のものが、間接の思想の形式に由らず、直ただちに人の肉声に乗って、無形の儘で人心に來り逼るのだとか言つて、分명한事を不分明にして其処に深い意味を認めていたから、今お糸さんの歌うのを聴いても、何だか其様そんななように思われて、人生の粹すいな味や意気な味がお糸さんの声に乗って、私の耳から心に染しみこんで、生命の髓に触れて、全存在を撼ゆるがされるような気がする。

お糸さんの顔は椽側からは見えないけれど屹度きつと少しボツと上氣して、薄目を開あいて、恍惚として我か人かの境を迷いつつ、歌っているに違いない。所謂いわゆる神來の興しんらいが中うちに動いて、歌に現うつを脱ぬかしているのは歌う声に魂の入いっているので分る。恐らくもう側そばでお神さんや下女の聴いてることも忘れているだろう。お糸さんは最う人間のお糸さんでない。人間のお糸さんは何処へか行つて了つて、体に俗曲の精靈が宿っている、而そしてお糸さんの美音を透とおして直接に人間と交渉している。お糸さんは今俗曲の巫女いちこである、薩満シャマンである。平生のお糸さんは知らず、此瞬間のお糸さんはお糸さん以上である、いや、人間以上で神

に近い人である。

斯う思うと、時としては斯うして人間を離れて芸術の神境しゅつにゆうに出入し得るお糸さんは尋常ただの人間でないように思われる。お糸さんの人と為りは知らないが、歌に於て三味線に於てお糸さんは確に一個の芸術家である、事に寄ると、芸術家と自覺せぬ芸術家である。要するに、俗物でない。

私も不肖ながら芸術家の端はしくれと信ずる。お糸さんの人となりは知らないでも、芸術家の心は唯芸術家のみ能よく之を知る。此下宿に客多しと雖も、能よくお糸さんを知る者は私の外にあるまい。私の心を解し得る者も、お糸さんの外には無い筈である……と思うと、まだ碌に物を言た事もないお糸さんだけれど、何だかお糸さんが生れぬ前さきからの友のように思われて、私は……ああ、私は……

五十四

私の下宿ではいつも朝飯あさめしが済んで下宿人が皆出払った跡で、緩ゆっくり掃除や雑巾掛ぞうきんかけをする事になっていた。お糸さんは奉公人でないから雑巾掛ぞうきんかけには関係しなかったが、掃除

だけは手伝つていたので、いつも其時分になると、お掃除致しようと言つては私の部屋へ来る。私は内々^{ないない}其を心待^{こころまち}にしていゐて、来ると急いで部屋を出て椽側^{うろつ}を彷徨^{うろつ}く。彷徨^{うろつ}きながら、見ぬ振をして横目でチヨイチヨイ見ていると、お糸さんが赤い襷^{たすき}に白地の手拭^{あねさまかぶ}を姉様冠^{あねさまかぶ}りという甲斐々々しい出立^{いでたち}で、私の机や本箱へパタパタと払塵^{はたき}を掛けてゐる。其を此方^{こつち}から見て居ると、お糸さんが何だか斯う私の何かのような氣がして、嬉しくなつて、斯うした処も悪くないなと思ふ。

ところが、お糸さんが三味線^{さみせん}を弾^ひいた翌朝^{あくるあさ}の事であつた。万事が常よりも不手廻^{ふてまわ}りで、掃除にもいつも来るお糸さんが来ないで、小女^{ちび}が代りに来たから、私は不平に思つて、如何^{どう}したのだと詰^{なじ}るやうにいうと、今日はお竹どんが病氣で寝ているので、受持^{うけもち}なんぞの事を言つていられないのだと云う。其なら仕方が無いようなものだけれど、小女^{ちび}のは掃除するのじやなくて、埃^{ほこり}をほだてて行くのだから、私が叱^{ちが}り付けてやったら、小女^{ちび}は何だか沸^ふつ々^つ言つて出て行つた。

暫くして用を達^たしに行^いこうと思つて、ヒヨイと私が部屋を出ると、何時^{いつ}来たのか、お糸さんがツイ其処で、着物の裾^{すそ}をクルツと捲^{まく}つた下から、華美^{はで}な長襦袢^{じゆばん}だか腰巻^{こし巻き}だかを出し掛けて、倒^{さか}さになつて切々^{せつせつ}と雑巾^{ぞうきん}掛けをしていた。私の足音に振向いて、お邪魔様といつ

て、身を開いて通して呉れて、お糸さんは何とも思っていぬ様だったが、私は何だか気の毒らしくて、急いで二階を降りて了った。

用を達してから出て来て見ると、手水鉢ちようずばちに水が無い。小女ちびは居ないかと視廻みまわす向うへお糸さんが、もう雑巾掛ぞうきんがけも済んだのか、バケツを提げてやって来たが、ト見ると、直ぐ気が附いて、

「おや、そうだツけ……只今直ぐ持つて参りますよ。」

と駈出して行つて、台所から手桶を提げて来て、

「お待遠様。」

とザツと水を覆あける時、何処の部屋から仕掛けたベルだか、帳場で気短けたたましくチリリリリンと鳴る。

お糸さんが台所から面かおを出して、

「誰も居ないのかい？　十番さんで先刻さつきからお呼なさるじゃないか。」

「へい、只今……」

とお糸さんが矢張やっぱり下女並の返事をして、

「お三どん新参で大狼狽おおまじつき……」

と私の面を見て微笑しながら、一寸滑稽た手附をしたが、其儘所体崩して駈出して、表梯子をトントントンと上って行く。

私が手を洗って二階へ上って見たら、お糸さんは既う裾を卸したり、襷を外したりして、整然とした常の姿になつて、突当りの部屋の前で膝を突いて、何か用を聴いていた。

私は部屋へ歸つて来て感服して了つた。お糸さんは歌が旨い、三味線も旨い、女ながらも立派な一個の芸術家だ。その芸術家が今日は如何だろう？ お竹が病氣なら仕方がないようなものの、全で下女同様に追使われている。下女同様に追使われて、慣れぬ雑巾掛までさせられた上に、無理な小言を言われても、格別厭な面もせず、何とか言つたツけ？ 然う然う、お三どん新参で大狼狽といつて微笑……偉い！ 余程気の練れた者でなければ、如彼は行かぬ。これがお竹でも有ろうものなら、直ぐ見たくでもない面を膨らして、沸々口小言を言う所だ。それを常談事にして了つて、お三どん新参で大狼狽といつて微笑……偉い！

感服の余り、私は何とかして此自覺せぬ芸術家に敬意を表したいと思ったが、併し奉公人同様に金など包んでは出されない、何でも品物を呈するに限ると、何故だか独りで極めて掛つて、慘澹たる苦心の末、雪江一代の智慧を絞り尽して、其翌日の昼過ぎ本郷の友人を尋ねて、嘘八百を陳べ立て、其細君を誘かして半襟を二掛見立てて買つて来て貰つた。値段の処も私にしては一寸奮んだ積だった。

早く之をお糸さんに呈して其喜ぶ顔を見たいと、此処らは未来の大文豪も俗物と余り違わぬ心持になつて、何だか切りに嬉しがつて、莞爾して下宿へ歸つたのは丁度夕飯時分だった。火を持つて来たのは小女、膳を運んで来たのはお竹どんで、お糸さんは笑声が余所の部屋でするけれど、顔も見せない、私は何となく本意なかった。

待侘びて独りで焦れていると、臆て目差すお糸さんが膳を下げて来たから、此処ぞと思つて、極りが悪かったが、思切つて例の品を呈した。大に喜ぶかと思ひの外、お糸さんは左して色を動かさず、軽く礼を言つて、一寸包みを戴いて、膳と一緒に持つて行つて了つた。唯其切で、何だか余り飽氣なかった。

何時間経つたか、久らくすると、部屋の障子がスツと開いた。振向いて見ると、思いがけずお糸さんが入口に蹲まつて、両手を突いて、先刻の礼を又言つてお辞儀をする。私は

何となく嬉しかった。お床を延べましようかというから、敷^とつて呉れというと、例の通り戸棚から夜具を出す時、昨夜も今朝も手に掛けて知っている筈の枕^{まくら}皮^{がわ}の汚に始めて気が附いて、明日洗^{あした}いましょうという。なに、洗濯屋に出すから好^いいと言つても、此^{こん}様な物を洗^{ぞう}うのは雑作もないといつて聴かなかつた。私は又嬉しくなつて、此^{こん}様な事なら最^{もつ}と早く敬意を表すれば好かつたと思つた。

お糸さんは床を敷^とつて了うと、火鉢の側^{そば}へ膝^{いざ}行り寄つて火を直しながら、「本^{ほん}当^とに嘸^{さぞ}御不自由でございませうねえ、皆^{みんな}氣の附かない者ばかりの寄^{より}合^{あい}なんですか。どうぞ何なりと御遠慮なく仰^{おつしや}有つて下さいまし。然う申しちゃ何ですけど、他^{ほか}のお客は随分ツケツケお小言^{おつ}を仰^{おつ}しやいますけど、一番さん（私の事だ）は御遠慮深くつて何にも仰^{おつ}しやらないから、ああいうお客様は余計氣を附けて上げなきや不^{いけ}好^{ない}。本^{ほん}当^とにお客^{きやく}様が皆^{みんな}一番さんのようだと、下宿屋も如何^{どう}様に助かるか知れないツてね、始^{しよつ}終^{ちゆう}下でもお噂^{うわさ}を申して居^おるンでございますよ……」

無論半襟二掛の効^{ききめ}能^{うかつ}とは迂濶^{うかつ}の私にも知れた。平生の私の主義から言えば、お糸さんは卑劣だと謂わなければならんのに、何故だか私は左程にも思わないで、唯お糸さんの媚^こびて呉れるのが嬉しかった。

小女^{ちび}がバタバタと駈^いけて来て、卒^{いきなり}然障子をガラツと開けて、

「あの八番^{ちび}さんで、御用が済んだら、お糸さんに入らッしゃいッて。」

「何だい？」

小女^{ちび}が生意気になけ無しの鼻を指して、

「これ……」

「そう。」

お糸さんは挨拶も^{そこそこ}々に私の部屋を出て行つたが、ツイ其処^{そこ}らで立止つた様子で、

「今お帰り？　大變御緩^{ごゆつく}りでしたね。」

歸つて来たのは隣の俗物らしく、其声で何だか言うと、又お糸さんの声で、

「あら、本^{ほん}当^と？　本^{ほん}当^とに買つて来て下すつたの？　まあ、嬉しいこと！　だから、貴^{あなた}方は

実^{じつ}が有るツていうンだよ……」

してみると、お糸さん^{むか}に對つて敬意を表するのは私ばかりでないと見える。

私がお糸さんに接近する目的は人生研究の爲で、表面上性慾問題とは關係はなかつた。が、お糸さんも活物いきもの、私も死んだ思想に捉われていたけれど、矢張活物やつぱりいきものだ。活物いきもの同志が活きた世界で顔を合せれば、直ぐ其処に人生の諸要素が相轢あひれきしてハズミという物を生ずる。即ち勢いきおいだ。此勢いきおいを制する人でなければ、人間一定の通用が出来ぬけれど、私の様な斗筭やくざもの輩になると、直ぐ其勢いきおいに制せられて了つて、吾は吾の吾ではなくなつて、勢いきおいの自由になる吾いきおい、勢いきおいの吾になつて了う。困つたものだが、仕方がない。私は人生研究の爲お糸さんに接近しようと思つただけで、接近しようとする、忽ち妙なハメになつて、二番さんの八番さんだのという番号附けになつて俗物共の競争圈内に不覚捲込ついまきこまれて了つた。又捲込まきこまれざるを得ないのは、半襟二掛ばかりの効能ききめじゃ三日と持たない。直消すぐえて又元の木阿弥になる。二掛の半襟は惜しくはないが、もう斯うなると、勢いきおいに乗せられた吾が承知せぬ。憤然やつきとなつて二日二晩も考えた末、又一策を案じ出して、今度は昼のお糸さんの手隙てすきの時に、何とか好加減いいかげんな口実を設けて酒を命じた。酒を命ずればお糸さんが持つて来る、お糸さんが持つて来れば、些ちつとの間まならお酌もして呉れる、お糸さんのお酌で、酒を飲んで酔えば、私にだつて些ちつとは思ふ事も言えて打解うちとけられる。思ふ事を言つて打解うちとけけて如何どうする氣だつたか、それは不分明だつたけれども、兎に角打解うちとけたかつたの

で、酒を命じたら、果してお糸さんが来て呉れて、思う通りになった。

「じゃ、何ですネ」と未だ一本も明けぬ中から、私は真紅になつて、「貴女は一杯喰わされたのだ。」

「大喰わされ！」とお糸さんは烟管を火鉢の角でポンと叩いて、「正可女房子の有る人
 と思いませんでしたもの。好加減なチャラツポコを真に受けて、仙台くんだり迄引張り
 出されて、独身でない事が知れた時にや、如何様に口惜しかったでしょう。寧ろ其時帰ッ
 ちま了や好かつたんですけど、歸つて来たつて、家が有るンじや有りませんし、人の厄介
 になつて苦勞する位なら、日陰者でもまだ其方が勝かと思つたもんですからね、馬鹿さね
 え、貴方、言いなり次第になつて半歳も然うして居たんですよ。そうすると、私の事が
 いつかお神さんに知れて、死ぬの生るのという騒ぎが起つてみると、元々養子の事だから
 ……」

「養子なんですか？」

「ええ、養子なんですとも。養子だから、ほら、私を棄てなきや、看す看す何万という身
 台を棒に振らなきやならんでしよう？ ですから、出るの引くのと揉め返した挙句が、詰
 る所私はお金で如何にでもなると見括つたんでしよう、人を入れて別話を持出したから、

私あたしやもう踏ふんだり蹶けたりの目に逢あわされて、口惜くやしくツて口惜くやしくツて、何だかもうカツと逆さか上のぼせツ了しまつて、本ほん当とに一時じは井戸川いどかわへでも飛と込こんだと思おもひましたよ。」

「御ごもつとも尤もつともです。」

「ですけど私あたしが死しんじまや、幸手屋さつてやの血統ちすじは絶たえるでしょう？ それでは御先祖様ごせんぞさまにも、又ね、死んだ親達おやさまにも済すまないと思おもつて、無分別むぶんべつは出でしませんでしたけど、余あまり口惜くやしかつたから、お金も出でそうと言いつたのを、そんなお金かねなんぞに目めをくれるお糸いとさんじやない何か言いつて、タン力を切きつてね、一文もんも貰もらわずに、頭の物ものなんか売う飛とばして、其そを持もつて歸かえつて来たは好よかつたけど、其代り今じやステンテンで、髪結かみゆい銭せんも伯母おばさん済すみませんがつという始末はつまつですのさ。余程よっぽど馬鹿ばかですわねえ。」

「いや。面白い気象きさうだ。」

「ですから、私あたしは、貴方あなたの前まえですけど、もうもう男おとこは懲こり々り。そりやあね、稀たまには旦那だんなのような優しい親切しんせつなお方も有ありますけど、どうせ私あたしのような者ものの相手あひだになる者ものですもの、皆みな其様そのさまな薄情はくじやうな碌ろくでなしばかりですわ。」

「いや、御尤ごもつとももです。」

「まあ、自分の勝手勝手なお饒舌しゃべりばかりしていて、お爛かんが全すつ然かり冷さめ了ちやつた。一寸ちよつと直ちよつとして参まゐ

りましょう。」

「御尤もです……」

五十七

お糸さんがお爛^{かん}を直しに起^たつた隙^{ひま}に、爰^{ここ}で一^{ちよつと}寸^と国元の事情を吹^{ふい}聴^{ちよう}して置く。嘗^{ちやう}て私が学校を除籍せられた時、父が学資の仕送りを絶つたのは、斯^こもしたら或は帰つて来るかと思つたからだ。ところが、私が如何^{どう}にか斯うにか取^{とり}続^{つづ}いて帰らなかつたので、両親は独息子^{ひとりむすこ}を玉^{たま}なしにしたように歎いて、父の白髪^{しろがみ}も其時分僅^{あいだ}の間に滅切^{めつき}り殖^ふえたと云う。伯父が見兼ねて、態々^{わざわざ}上京して、もう小説家になるなどは言わぬ、唯是非一度帰省して両親の心を安めろと懇^{ねん}に諭^{ごうざと}して呉れた。そう言われて見ると、夫^{それ}でもとも言兼ねて、私は其時伯父に連れられて久振で帰省したが、父の面^{かお}を見るより、心配を掛けた詫^どをする所^{ところ}が、卒^{いきなり}然^{たつと}先^{ゆえん}ず文学の貴^{たつと}い所以^{ゆえん}を説いて聴かせて、私は墮落したのじやない、文学に於て向上の一路^{みいだ}を看出^{みい}したので、墮落なんぞと思われては心外だと思つて懸ると、氣の練れた父は敢^さて逆^{さか}らずに、昔^{むかし}者^{もの}の己^{おれ}には然^{おれ}ういう六^{むす}かしい事は分らぬから、己^{おれ}はもう何にも言わ

ぬ、お前の思う通りにしろだが、東京へ出てから二年許りの間に遣つた金は、地所を抵当に入れて借りた金だ。己は無学で働きがないから、己の手では到底も返せない。何とかしてお前の手で償却の道を立て呉れ。之を償却せん時には、先祖の遺産を人手に渡さねばならぬ。それではどうもお位牌に対しても済まぬから、己は始終其が苦になつての……と眼を瞬かれた時には、私も妙な心持がした。で、何にも当はなかつたけれど、其式の負債は直き償却して見せるように広言を吐き、月々なし崩しの金額をも極めて再び出京したが、出京して見ると、物価騰貴に付き下宿料は上る、小遣も余計に入る、負債償却の約束は不知空約束になつて了つた。その稍実行の緒に就いたのは当り作が出来てからで、夫からは原稿料の手に入る度に多少の送金はしていたけれど、夫とても残らず負債の方へ入れて了うので、少しも家計の足しにはならなかつた。父は疾うに県庁の方も罷められて、其後一寸学校の事務員のような事もしていたが、それも直き又罷められて全く収入の道が絶えたので、父も母も近頃は心細さの余り、遂に内職に観世撚を撚り出したと云う。私は其頃新進作家で多少売出した頃だつたから、急に気が大きくなり、それに天性の見栄坊も手伝つて、矢張某大家のように、仮令襟垢の附いた物にもせよ、兎に角羽織も着物も対の飛白の銘仙物で、縮緬の兵児帯をグルグル巻にし、左程悪くもない眼に金縁眼

鏡^ねを掛け、原稿料を手に入れた時だけ、急に下宿の飯を不味^{まず}がつて、晩飯には近所^レの西洋料理店^{ストーラント}へ行き、髭の先に麦酒^{ビヤ}の泡を着けて、万丈の氣^{きえん}を吐いていたのだから、両親が内職^{かんぜより}に観世^よ撚^よを撚^よするという手紙を覽^みた時には、又一^{ちよつと}寸妙な心持がした。若し此事が夫^かの六号活字^{ごうかつじ}子の耳に入つて、雪江^{せつこう}の親達は観世^{かんぜより}撚^よを撚^よつてゐるそうだ、一寸^{ちよつと}珍^{ちん}だね、なぞと素破^{すっぱぬ}抜かれては余り名譽でない、名譽心も手伝つて、急に始末^{しまつぎ}氣を出し、夫^{それ}からは原稿料が手に入ると、直ぐ多少余分の送金もして、他^{ほか}の物を撚^よつても、観世^{かんぜより}撚^よだけは撚^よつて呉れるなど言つて遣^やつた。

で、此時もつい二三日前^{ぜんいさき}に聊^{せめ}かばかり原稿料が入つた。先月は都合が悪くて送金しなかつたから、責^{せめ}て此内十円だけは送ろうと、紙入の奥に別に紙に包んで入れて置いたのが、お糸さんの事や何や角^かやに取^{とり}紛^{まぎ}れてまだ其儘になつてゐる。それをお糸さんの身上話を聴くと、ふと想い出して、国への送金は此次に延期し、寧^{いっ}そ之をお糸さんに呈して又敬意を表そうかと思つた。が、何だか其では聊^{いささ}か相済まぬような氣もして何となく躊躇^{ちゆうちよ}せられる一方で、矢張^{やっぱり}何だか切^{しきり}に……こう……敬意を表したくて耐^たまらない。で、お糸さんが聴^{やが}てお爛^{かん}を直して持つて来て、さ、旦那、お熱い所を、と徳利^{とくり}の口を向けた時だった、私は到頭^{たま}耐^たらなくなつて、しかし何故だか節儉して、十円の半額金五円也を呈して、不覺^{つゐ}又敬意

を表して了った。

五十八

お糸さんに敬意を表して見ると、もう半端はんぱになったから、国への送金は見合せていると、母から催促の手紙が来た。其そのうち中に何だか父の加減が悪くて医者いしやに掛つているとかで、物入が多くて困るとかいうような事も書いてあつたが、例の愚痴ぐちだと思つて、其内に都合して送ると返事を出して置いた。其時は真しんに其積りあながで強ち氣休めではなかつたのだが、彼かれこ此取これとりまぎ紛れて不覺ついで其儘になつて一方では、五円の金は半襟二掛より効能ききめがあつて、夫それ以来お糸さんが非常に優待して呉れるが嬉しい。追々馴染なじみも重なつて常じょうだん談の一つも言うようになる。もう少しで如何どうにかなりそうに思えるけれど、何時迄経つても如何どうにもならんので、少し焦れ出して、又欲しそうな物を買つて遣つたり、連出して甘い物を食べさせたり、種々いろいろしてみたが、矢張やつぱり同じ事で手が出せない。お糸さんという人は滅多に手を出せば、屹度きつとひと甚い恥を搔かすけれど、一度手に入れたら、命懸けになる女だと、何故だか私は独りで極めていたから、危険けんのんで手が出せなかつたが、傍はたから観れば、もう余程妙

に見えたと見えて、他の客はワイワイいつて騒ぐ。下女迄が私の部屋を覗込んでお糸さんが見えないと、奥様は、なぞといつて調戯うようになる。こうなると、お神さんも目に余つて、或時何だか厭な事をお糸さんに言つたとかで、お糸さんが憤つていた事もある。私は何だか面白いような焦心たいような妙な心持がする。それで夢中になつて金ばかり遣つていたから、一度申訳に聊かばかり送金した限で、不覚国へは無沙汰になつてゐる中に、父の病氣が矢張好くないとて母からは又送金を求めて来る。遂に伯父からも注意が来た。其時だけは私も少し氣が附いて、急いで、書掛けた小説を書上げて若干かの原稿料を受取つたから、明日は早速送金しようと思つていた晩に、お糸さんが切りに新富座の当り狂言の噂をして観たそうな事を言う。と、私も何だか観せてやり度なつて、芝居だつて観ように由つては幾何掛るもんかと、不覚口を滑らせると、お糸さんが例になく大層喜んだ。お糸さんは何を貰つても、澄して礼を言つて、其場では左程嬉しそうな面もせぬ女だったが、此時ばかりは余程嬉しかつたと見えて、大層喜んだ。

もう後悔しても取反しが附かなくなつて、止むことを得ず好加減な口実を設けて別々に内を出て、新富座を見物した其夜の事。お糸さんを一足先へ還し、私一人後から漫然と下宿へ歸つたのは、夜の彼此十二時近くであつたらう。もう雨戸を引寄せて、入口の

大ランプも消してあつた。跡仕舞あとじまいをしているお竹ねむが睡ねむたそんな声でお帰かへンなさいと言つたが、お糸さんの姿は見えなかつた。

部屋へ来てみると、ランプを細くして既もう床も敷とつてある。私は柵ますでお糸さんと膝を列べている時から、妙に氣が燥いらつて、今夜こそは日頃の望をと、芝居も碌に身に染しみなかつた。時々ふと氣が變つて、此こん様な女に關係しては結果が面白くあるまいと危ぶむ。其側そのそばから直ぐ又今夜こそは是が非でもという氣になる。で、今我部屋へ来て床の敷とつてあるのを見ると、もう氣も坐そろになつて、余の事よなぞは考えられん。今にも屹度きつと来るに違ちがひない、来たら……と其事ばかりを考えながら、急いで寢衣ねまきに着易きえて床へ入ろうとして、ふと机の上を見ると、手紙が載せてある。手に取つて見ると、国からの手紙だ。心は狂つていても、流石さすがに父の事は氣になるから、手早く封を切つて読むと、まず驚いた。

五十九

此手紙で見ると、大した事ではないと思つていた父の病氣は其後そのご甚だ宜しくない。まだ医者が見放したのでは無いけれど、自分は最う到底とても直らぬと覺悟して、切しきりに私に会

たがつてゐるそうだ。此手紙御覽次第直様御帰国待入申候と母の手で狼狽えた文
 体だ。

私は孝行だの何だのという事を、道学先生の世迷言のように思つて、鼻で遇らつてい
 た男だが、不思議な事には、此時此手紙を読んで吃驚すると同時に、今夜こそはと奮り
 立つていた氣が忽ち萎えて、父母が切りに懷かしく、何だか泣きたいような氣持になつ
 て、儘になるなら直にも発ちたかつたが、こうなると当惑するのは、今日の觀劇の費用が
 思つたよりも嵩んで、元より幾何もなかつた懷中が甚だ輕くなつてゐる事だ。父が病氣に
 掛つてから、度々送金を迫られても、不覺怠つていたのだから、家の都合も嘸ぞ悪からう。
 今度こそは多少の金を持つて歸らんでは、如何に親子の間でも、母に対しても面目ない。
 といつて、お糸さんに迷つてから、散々無理を仕尽した今日此頃、もう一文の融通の余
 地もなく、又余裕もない。明日の朝二番か三番では是非発たなきやならんかと、当惑の眼を
 閉じて床の中で凝と考えていると、スウと音を偷んで障子を明ける者が有るから、眼を開
 いて見ると、先刻迄待憧れて今は忘れてゐるお糸さんだ。窃と覗込んで、小声で、「も
 うお休みなすつたの?」といいながら、中へ入つて又窃と跡を閉めたのは、十二時過で遠
 慮するのだつたかも知れぬが、私は一寸妙に思つた。

「どうも有難うございました」、とのめるように私の床の側そばに坐りながら、「好かつたわねえ」、と私と顔を看合せて微笑にっこりした。

今日は風呂日だから、帰ってから湯へ入ったと見えて、目立たぬ程に薄うすりと化粧けわっている。寝衣ねまきか何か、袷あわせに白地しろじの浴衣ゆかたを襲かきねたのを着て、扱しごきをグルグル巻にし、上に不斷の羽織うつりをおっている秩序しとけない姿も艶めかしくて、此人には調和なまが好い。

「一本頂戴よ」、といいながら、枕元の机の上の巻烟草まきたばこを取ろうとして、袂たもとを唧くわえて及およびし腰こしに手を伸ばす時、仰向あおむきに臥ねている私の眼の前に、雪を欺あざむく二の腕が近々と見えて、懐かしい女の香かが芬ぶんとする。

「何だかまだ芝居に居るような気がして相済まないけど」、とお糸さんが烟草たばこを吸付けてフウと烟けむりを吹きながら、「伯母さんの小言せりふが台詞せりふに聞えたり何かして、如何どんなに可笑おかしいでしょう」、と微笑にっこりした所は、美しいというよりは、仇ツぽくて、男殺しというのは斯ういう人を謂うのかと思われた。

一つ二つ芝居の話をしていると、下のボンボン時計が肝癰かんしやくを起したようにジリジリボンという。一時だ、一時を打つても、お糸さんは一向平気で咽喉のどが乾かわくとかいって、私の湯呑で白湯さゆを飲んだり何かして落着いている所は、何だか私が如何どうかするのを待ってる

ようにも思われる。と、母の手紙で一時萎えた気が又振起つて、今朝からの今夜こそ
 は即ち今が其時だと思つと、漫心になつて、「泊つてかないか？」と私が常談ら
 しくいうと、「そうですね。家が遠方だから泊つてきましようか」と、お糸さんも矢
 張常談らしく言つたけれど、もう読めた。卒然手を執つて引寄せると、お糸さん
 は引寄せられる儘に、私の着ている夜着の上に凭れ懸つて、「如何するのさ？」と、私の
 面を見て笑っている……其時思い掛けず「親が大病だのに……」という事が、鳥影のよ
 うに私の頭を掠めると、急に何とも言えぬ厭な心持になつて、私は胸の痛むように顔を顰
 めたけれど、影になつて居たから分らなかつたのだらう、お糸さんは執られた手を竊と離
 して、「貴方は今夜は余程如何かしてらツしやるよ」と笑つていたが、私が何時迄経つ
 ても眼を瞑っているの、本當にお眠いのお邪魔ですわねえ。どれ、もう行つて寐ま
 しょう。お休みなさいまし」と、会釈して起上つた様子で、「灯火を消してきますよ」
 という声と共に、ふツと火を吹く息の音がした。と、何物か私の面の上に覆さつたようで、
 暖かな息が微かに頬に触れ、「憎らしいよ！」と笑を含んだ小声が耳元でするより早く、
 夜着の上に投出していた二の腕を痛か抓られた時、私はクラクラとして前後を忘れ、人間
 の道義畢、竟何物ぞと、嗚呼父は大病で死にかかつて居たのに……

六十

あくるあさはや
翌朝は夙く発つ積だったが、発てなくなつた。尾籠な事には自ら尾籠な法則が有るから、既に一種の關係が成立つた以上は、女に多少の手当をして行かなきゃならん——と、さ、私は思わざるを得なかつた。見栄坊だから、金が無くても金の有る風をして、紙入を叩いて遣つて了うと、もう汽車賃も残らない。なに、父はまだ危篤というのじやなし、一時間や二時間発つのが後れたつて仔細は無からうと、自分で勝手な理窟を附けて、女には内々で朝から金策に歩いたが、出来なかつた。昼前に一寸下宿へ帰ると、留守に国から電報が着いていた。胸を轟かして、狼狽てて封を切つて見ると、「父危篤直戻れ」だ。之を讀むと私はわなわなと震え出した。卒然下宿を飛出して、血眼になつて奔走して、辛うじて聊かの金を手に入れたから、下宿へも帰らず、其足で直ぐ東京を發つて、汽車の幾時間を藻掻き通して、国へ着いたのは其晩八時頃であつた。

ステーション
停車場で車を僦つて家へ急ぐ途中も、何だか氣が燥つて、何事も落着いて考えられなかつたが、片々の思想が頭の中で狂い廻る中でも、唯息のある中に一目父に逢いたい逢

いたいと其ばかりを祈っていた。時々ふツと既もう駄目だろうと思うと、雖きりでも刺されたように、急に胸がキリキリと痛む。何とも言えず苦しい。馴染なじみの町々を通つても、何処どこを如何どう車が走るのか分らない。唯車上で身を揉んで、無暗むやみに車夫を急立せきたてた。車夫が何だか腹を立てて言つたが、何を言っているのか、分らない。唯無暗むやみに急立せきたてるばかりだ。

漸おそくの想おもいで家うちへ着くと、狼狽あわてて車を飛降りて、車賃も払ったか、払わなかったか、卒いきなり

然さ門内へ駆込んで格子戸を引明けると、パツと灯火あかりが射して、其光の中に人影がチラチラと見え、家内うちは何だか取込んでいて話声がやが譟さわ然と聞える中で、誰だか作さん——私の

名だ——作さんが着いた、作さんが、と喚わめく。何処からか母が駈出して来たから、私が卒いきなり然さ、「阿父おとうさんは？……」と如何どうやら人の声のような皺しやがれ噺ばなしで聞くと、母は妙な面かお

をしたが、「到頭いけなか不好ふつたよ……」というより早く泣き出した。私はハツと思うと、気が遠くなって、茫然として母が袖を顔あてに当て泣くのを視ていたが、ふと何だか胸が一杯になつて泣こうとしたら、「まあ、彼方あつちへお出でなさい」と誰だか袖を引張るから、見ると従弟いとこだ。何処へ何しに行くのいだか、分っているような、分っていないような、変な塩あんば梅いだったいが、私は何だか分つてゐる積つもりで、従弟いとこの跟あとに従ついて行くと、人が大勢車座になっている明かるい座敷へ来た。と、急に私は何か母に聞きたい事が有るのを忘れていたよう

な氣持がして、母は如何どうしたろうと後うしろを振向く途端に、「おお作か」、という声が俄にわかに寂然んとなつた座敷の中うちに聞えたから、又此方こっちを振向くと、其処に伯父が居るようだ。夫から私は其処へ坐つて、何でも漫やたらに其処に居る人達に辞儀をしたようだったが、其そのうち中に如何どういう訳だつたか、伯父の側そばへ行く事になつて、側そばへ行くと、伯父が「阿父おとうさんも到頭こんな此様やうになられた」、といいながら、側そばに臥ねている人の面かおに掛けた白い物を取除とりけたから、見ると、臥ねて居る人は父で、何だか目を瞑ねむつてゐる。私は其その面かおを凝じつと視ていた。すると、何時いつの間にか母が側そばへ来ていて、泣声で、「息を引取る迄ね、お前に逢いたがりなすつてね……」というのが聞えた。私はふツと目が覺めた、目が覺めたような心持がした。ああ、父は死んでゐる……つい其処に死んでゐる……骨と皮ばかりの瘦果てた其死顔がつい目の前に見える。之を見ると、私は卒然として、「ああ濟すまなかつた……」と思つた。此刹那に理窟はない、非凡も、平凡も、何もない。文士という肩書の無い白地しろじの尋常ただの人間に戻り、ああ、濟すまなかつた、という一念になり、我を忘れ、世間を忘れて、私は……私は遂に泣いた……

後で段々聞いて見ると、父は殆ど碌な療養もせずに死んだのだ。事情を知らん人は寿命だから仕方がないと言つて慰めて呉れたけれど、私には如何しても然う思えなかつた。全く私の不心得で、まだ三年や四年は生延びられる所をむぎむぎ殺して了つたように思われてならなかつたから、深く年来の不孝を悔いて、責て跡に残つた母だけには最う苦勞を掛けたくないと思い、父の葬式を済せてから、母を奉じて上京して、東京で一戸を成した。もう斯う心機が一転しては、彼様な女に關係している氣も無くなつたから、女とは金で手を切つて了つた。其時女の素性も始めて知つたが、当人の言う所は皆虚構だつた。しかし其様な事を爰で言う必要もない。止めて置く。

で、生来始めて稍真面目になつて再び筆硯に親しもうとしたが、もう小説も何だか馬鹿らしくて些とも書けない。泰西の名家の作を読んで見ても、矢張馬鹿らしい。此様な心持で碌な物が出来る筈もないから、評判も段々落ちる、生活も困難になつて来る。もう私もシユン外れだ。此処らが思切り時だろうと思つて、或年意を決して文壇を去つて、人の周旋で今の役所へ勤めるようになったが、其後母の希望を容れて、妻を迎え、子を生ませると、間もなく母も父の跡を追つて彼世へ逝つた。

これが私の今日迄の経歴だ。

つくづく考えて見ると、夢のような一生だった。私は元来実感の人で、始終実感で心を苛めていないと空疎になる男だ。実感で試験をせんと自分の性質すら能く分らぬ男だ。それなのに早くから文学に陥って始終空想の中に漬つていたから、人間がふやけて、秩序がなくなつて、真面目になれなかつたのだ。今稍真面目になれ得たと思うのは、全く父の死んだ時に経験した痛切な実感のお底で、即ち亡父の賜だと思ふ。彼実感を経験しなかつたら、私は何処迄だらけて行つたか、分らない。

文学は一体如何いう物だか、私には分らない。人の噂で聞くと、どうやら空想を性命とするもののように思われる。文学上の作品に現われる自然や人生は、仮令えば作家が直接に人生に触れ自然に触れて実感し得た所にもせよ、空想で之を再現させるからは、本物でない。写し得て真に逼つても、本物でない。本物の影で、空想の分子を含む。之に接して得る所の感じには何処にか遊びがある、即ち文学上の作品にはどうしても遊戯分子を含む。現実の人生や自然に接したような切実な感じの得られんのは当然だ。私が始終斯ういふ感じにばかり漬つていて、実感で心を引締めなかつたから、人間がだらけて、ふやけて、やくぎが愈どやくぎになつたのは、或は必然の結果ではなかつたか？ 然らば高尚な純正

な文学でも、こればかりに溺れては人の子も戕^{そこな}われる。況^{いわ}んやだらしない人間が、だらしない物を書いているのが古今^{ここん}の文壇の、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、

(終)

二葉亭が申します。此稿本は夜店を冷かして手に入れたものでござりますが、跡は千切れてござりません。一寸お話中に電話が切れた恰好でござりますが、致方がござりません。

青空文庫情報

底本：「平凡・私は懷疑派だ 小説・翻訳・評論集成」講談社文芸文庫、講談社

1997（平成9）年12月10日第1刷発行

底本の親本：「二葉亭四迷全集 第一巻」筑摩書房

1984（昭和59）年11月

※底本には「本書は、『二葉亭四迷全集』第一、二、三、四、七巻（昭和五十九年十一月〜平成三年十一月 筑摩書房刊）を底本として使用し、新漢字・新かなづかいにして、若干ふりがなを加えた。本文中に今日から見ても不適切と思われる言葉づかいがあるが、作品の時代背景、文学的価値等を考え、著者が故人でもあるため、そのままとした。」との記載がある。

※本作品中には、身体的・精神的資質、職業、地域、階層、民族などに関する不適切な表現が見られます。しかし、作品の時代背景と価値、加えて、作者の抱えた限界を読者自身が認識することの意義を考慮し、底本のままとしました。（青空文庫）

入力：砂場清隆

校正：松永正敏

2003年1月15日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

平凡

二葉亭四迷

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>